

新しい社会運動の模索

——〈スピ・シン主義〉視点からの考察——

伊 田 広 行

要旨

世界中で起こっているひどいことを通じて、〈スピリチュアリティ〉というものに気づいていく「大きな転換の時代」に至りつつある。大きなつながりの一部である私たち一人一人は、社会的な責任の遂行として広義社会運動に関わるのは当然である。ではその社会運動はどのようにあるべきなのか。それは、あらゆる領域に渡る総合的なものでなくてはならず、多様性、エンパワメントなどをキーワードに、市民一人一人の〈スピ・シン主義〉意識を深化させ広げるネットワーク拡大運動とならねばならない。一人一人が心をこめて静かに伝える、さざなみのような広がり方の特性をもつ社会運動でなくてはならない。

キーワード：〈スピリチュアル・シングル主義〉、アート、アクティビスト、
ワークショップ型学び

目 次

- 1 個人の生き方と運動と教育、全体をつなげて捉える基本視点
- 2 新しい社会運動を考える
 - 2-1 文化を含めた変革へ
 - 2-2 政治との距離感
 - 2-3 〈スピ・シン主義〉意識のネットワーク拡大運動
 - 2-4 未来社会の雛型を今、ここから
- 3 新しい社会運動の具体像の一例

1 個人の生き方と運動と教育、全体をつなげて捉える基本視点

なぜ保守化・右傾化が進むか

拙稿[1999]に書いたように日本は腐りつつある。その典型は、自民党自体というよりも、改憲論議を進め、有事法制やメディア規正法を成立させるような自民党政権を維持し続ける多数派国民の状況だ¹⁾。一昔前なら政権が転覆するかどうかぐらいの大きな問題が次々と通過するのはなぜかといぶかしがる論調が一部にあるが、僕にとっては少しも不思議ではない。この25年間の空気を感じ取ってきた者として当然こうなるだろうという予想範囲内での変化に過ぎない。なぜ労働運動が低迷してきたのかという問いをもち、なぜフェミや環境運動も頭打ちなのかという問いを自分のものとして考えつづけてきた者にとって、昨今の右傾化・保守化はすでに見た風景に過ぎない。例えば、フェミニズムやパート問題に鈍感な人がメディア規制や有事法制に本質的に抵抗できるとは思えない。

過去の権力批判、天皇制批判、戦争批判と同じレベルで止まっている人のもつ「危機感」とは違う水準で僕は危機を感じてきた。だから〈スピリチュアリティ〉と「シングル単位論」といつてきたのだ。〈スピリチュアリティ〉の感覚に活路があると僕は思ったのだ。

古いスタイルの運動にも一定の意味は依然としてあるが、古い運動はそこに〈スピ・シン主義〉の視点がないという点で、批判される必要があると思う。西欧では左翼運動の良質な部分が70-80年代にポストモダン水準で成長・発展していった。フェミや環境運動という新しい社会運動に対応するような思想と理論の進展があった。それを反映して、低成長・成熟時代に対応した「新しい社会民主主義システム」への移行が進んでいった。

だが、日本はそうでなく、旧態依然の成長対応の家族单位的な社会経済システムを維持し続けてきた。ポストモダン論など流行思想として消費されただけだった。それ

1) 2001年に日本がアメリカの対アフガン戦争に加担するときの与党議員の発言。「自衛隊は戦力であり、戦力でなし」。「米軍戦艦がトマホーク発射したところは、戦場ではない」。国会、政治というものが茶番であることをこれら発言は如実に示した。こんなバカなやつら相手にやっつけられない。その政治を許す国民多数派に興味がもてない。それが正直な感想だ。

に対抗する側が、過去の社会運動を新しい水準に進展させることができず、古いままにとどまったため、時代遅れとなり、国民の支持を失い、日本全体に社会運動の経験が失われていったのである。僕はこのことを「シングル単位論」で繰り返し指摘してきた²⁾。だから、今、この殺伐とした腐敗状況を変えるには、根本的な対応があると考えて、〈スピ・シン主義〉を提唱している。

そして日本だけじゃなく、環境問題や戦争など世界全体の行き詰まりまで考えるなら、いろいろ世界中で起こっているひどいことを通じて、〈スピリチュアリティ〉というものに気づいていく「大きな転換の時代」になりつつあると考えている。

社会運動をして当然

僕たちは社会に生きている。地球生態系全体と繋がっており、過去の人たち、分業している多くの人たちと繋がっている。僕の体も能力の多くも、僕が作ったものではない。命を不当に奪われたり、さげすまれたり、悩んでいる多くの人がある。自分にできることをして、少しでも誰か他の人、環境、社会のためになれば、それはうれしいことである。だから、政治や社会運動に関わるのは当然だと思う。そういうことに関心がないというのが信じられない、というか、自分としてかっこ悪い。あまりにも限定されすぎ、奪われすぎているから。大事なところを抜かれているって感じだから。洗脳されていることに気づいていないから。

例えば、今の社会に煽られて消費しまくってそのことに何の疑問も感ぜず、「自分の金をどう使っても、あなたに文句いわれる筋合いはない」「別に何してもいいじゃん」というのは、かっこ悪い。会社に安く適当に使い捨て利用されているのに、それもわからず、権利意識をもたずにやられっぱなしの人には、しっかりしようよといいたいし、社会的責任もはたしていないとメッセージしたい。(分かっている、逆利用するのはいいけど。)

ここで社会運動というのは、狭義の運動のことだけをいうのではない。たとえば、保育士が、心をこめていてねいに子どもに関わっているなら、それは社会的な活動だと思う。その保育所でどうすればもっといい保育ができるかについて職員同士が話し合い、親たちと交流し、地域に影響を与えているとき、それは社会的活動である。

2) 拙著 [1998], 拙稿 [2000a] [2000b] [2001] など

僕は、多くの人たちを知っている。この日本で、どうしようもないほど愚かな政治が行われ、殺伐とした空気が社会全体を覆っていても、おかしいものはおかしいと言い、声を上げて行動している友人たちをたくさん知っている。世界中に、おかしな社会を変えようとする良心的な人々がいる。人のために手を差し出す人たちがいる。自分たちのために、勇気をもって声を上げている当事者の運動がある。

そういう“まともなもの”には尊敬の念をもつ。誰がなんと言おうと、僕は感じるから、そう思う。

そうした社会運動をしている人たちの精神の底には、きれいな思い、〈たましい〉がある。それは単なる、自己犠牲、義務感でやっているのではない。どのように生きたいか、生きざるを得ないかということに関わっている。

家族や友人や恋人をいい感じで大切にしている人がいる。それは、義務や自己犠牲だけか。そうではないだろう。同じことである。自分というものを「全体」から切断せず、自己の拡張として、自分がしたいこととしてするものが、社会運動である。理屈でなく突き動かされる思いや直感によって、魅力的な、望ましい生き方としておこなうものである。僕たちは、幸せになりたい、承認されたいと思って生きている。堅い言い方だが、ひとりひとりが社会の構成員であり、一部なんだから、「満足する、承認される」というその中身として社会的な活動が入ってくるのは当然である。

ただ、その方法、かかわり方にはバリエーションも必要だし、以前の社会段階に対応したような社会運動のやり方には改善すべきところもある。とくに、容易に変わらない社会の現実に、諦めたり燃え尽きて、社会的活動から離れる人も多かったことを見据えるならば、社会に関わる新しいスタイルが確立されなくてはならないと思う。政権をとるだけ、選挙に勝つだけが政治なのか。そんなわけがない。安易に啓発したり戦ったりすればいいとする従来型の運動をしていては、先細りだ。うんざりだ。むしろ、人間にはひどい面もあるし、中枢権力（政治）をめぐってはおぞましいものがのさばっているから、社会は簡単には変わらないという覚悟をもったほうがいい。そういう「絶望」を一回潜り抜け、人間と社会の闇もしっかり見据えて、それでも社会変革に「希望」をもつようなスタイルを編み出すことが大事だ。

僕らは、一挙に世界が変わることには絶望しているが、話のわかる人やいい感じの人がいることも知っている。クソツタレの世界とクズどものために終わらない歌を歌

う人々がいることを知っている。絶望だけじゃつまらないから、絶望の後に、それでも生きていく力を見出したい。実際そうしてきた人たちがいっぱいいる。その人たちに勇気を与えられて僕は生きてきたし、他の人もそうだろう。僕たちは、世界を変えられるところの、世界の構成要素だ。

時代変化を認識し、古い運動スタイルを棄てよう

まだまだ僕より上の世代（年齢でいうと50歳以上の世代）が労働運動においても政治においても中心を担っている。もちろん素晴らしい生き方を続けてこられて今でもがんばっているというのはいいのだが、どうしても若い世代が増えないと感覚も新しくなっていくとおもう。20—30年前の感覚で今も居つづける人がいるとすれば、社会運動の進展にとって弊害である。若い世代のリーダーが積極的に養成される必要があると思うが、そのためにも旧来の殻を破る運動スタイルを、世代を超えてともに模索していかなければならない。

そのとき、まず確認しておかねばならないことは、一部の古い左翼にありがちな認識スタイルを変える必要があるということだ。例えば、「過去はよかったが、現在の運動は停滞・遅れている、それは自分たちのガンバリが足りないからだ」、「過去の運動スタイルと同じような高揚をつくろう」、「先進国社会は崩壊寸前だが、途上国人民は素晴らしく未来がある」、「このような社会になったのも階級的裏切り者、日和見主義者がいたからだ。自分は今でも原則を貫いているから今までの戦い方を続けていけばいい」、「結局社会が悪くなったのは大衆への啓蒙・宣伝活動が足りないからだ」、「最近の若者は感性が鈍くなった」というようなもの。

これは極端な例かもしれないが、労働組合や年配者が多い社会運動の集会・組織運営の古い言葉遣い・発想を聞いたり、運動の未来に対する危機感の少なさをみると、「昔のやり方でいいのだ」という感覚はまだ根強く残っていると思う（既成政党に集まっている人たちにも同様の傾向がある）。

つまり従来から言われてきた次のような体質を早く払拭するしかないのだが、まだまだ「旧来の殻」から脱皮できていない人が多いように思う。その乗り越えるべき古い体質とは、前衛党的体質、代行主義的政治、拝金主義という名の既存の政治スタイル踏襲主義、国会の場での調整・駆け引き・妥協で大事なことが決まるとみる国会中心主義、党絶対主義（組織決定追従）、リーダー信奉主義、官僚的体質、選挙一辺倒

主義，過去のしがらみへの呪縛，人間関係の引きずり，過去のレベルでの批判，硬い組織のあり方（中央委員会，民主集中制，等），小さい組織安住主義，自己満足的サークル（たこつぼ）主義，中高年男性中心主義（女性は受付やアピール文読みだけ，若手に責任を委譲しない），時代の変化を無視する傾向，古臭い概念・言葉使い，メディアを利用できないセンス，アートのセンスのなさ，主体追求，主観的情勢分析，お説教啓蒙主義，大衆利用主義（大衆はバカである，またはその逆の「大衆は偉い」論，たとえば選挙分析で絶妙のバランス感覚などということ），動員主義，組織のための自己犠牲等など。

ではどうすればいいのか。それを考えているからこそ僕は、「新しい水準の人権」だとか〈スピ・シン主義〉などといっているのだが，状況認識で言うならば基本的には、「過去の段階を通過して，新しい社会段階に入っているので，もはや過去の運動スタイルでの高揚期待は間違いだ」とみるべきだろう。これを出発点として，以下，いろいろな角度から考察を加えておきたいと思う。

社会と個人の変革戦略の方向は？

僕は，シングル単位論や〈スピ・シン主義〉を説明するとき，それはポストモダン水準を意識したものだと言ってきた。だがそれは近代が終わったとか，僕自身が近代の呪縛から完全に離脱していると思っていることを意味しない。

ポストモダンとは，一般概念としては，近代の枠組みを相対化し，その後のパラダイムを総称するものであるが，僕が現時点で現実的に意味があるとみる「ポストモダン」は，「近代の後のまったく別もの」ではなく，近代の相対化の視点をもちながら，徹底して近代を進めることで，その変化を近代後期，さらには，脱近代の方向にすすめる動的なものである。

その意味で，シングル単位論は，フェミニズムがいう女性の権利擁護，積極的差別是正策（アファーマティブアクション），労働運動での法律に基づく抵抗運動などを全面的に支持するものであった。これまでの僕の本にははっきりと，近代の徹底の先に近代を乗り越えるのだという2段階の変革論の意図が書かれていた。今でもその考えに変更はない。

それは，いまだ日本では，個人が家族，会社，国家といった共同体に同調を強いられており，またそれを快樂（幸せ）と思う人々が多いという，「近代の徹底以前」の

状況を組み込んだ社会状況であったためであった。いわゆる「市民社会」に至っておらず、天皇制的なものは会社だけでなく、左翼や組合などの集団にも、根強く見られつづけてきたからであった。

そこで、それを変革していく意思として、僕はその共同体主義批判ということで、シングル単位論を、フェミニズムの文脈を中心に言ったわけで、その戦略方向は間違いない³⁾。しかし、しばしば受けた疑問は、「日本では欧米と異なる歴史があるからシングル単位は無理なんじゃないの」というものであった。

欧米の個人主義（社会運動の基礎になっている）には、確かに、欧米の宗教的歴史的條件が底支えしている。だから直輸入は無理であるのは当然だが、欧米といっても多様であるし、例えば北欧をみても、ジェンダー意識や環境保護意識は急激に変化した。それには、社会運動とそれを背景にした制度改革が、国民全体の意識変革に大きく影響したという事実がある。つまり、制度が意識を作る面である。日本でも、例えば従前賃金の8割を保障し、昇進を妨げない、男女ともがとれる育児休業制度ができれば、育児と仕事の両立への態度は一変することは間違いない。

そんな政治ができるはずがないというのは循環論でしかない。しかも、僕は日本で生まれ、平均的な意識をもった親に育てられたが、シングル単位的感覚をもつようになった。スピリチュアルな面も含めてどんどん変化している。友人や学生や講演参加

3) 田畑稔さんによる「アソシエーション論」というものがあって、社会の構成要素にはA共同体、B権力、C市場（商品交換）、Dアソシエーションという4類型が正三角錐関係にあるとみる。

アソシエーションとは、NPO、労働組合、協同組合、NGOなど、自由意志に基づいて、対等な関係で、共通の目的のために結合するものことで、そこでは結合の後も個の自律性・主権が保障されている。そして現代においてABCは危機を深化させているので、危機からの出口を、Dを拡大する方向で探るべきというのがその主張である。たとえば家族の問題に対しても、Dに近くなればいいと。

これは「国家、家族、市場の3領域を通じてシングル単位的関係に変えること」「非貨幣的關係としての〈スピ・シン主義〉」を提唱した方向とおおむね同一だが、そのアソシエーションといった後の具体化が大事なのではないかという印象もっている。アソシエーションが大事というだけなら、昔の疎外論、社会主義論と似ている。現実を批判・否定し、そこから希望の方向をいうのはわかるが、その具体像が大雑把なままでは、変革論としては不十分である。僕はそこを意識してシングル単位論や〈スピ・シン主義〉を展開している。アソシエーション論については、田端[1994]、大阪経済大学人間科学部編[2002]など。

者を見ていても、変わる可能性は十分あるとみる。

だから、歴史的文化的な差異によって運命論的に欧米の社会変革の知見を排除し、「日本（人）には無理、日本型の改革にしましょう」とするのでなく、欧米の社会制度の内容やその変革に至った経緯、とくにそれをもたらすに至った主体側の戦略などをみていくことこそが重要である。そしてそれとの対比で、自分が囚われている常識思い込み（例えば家族やジェンダーに関していかに日本の知識人も政治家も無思考で保守的か）を見直し、それに囚われない発想を打ち出すことが有効である。

したがって、むしろ社会運動としての総括は、どのような考え方・発想・戦略が欠落していたかという軸で行われなければならないだろう。

日本の現実的変革は多元化と天皇制？

とはいうものの、ことはもちろん現実的に考えられなくてはならないので、一般論だけでは不十分である。僕のこれまで書いたり話してきた「シングル単位」はもちろんその点で不足していた点があると思っている。だからこそ、シングル単位論の展開・発展として〈スピリチュアル・シングル主義〉論を書いている。

日本的共同体主義（家族単位社会）をシングル単位（の意識と組織）に変えるしかないが、欧米そのままの最終形態だけを直接移植はできないので、日本の現在の資源を使ってどう変えていけるか。

これに関して、宮台真司さんは、「個人が共同体的な所属を多元化・たこあし化」していくこととか、「天皇制の利用」が、日本では現実的という。共同体的道徳の外側を生きるものが増えればいいというのだ。これは、右翼的・保守的な表層の現状肯定を言っているのではもちろんなく、あえて、それと近いことを模倣し拡大し徹底することで、その限界を浮き彫りにしつつ、別物に転化するという側面をもった、ポストモダンの戦略なのだろうが、僕は、これに懐疑的である。

多様なところに所属する多元化は、もちろん現実的に有効な一手ではあるが、それだけでは決定的に足りない。というのは、それはすでに日本ではかなり進んでいるが、にもかかわらず拙稿[1999]で述べた「殺伐とした空気」が蔓延しているからだ。若者の「まったり」状況をかなり評価する宮台さんと僕との認識の差だろう。僕は、多元化としてもどこにどのように所属するかという質が大事と思う。そしてその中に、スピリチュアルなつながりの意識という部分が必要と思う。

会社で頑張りながら、他業種との交流会をもち、何かの研修を受けて、家族と週末遊園地に行き、釣りの趣味をもち、浮気をすれば「多元化」ではあるが、自民党的政治状況を一步も変えない。家族単位＝共同体主義意識を一步も超えない。子どもに何もスピリチュアルなものを伝えられない。現実のクソツタレ状況に対して、意識的な反体制、反暴力（非暴力）な行動がいろいろあるとおもう。その中で従来の日本人の共同体発想を乗り越える「シングル単位的個人」ができていくのであって、バイトしながらゲーセン行って、スケボーしてるだけじゃあ、新しい人間は生まれない。むしろ古い「オヤジ」の再生産だ。

また「天皇制の利用」についても、僕は単純に旧左翼的な反発をしているわけではないが、それでも、それじゃあダメだと思う。彼が、天皇制を「未規定的なもの、すごいもの」に感受性を開く契機とみるのは、ある種「現実的」な姿勢であって、決して悪い意味での「愚かな右翼の姿勢」ではまったくないことは分かる。その上でもなお、僕は、スピリチュアルな感覚を、いかに他のものと区別して、〈スピ・シン主義〉として育て上げたいかと思って、本稿を書いているわけで、その意味で、僕らも含めて日本人を捉えている「天皇制的なもの」を深い水準で否定していくような営みの中で、スピリチュアルになりたいと考えているのだ⁴⁾。共同体的道徳の外側を生きるためには、意識的に天皇制的なものを批判する営みがあると僕は思う。天皇制を肯定的に使っての「覚醒」など、僕が求めている質じゃない。

論理的に言って、「すごいもの」への覚醒に使える資源が「天皇」だけということはいえないし、それではシングル単位にならない。もし関わるとしても、自分にある天皇的なものへの幻想を見つめ、その中の良質なものが実は「天皇」などを越えて大きないのちのつながりであることに気づき、同時に、天皇制のもつ権力性を、共同体主義のダメさとして批判的に認識することが必要なのだ。

それが可能かと問われれば、可能だと答えよう。もちろん、答えの成否はわからない。〈スピ・シン主義〉論は、「可能じゃないか」ということを書こうとしている。それが成功しているか否かを判断するのは、読者であるあなただし、僕やあなたのこれからの実践にかかっている。

4) 右翼・保守の言論は、精神論・精神世界論と親和的だ。呼吸法、瞑想などを好むし、科学を超えるもの、絶対超越的なものも好む。つまり、スピリチュアルな感覚というだけでは非常にやばいことにもなりうる。

『沈黙の艦隊』に足りないもの

『沈黙の艦隊』はとても面白い作品だった。潜水艦の戦いがなんといっても「それいけー」てなもんで、「傲慢なアメリカをやっつけろ」という気分にならせる。勝つとわかっていてもどんな風に強大な敵をやっつけるのかという楽しみでグングン読ませる。そこに大きな構想を含む「政治」を入れてひきつけるから読んでいて飽きない。よくできている⁵⁾。

で、それを読んでの感想が、今の若手政治家もこんな感覚で、国家や世界政治、有事法制や政権交代を論じるのに、煮えたぎって、ワクワクして政治ゲームしてんだろうなあということだ⁶⁾。攻めてこられたらとか、対テロ戦争だとか、選挙だとか、構造改革だとか言っただけで、実はドーパミンがビュービュー出ていて、楽しんでるんだろうなあとおもった。机をドンとたたいて天下国家戦略を論じて楽しんでると。

何が足りないか。それは、左右、与野党、保守革新どっちであろうと、ウキウキしているということを自覚しておらず、ゲームに酔っていること、権力ゲームに酔っていることを自覚していない点、そのようなウキウキの恥ずかしさがわかっていないという点で、とても「男性原理的」であるということだ。

「冷めた“もう一つの目”」がないのだ。鳥の目、神の目という、上から全体をみる視点がないんだ。それは、定年退職後とか病気退職後、実は自分がいなくても会社も世界も動くということを知って、自分が一生懸命していたことがなんであったのかと気づく、そういう、鳥のような高さからみる実存的視点、総合的第三者的視点、つまりスピリチュアルな視点の欠如である。

「普通」の暮らしとは次のようなものである。仕事しているとき、苦勞しつつも実は、生き生きとしているのだ。興奮しているのだ。「あたりまえ・普通」とおもっていたことは、実は「限定・個別・特殊」だったのだが、そのことに気づかず不平を言

5) かわぐちかいじ [89-96] 『沈黙の艦隊』全32巻。潜水艦の戦いの迫力が売り物だし、男性中心的で「現実主義」という名の保守政治肯定の論調も目に付くが、ラストの方は核廃絶の理想論がだいふ出て様相が変わり、「自立せよ」という骨太のメッセージをもった、スケールの大きな作品である。

6) 「社会のために役立ちたい」「何で諦めちゃうんだよ」「諦めずに変えていこうよ、だから政治」という民主党若手議員の発言を目にして、僕は脱力である。こういう無邪気なことを言う政治家にヤバサを感じるねえ。

ったり、頑張っているつもりだったりするのが、「普通」の暮らしなのだ。視野が狭いのが「普通」の暮らしなのだ。

同じように、「正義だ、力だ、理想だ」と言って闘って、世界（政治）の先頭に立っているつもりするとき、ドーパミンはドバーだが、しかし、ゲームの外に出てみれば、それはゲームのなかの熱狂でしかないとわかる。学校でスポーツのクラブに入って、レギュラーを争って一生懸命練習して競争しているとき、しんどくても夢中なのだ。だが、クラブを辞めて冷めてみれば、あの熱狂でない世界もあるのだと気づく。テレビ討論で口から泡を飛ばして論争している人たちをみているとき、その内容を別にして、「戦い・優劣競争」が好きな人が多いことに気づく。「戦い」自体にのめりこんで、相手をやっつける快感に酔いしれているのだ。相手との話し合いを静かに行い、何かをともに作り出そうとする謙虚さ、あるいは何も語らずひっそりと行動によって示して暮らすというような姿勢でなく、相手をギャフンといわせて、勝利の雄たけびをあげたいというエネルギーに満ちて、目をぎらつかせて前のめりで論争している。

自分がここにおいて、テレビのショーとして消費されていること、自分の代わりがいくらでもいること、その論争をしても結局何も変わらないということ等をみようとしていない。この論争の外にいるまともな人たちの小さな声などに耳を貸そうとしていないのだ。だからテレビで論争している人たちのその「イキイキさ・ウキウキさ」がいやらしいのだ。

そのウキウキさが砂上の楼閣だと気づいていない愚かさ。その男性原理的な愚かさが、大きなうねりに利用され、あるいは乗っかって、有事体制整備という潮流を支えているということだろうと思う。国家がどうこう、世界軍事戦略がどうこう、戦争有事の際の行動がどうこうという架空議論は、前提がもうすでに、戦争潮流にのっているのだ。

そういう人たちにろくな奴はいない。なぜならその人たちは、その自分の話し方、存在の仕方スタイルそのものが、攻撃的でパワー的で男性原理的で変えるべきものであることに気づこうとしなからだ。

セクハラされて悔しい思いをしたという人の悲しみに心を寄せるなどということ重視しない。「そんなことは小さなこと」として、戦争になればもっとひどいことが起こるといのように、大きな権力や戦争を語ることに血眼になるのだ。ことの大小を現行政治秩序で測って、「小さなこと」を軽視して平気なのだ。タバコをふかすこと

やゴミを捨てることや自分の妻に横柄な口をきくこととか、手のひらを返したように選挙のときは演技をするとか、そういうことを平気でおこない、それは「大きなことの前では、小さなことだ」と軽視するのだ。「人権が大事」といいながら自分の権威主義的態度そのものが反人権的であることに気づこうとしないものたちはいっぱいいる。「小さなこと」を押し流して平気なのだ。捨てられて保健所で殺される多くの犬猫たちのことや、優しい言葉より、ビンター発や政治的駆け引きが現実だという感覚の人たち。

『サンデーモーニング』や『朝まで生テレビ』で議論しているとき、この世界に溢れている微細なエネルギーの美しさに目もくれず、大事なものは「目に見えるパワー＝現実」だというのが、田原総一郎的世界観なのだ。彼は善良なキャスター、ジャーナリストの一人であろう。だが彼の話し方をみていればよくわかる。戦後政治というもの男性性が。彼に代表されるような人々は、自分がこぼしているものが見えていない人だ。『沈黙の艦隊』でも何度、机をドンとたたき、大きな声で、自分の熱意、論理を語る人が多いか。酔っているのだ。自分の「正義」や「理想」に。相手に勝てる！と思うとき、エネルギーがグーンと内部から沸いているのだ。自分たちが見落としているものをみようとしなさい。大きな声で、相手を説き伏せること、力で押さえつけること、相手の上に馬乗りになることを目指して「男」たちは戦っている。『沈黙の艦隊』はそのような生態を如実に表した点で、面白い。

まとめよう。怒り、勝ち負けに燃えて、うきうきしているということ。自分の「正義や強さ」に酔ってしまっていること。それ自体が恥ずかしいし、それに気づいていないことが情けなく、かつ危険だということだ。(とすれば、今の若手政治家の選挙での張り切りぶりは……そこに振り返りがないうとき、ちょっと困りものだ。)

個人の変容を大事にする新しい社会運動

僕は、社会運動のあり方、それと連動した個人の生き方スタイルの提唱によって、変革の展望をもとうとしている。後に詳しく展開するその内容の基本視点を予告の形で簡単にまとめておきたい。

選挙と政党と労組を中心とした従来の政治参加と改革の運動でもなく、正義を語る者が差別者や政府を非難し一挙の変革をめざす（事実上反対だけ）とか、啓蒙すると

か、大きな構想を持たずに対症療法だけをしていくというスタイルでもないものをめざす。自分の闇や自分の利害と結びつけ、社会問題に矛盾をもちつつ臨むと同時に、多様性意識・エンパワメントの拡張として問題をとらえる。価値観自体の大きな変革を目指し、一人一人の内面からの成長を目標とする。そうして、未来社会の雛型をつくるという視点で実践を積み重ねる中で、新しい社会の新しい人間が生み出されていく。そういう絶望と希望、意識と組織のバランスを考えた繊細さが社会運動の質を高め、多くの人の賛同と参加を得る道となっていく。

従来の運動の反省から、新しい社会変革を個人の変容から考えるという潮流がある。次の3つの考え方はその典型である。

そのひとつの諸富祥彦さんは、現代における社会変革、世界の変革は、旧来の「特定イデオロギーを訴え敵と戦う」というスタイルでなく、これまで支配的であったものの見方とは根本的に異なるものの見方が提示され、そのものの見方が多くの人に“納得の感覚”をもって受け入れられることをもって、現代人の集合的な意識変容が成し遂げられる、というものではないかという。(諸富 [2001] p 33)

もうひとつの中野民夫さんは、「無力感や孤立感で動けない状態から、大きなつながりに目覚めてやすらぎと勇気を得て、自分にあったことを小さくてもはじめていくこと、そんなところから自分だけでなく、『社会が変わる』ということもはじめていくのだろう。一人一人の存在がユニークであるように、一人一人のやるべきこともユニークだ」という。(中野 [2001] p 88)

また吉田敦彦さんは、学校教育を、政治経済的なシステムとしてみるよりも、一人ひとりのいのちに根ざした意志や決断が強く働いているものとみる。システムの問題も大事であるが、どのような所においても、まずは自分とその身の回りの仲間たちから始められることが少なくない、という。(日本ホリスティック教育協会・吉田敦彦・今井重孝編 [2001] p 9)

こうした考えが強調しようとする点は、新しい社会運動の視点として僕も重視したいところだ。一人ひとりが自分の人生を根本から見直し、〈スピ・シン主義〉度を高めないと、様々な社会問題は繰り返して行われてしまうから。今までいろいろな「運動」があったが、現在の成熟社会段階において僕が求める「質」を得るには、とても高い

レベルの一人一人の変革が必要なので、昔のやり方じゃ不適應だということ。社会を深い“文化”の部分から変えなくてはダメだし、その意味で一人ひとりがアーティストになるような創造性をもつことこそ、次に求められている、真に自由で民主的な社会への“革命”であるから。

未来社会の雛型を实践する

ただし、後述するように、政治闘争も制度改革も同時に追及されて社会の多様なあらゆる水準で総合的に社会変革は考えられるべきであるし、個人の変容としても、より社会的な実践の中でなしていくというのが僕の強調するシングル単位的側面だ。よく考えてみれば、「新しい考え方」が一人一人に広がってから社会が変わるとするのは、意味をなさない文章だもん。だって、「ジグソーパズルの各ピースが赤色になれば全体が赤色になる」とか「皆が差別をしない意識になれば差別のない社会になる」というあたりまえのことをいってるようなもんだからね。同義反復に過ぎない面がある。また、システム全体のダイナミズムをみずに、個々の部分の寄せ集め（総和）が全体であるかのような単純な社会観ともとれるし、それは当然間違っている。

で、この「新しい発想」の良質な部分はもちろんそういうことをいってるんじゃない（と、捉えないと、もったいない）。社会変革の新しい段階に応じた「質」の意識と、どうやって新しい考えが多くの人に広がるかということを考えようとしているのだ。それで社会の少数からでもとにかく底辺から地道に人が変わる「質」を大事にしようという視点だよ。マイノリティの人と人が出会い、力をつけあっていくネットワークに期待をしている思想だろう。そして制度改革によって人々の意識が大きく大量に変わるという側面も忘れちゃいけない。つまり、制度の具体的改革案や教育改革プログラムを考えようということを含めての指摘だと、積極的に理解しなくっちゃいけない。

実はこうした視点と近いことをカール・ロジャースははやくから指摘していた（諸富 [1997] p 194-5）。社会運動の発展段階について彼は言う。大きな社会変革は、先行する長く静かな「懐胎期」^{かいたい}、「実験期」、「モデル構築期」のあとで、大衆が突如として問題の緊急性を自覚し、解決策を本気で求め始めたときに、可能になるものである。そのとき大衆は、すでに答えが手中にあることを発見し、問題解決のために巨大な力

を発揮し始める、と。ロジャースにとっての社会変革の実践とは、ワークショップに参加した一人一人の人間が、それぞれの持ち場で個人がより大きな決定権をもつ方向へと改革運動を起こしていき、それが自然発生的かつ連鎖反応的に広がっていくことを期待するものであった。

世界全体と自分の関係については、昔から議論がある。宮沢賢治の有名な言葉、「世界全体が幸福にならないうちは、個人の幸福はありえない」に対して、個人が幸福にならないうちは、世界全体の幸福はありえないと反論する人がある。だがこの反論は機械的で狭すぎる。完璧な世界はないのだから、世界が幸福になる途中のプロセスに生きている僕たちはどうなるかという問題に対しては、世界も自分も繋がっていると思うから、自分の生きる質を、世界を含めて考えるしかないということだ。世界か自分かどっちが先かではない。

幸福は、いまの暮らしを深く見つめること（具体的対象、具体的行動）から出てくるのであって、どこか遠くの理想を見つけることではない。答えを外部に求めるのではなく、自分の内部に見るとは、そういうこと。条件や材料はもうあるのだ。あとは、それに気づき、組み立てることである。

目の前の具体的なことを徹底すれば、普遍につながる。自分の関心あることひとつを徹底すればいい。趣味からでもいい。離婚からでも、セクシャリティでも、解雇でも、病気でも、ファッションでも。個人的なことを「世界」とつなげれば。

そういうことを含めてまとめるなら、新しい戦略の考え方は、簡単に言えば、「従来の権力奪取志向・社会構造変革路線・代行主義的政治ではなく、一人一人の〈スピリチュアリティ〉度を高め、身近な場で未来社会の雛型を実践することの総体としての、下から、周辺・地域からの社会変革の路線」ということになると思う。このとき、価値観自体の見直し、身近なところでの関係の質が重要となる。近代社会主流の物質的豊かさ・効率が幸福の基準という発想そのものをみなおしていく（〈スピリチュアリティ〉、スロー的価値観へ）。そういうこと自体を目標とする運動が必要だ。

『パンと植木鉢』

映画『カンダハール』（2001年）で日本では有名になったモフセン・マフマルバフ

監督は、1996年に自分の体験と思想を反映させた『パンと植木鉢』という作品を撮っている。

1957年、イランの首都テヘランの貧しい下町に生まれ、8歳のときから学業と平行して13におよぶ職場で雑用係として労働を体験し、義父の影響を受けて10代で政治活動に身を投じたマフマルバフは、15歳で高校を中退し、パーレビ王朝打倒をめざす反体制運動に関わる。2年間、非合法の政治活動に従事し、17歳のとき警官から銃を奪おうとしてナイフで襲うが失敗し、撃たれて逮捕され、イラン革命成功後まで4年半の牢獄生活を送ったという彼の実体験をもとに作られたのが、『パンと植木鉢』である。

1979年にイスラム革命の成就により釈放されてからは、政治活動から身を引き、文化活動に転じた彼は、革命後の社会を見て政治では人々を救うことができないと悟り、「詩と哲学」=文化活動で社会変革を目指すことが、作家であり映画監督である自分の目標となったという。人類の「自由・平等・精神の充実」の実現を求める彼は、『パンと植木鉢』で、政治少年だった自身の姿を現在の心境でユーモラスに振り返りつつ、政治闘争から文化闘争への転換の意義を描いた。ナイフを持つ「若き日の監督」と拳銃をかまえる「若き日の警官」が対決する最後の場面は、その象徴である。

僕はこの映画をみて、僕の〈スピ・シン主義〉の思いと重なる映画だなと思った。社会の変革を文化の水準から考えていこうとする彼の発想は、社会的背景が異なるとはいえ、重要な示唆を含んでいると思う。

マフマルバフ氏自身は、NGO「アフガン子ども教育運動」(ACEM)を主催し、アフガン難民の児童らにイラン国内での教育が受けられるように援助する活動も行っている。彼は「私は映画作家だから文化の面で(アフガン復興に)役立つことができると思う」「アフガンを舞台にした映画を製作する」としつつ、ACEMの活動する理由を「私が映画を制作しても、人々はみることしかできない。しかし学校を造れば子どもたちが学ぶことができる」からと答える。なすべきことをなす彼は、スピリチュアルな存在だ。

スピリチュアルな“問い”を自分に向ける

自分が「世界」の一部だということを〈スピ・シン主義〉水準で理解すると、ちっぽけなこの私の今の瞬間の選択によっても、世界はつくられているということがわか

る。自分なりの方法で、この地球・社会に変化を与えることができる。そういう微細な視点が、社会という大きなものの変革を考える時にも重要だ。だから狭義の「政治」というより、皆が繊細になって身近な生活スタイル自体を身体レベルで見直していくようなワークショップ的契機とネットワークを広める運動が求められているといえる。内容の特徴として、教育重視型、ネットワーク型、非政治・非暴力主義、直接行動型、個人責任重視型などといえると思う。

僕が目指すのは、言葉に本物の力を込めて話したいとか、相手の体と心の奥底で触れ合いたいというような、スピリチュアルな姿勢を皆がもつことだ。自分を知ることと、いかに生きるかとか、社会変革にどう関わるかという“問い”を一体のこととして捉えるということだ。自分たちの内部の悪や能力主義を見つめることを抜きにしてはならない。そういうバランスの追求という課題を自分に深く向けることが大事だとおもう。自分や他者の“痛み・喪失”に心を傾けないような浅い生き方でいいのか、この世界の悲しみや人権抑圧や環境破壊に自分は何ができるのかという“問い”を向けること。

生活（仕事、家のこと等）に追われて、それを言い訳にして、いかに生きるか、自分とは何かという大切な“問い”を自分に向けていないことが問題だ。実は無意識に、安全な現状維持を求めている。しかし多くの人は、いろいろな偶然で、試練で、喪失で、そのスピリチュアルな響きをもった“問い”に向かう契機を与えられる。新しい社会運動は、そういう問いを各人がもち、自分を高め、自分を元気にし、他者にそれを伝えるものともいえると思う。

2 新しい社会運動を考える

2-1 文化を含めた変革へ

文化そのものを変える運動、多重側面総合の運動へ

社会に変化があるとすれば、政治・制度レベル（制度、法、経済）、慣習レベル、教育レベル、理論・思想のレベル、生活・風俗レベルなど、多様な側面での変化があつてこそである。「シングル単位論」は、そうしたさまざまな水準・位相にわたる議論を含むものであることはこれまでも指摘してきた（拙稿 [2000b] [2001] 等）。

再度簡単に確認しておく、①短期的な具体的制度改革次元、②中長期的な政治戦

略レベルの次元, ③家庭領域における言動の次元, ④規範・道徳の次元, ⑤理論・思想上の次元, ⑥スピリチュアルな次元, ⑦社会変革運動・実践論の次元であり, これら多重領域全体の総合的変革が必要であると捉えた。

また「僕がしたい社会運動の目標と領域」という視点で少し組替えてまとめると, ア) 社会構造・制度の変革, イ) 言論, 思想, 理論における主張・闘争, ウ) メディアにおける闘争, エ) 教育・啓発活動, オ) 運動自体の向上(量的質的活発化, 成果獲得), カ) 運動に関わっている人の成長・幸福・満足(社会運動にたずさわる充実感, 社会への貢献, 友人との喜び), キ) 運動に関わっていない人も含む, 市民の身近な生活自体の制度面における変革, ク) 風俗や慣習・規範(結婚・家族, 友人関係, 職場関係)など生活を取り巻く領域での改革運動, ケ) 文化・芸術における表現・改革運動, 等の領域に分けることもできると思う。各領域は重なっている部分が一部あるが, 僕が考える社会の変革は, こうした全領域にわたるものである。

図表-1 社会運動の目標と領域

社会運動の目標と領域	シングル単位論が対象としている次元
ア) 社会制度	①短期的 制度改革
イ) 理論	②中期的 政治戦略
ウ) メディア	③家庭領域
エ) 教育	④規範・道徳
オ) 運動の直接目標	⑤理論・思想
カ) 運動参加者	⑥スピリチュアル次元
キ) 生活	⑦社会運動・実践
ク) 風俗・規範	
ケ) 文化・芸術	

このように運動の水準・領域をみていくと, 多面的な活動が求められていることが分かるし, 従来の活動がどこを意識してのことだったか, 何が足りなかったかも分かるとおもう。例えば, 「ア:社会制度」や「イ:理論」はもちろん重要であるが, そ

この変革にはウ)～ケ)の変革自体が密接に繋がっているし、ア)イ)に、直接的に主として関わることができるのは、政治家(官僚)や学者・インテリや積極的活動家など一部でしかない。社会運動としては、それら以外においても獲得目標を持つことが重要であるが、そのことを十分意識してきただろうか。僕が関わりたいのは、一部だけではなく、ア)～ケ)すべてをつなげるような社会の根底からの改革だ。「古い運動」は、ア)イ)「エ：教育」「オ：直接目標」はあっても、「ウ：メディア」及び「カキクケ」の面での弱さあるいは無自覚があったのではないか。「大衆のひきまわし」「政治主義」「前衛党主義」の反省はここに関わる。組織自体や運動の民主化もここに関わる。視野の狭い運動や対処療法的運動の欠点は、オ)など部分限定的すぎたことに原因があるといえる。マスコミにおいて「運動側」が目立たないのは、「ウやオやキクケ」の面の弱さに原因がある。

とするなら、それらの従来の欠点を乗り越えていく新しい社会運動としては、「ウカキクケ」の重視という点、全体への目配り・総合化に特徴があるといえるよう。現在のような全体状況の悪化の下で、「カキクケ」の重視は、いたずらな消耗や敗北感・無力感をもたらさないためにも、また、足元から真の民主主義社会を作るためにも、重要な視点ではないかとおもう。

自分にひきつけて考えても、これまでの僕の著作で強調していたのは、主に①②③といった制度面と一部生活面であり、その他の面は十分でなかった。講演や大学の講義も含めて、昔になるほど、限界をもってたと今では思っている。それをわかりやすく極端に言うならば、僕自身、以前は、一挙に権力を取るなど、より大きな、上からの全体的なビジョンを重視しすぎていた。過度に、社会経済的な、表面的な、今の権力構造の中でのパワーの奪い合いの視点に囚われていた。階級闘争、団体交渉、制度改革闘争など、「戦い」に重点をおきすぎ、目に見える面を早急に勝ち取ろうとあせっていた。ある意味、戦う相手と同じ土俵に乗っていた。パワーゲームに巻き込まれていた。そこで「勝て」ないことがダメと思っていた。だから論争的好戦的であった。

「まじめな人みんなが本当に幸せになれなくてはいけない」⇒「小さな目の前のことや具体的なことに付き合うのでは、もぐらたたき」⇒「もっと根源的に国全体の制度を変えて、大量の人が助かるように、人権が守られるようにしたい」⇒「制度・政治を変えなくっちゃ」と考えていた。つまり、ただマジメに対症療法的に運動したり、

精神性・主体性を重視したりする運動には限界があると否定的に捉え、社会の基礎をなす物的基盤（とくに経済的基盤）という構造を変えない限りだめだという面を重視しすぎ、意識や教育や小さな実践や文化や身体性、「混沌の闇世界」領域（拙稿[2003c]）などを軽視してしまっていた。近代合理主義重視・ビジョン重視で過度に政治的だった。

それは社会についても人についても浅い（部分的）捉え方だったと、今では思う。なぜ人権擁護側が勝てないかの分析としても弱かった。「混沌の闇世界」などを射程に入れず、生き生きとしたリアルな把握ができていなかった。

だから、社会の多様な水準から変革が総合的に行われなくてはならないと、改めて考えている。そのためにはとくに、今まで軽視していた面に注目しなくてはならない。その意味で、今、もっと「文化」そのものの変革と創造をめざす運動ということを強調したいと思っている。ここでいう「文化」とは今の社会の価値体系のことであり、とくに政治経済的な表層に対して、上記の生活、風俗、イメージ、メディアなどの奥にある、見えにくい水面下の観念・価値観・伝統・慣習の側面まで含む点に強調がある概念である⁷⁾。

それは具体的には、例えば、〈スピ・シン主義〉が強調する、「弱くあることの価値」とか、静かに横に寄り添うことの価値など、個人が身近な生活のレベルで、非権力的になることである。自分の身近なところで、できることをしていくというような運動である。意識や慣習を変えていく、教育を見直していく、家族関係や会社の間人関係で隠された「支配と管理」を徹底的に暴き、声を出していく、敏感・繊細に、自分の内部のダメなところを語り合っていくというようなこと。

狭義の政治水準だけでは社会は変わらないと自覚し、一人一人の瞬間の言動選択能力を高め、ライフスタイルを変えていくことをめざしたい。とくに、今まで働くだけの生活だったことを反省し、一人一人が深く自分の囚われに気づいて、それに対して

7) 社会学者ピエール・ブルデュー氏は、広範な社会調査をベースに、社会や個人がもつ文化的側面を「文化資本」として重視し、人文・社会諸学を総合する「人間学」を構築した。そういう広大な枠組みこそ必要だ。彼は行動する知識人であり、他の多くの知識人が社会現実から遊離している状況を批判しつづけた。現実自体の深刻さを知りながら沈黙するのは、手を貸すのに等しいという思想の持ち主であった。

創造性を伸ばしていくという意味で、広義アートの面での運動にも注目したいと思う。毎日の生活に、未来社会の雛型を今ここから作り出すという心意気で取り組むこと。〈スピリチュアリティ〉という概念は、そういう全体と結びついている。僕のイメージとしては、一人ひとりがアーティストに変わること（アーティストの視点、誇りを持ち、実践すること）こそが“革命”だ。（ここでいうアート概念の詳しい内容については拙著[2003 e]を参照のこと）

戦略体系：ビジョンとポリシーと実践

恋愛の一般的本質を書いた哲学書を読んでもなかなか恋愛できない。マニュアル本のように、具体的にどのように言えばいいか、どのような行動をとればいいかがわかることが必要だ。だがマニュアルはしょせんその一部の例でしかなく、自分の体に染み込んだものでない小手先のテクニックだけ真似てもほとんど役立たない。現実には応用の連続で、瞬間瞬間に相手の言動に対応する能力が必要で、そのためには、根本的にその人の生き方・スタイル・雰囲気・存在感という魅力がある。その根本がありつつ、そこに、瞬間瞬間に自分で考えて対応できたり表現できたりする、体に染み込ませた具体的スキルが合わさると上手くいく。つまり、いろんな面が総合されてこそ、恋愛は達成される。

同じように、社会を変えるには、理論だけではダメで、具体論・政策論や実践がいる。実践するには、方法やスキルがいる。社会運動を構成する思想と方法が矛盾してはならない。思想を具現化する方法があるし、一人一人が本当に生活レベルで変わることがある。目の前のことに左右されて大きな方向性を見失わないためには、基本となる大きな戦略・ビジョンが要る。そういう総合性を、森田ゆりさんは、社会の変革には、ビジョン（理念、展望）とポリシー（法律、規約、施策）と実践の3つが必要とまとめる⁸⁾。

以上の総合性が必要ということからいえることは、だから例えば「選挙には勝たな

8) ビジョンが、ポリシーを作り出し、実践に活力を与え動機づける（エンパワーする）。ポリシーが、ビジョンに形・具体性を与え、実践を（制度などによって）支える。実践が、ビジョンに命（現実）を与え、ビジョンに新たな力を与え、ポリシーを改正する、というように、この3つは相互に支えあう。森田ゆり[2000]。

くてはならない」「プロの交渉，談合，ボス交，裏取引」「組織維持優先」「代行主義的運動」というような，今までの現実主義的運動はダメだ，ということ。革命を叫んで自己満足の運動に陥ったり内ゲバしたりするのはもちろん愚かだし，主観的善良性だけの大きなビジョンのない運動も限界をもつ。人権という一般論を言いながら，他人の悪口を言って内部分裂を繰り返していることもダメだ。具体的政策論がなくて，例えばただ意識面で男性批判だけするようなフェミニズムでもダメだ。男女共同参画条例を作る状況にみられるように，現実的と称して，現実の具体的運動に繋がらないような総花的一般論を書き並べるといった，体制側の枠内にとどまる視野の狭い姿勢もダメだ。

だが，逆にいえば，他の側面と繋がるならば，ある部面の改良の一步はもちろん意味がある。大事なことは，全体を見渡して，つながりを意識して，社会運動が総合的になされることであろう。そして日本の今までの弱点を考慮して，ここで僕が強調したいのは，運動の「方法」つまりプロセス，スタイル，質そのものに，未来社会の雛型が反映されなくてはならないんじゃないかということだ。そのとき，〈スピ・シン主義〉という視点が重要になるといいたいのだ。

多面的運動の例

新しい社会運動の典型例としては，後に掲げた「緑の人々」（「緑の党」Greens グリーンズ）の運動があると思うが，ここでは多面的な新しい運動ということをも，男女平等と労働運動をつなげたものの事例でみておきたい。

1：理念と研究

まず，大きなビジョン，理論，社会変革構想とデザインの確立がある。研究活動，理論闘争であり，これは主に学者・研究者・官僚・社会活動家の役目である。今の日本では，北欧型に近い社会民主主義的な新福祉国家路線をベースにし，「緑の人々」の最新の成果も含めた環境や人権を総合的に捉え返す大きなビジョンがあるだろう。僕はこれを「シングル単位社会」と呼んだし，今回は〈スピリチュアル・シングル主義〉と総称するものを提起する。

2：社会システム・制度を改革していく実践運動

次に，制度を具体的に改革する運動ももちろん重要であるし必要である。そのうち

のひとつが、政治運動である（2-ア）。フェミニズム視点をもった議員を増やす選挙運動、議会での運動、男女平等に関する立法活動、政治監視活動などが含まれる。

市民運動団体・個人が、法をよりよいものに改正していく改正運動や、具体的な制度改革を行政や企業に要求していくといった、制度改革運動（2-イ）の領域もある。シングル単位の視点で、民法改正、税制度・社会保障制度改革をすすめる、育児休業制度充実、児童扶養手当制度改悪反対、ILOパート条約批准、行政の啓発内容の改善などのことである。

働く場の中での問題を扱う労働運動（2-ウ）の領域では、A：団体交渉などを通じた、職場での賃金・労働条件改善闘争、B：根本的に賃金制度を変えていく、同一価値労働同一賃金・均等待遇へむけての運動、C：ワークシェアリングの実践、短時間正社員制度作り、D：男女差別裁判闘争、E：均等待遇キャンペーン運動、厚生労働省交渉、連合・全労連・全労協など既成労組との連携、均等待遇の理念宣伝、HPによる宣伝・広報・相談・支援活動などがある。

また、社会の様々な運動体の連携をすすめることも大事であろう（2-エ：人権派の大同団結運動、ネットワーク運動）。フェミニズム勢力と労働運動勢力が、個人単位スローガンで統一戦線を組んでいくことがある。情報を共有し、戦略会議をもち、メディア戦略や教育のあり方などを、各団体の得意分野をもちより、声を合わせて、有効なものにしていくことである。各分野の人が集まって潮流・党派を超えて連帯することである。

メディア・マスコミの意義は大きいので、この分野はとくに独立した運動分野として考えていくべきであろう（2-オ）。さらに子ども・若者だけでなく社会人も含めて、もっと市民・労働者としての権利を教える、情報を広める、人権教育プログラムを開発するといった教育改革の面の運動（2-カ）も必要である。市民が自ら、成熟する学びの場をもつことを援助することや、行政や教員や政治家自身が新しい視点を学ぶ研修の場を作り、その内容を確立していくこと自体が重大な運動目標となる。

そして今回、僕が一番その必要性を強調したい運動の側面が、〈スピ・シン主義〉を社会の隅々に広げていく点である（2-キ）。この点は教育にも関わるが、暮らし方・生き方を、〈スピ・シン主義〉の水準のものに変革し作り上げていくということ自体が、社会変革の大きな目的であり、かつ方法である。生き方自体に対するアートの関わり、生活のアート化であり、理想を実践して未来社会の雛型を今ここから作り

始めるということを重視するのである。大きな社会全体をなかなか変えられないもので、希望をもてるスタイルとしての、自分のかぎられた一回かぎりの人生を豊かにしていくという運動である。

3：自分たちの運動の質を高める努力

最後に、そうした「2 制度改革」をすすめるときの基礎として、自分たちの運動（メンバー）の質を高めること自体が、重要な運動目標である。（この点は、2-キとも連携している。）組織と運動のすすめ方を新しいもの（底辺民主主義）にすること自体が、運動の内容であり、身近な権力関係をなくすということを実践することはここから始まる。

具体的には、これまでの運動のダメなところを変えていき、質を向上させるために、議論・学習・研修活動をしたり、適切なコミュニケーション能力をつけるためのスキル向上の場をつくったりする必要がある。常に各メンバーのエンパワメントを意識し、非官僚的・非指導的な、新しい運動運営方法を実践すること、小グループでの活動重視（主体的参加）、他の運動分野への認識を高めること、などをめざす。後述する「緑の人々」は、この点で、進んでいる。

図表-2 ジェンダーと労働に関する総合的運動の例

- | |
|------------------------------------|
| 1：理念と研究……〈スピ・シン主義〉 |
| 2：社会システム・制度を改革していく実践運動 |
| 2-ア 政治運動 |
| 2-イ 制度改革運動 |
| 2-ウ 労働運動 |
| A：職場での賃金・労働条件改善闘争 |
| B：根本的に賃金制度を変えていく，同一価値労働同一賃金へむけての動き |
| C：ワークシェアリングの実践，短時間正社員制度作り |
| D：男女差別裁判闘争 |
| E：均等待遇キャンペーン運動 |
| 2-エ 人権派の大同団結運動 ネットワーク運動 |
| 2-オ メディア・マスコミ対応運動 |
| 2-カ 教育改革 |

- 2-キ くスピ・シン主義)を社会の隅々に広げる運動
 3:自分たちの運動の質を高める努力

2-2 政治との距離感

政治へのかかわり方

こうした総合性のある運動を構成するそれぞれの運動の質・あり方について、以下もう少し詳しく展開してみたい。まず政治について。

ここまで述べてきたように、総合的な社会変革の必要性を確認するならば、これからも政治に関わることは必要である。政治運動は他の分野と結びつき、それを支えたり結実させたりするためにも不可欠の分野である。広義の「政治」は、権力関係のあるところにあるすべてのものであり、その意味で、個人的領域における諸問題も政治抜きにはありえない⁹⁾。政治への無関心や絶望感が広がっているが、日本でもその中で頑張っている仲間たち（議員、政党、政治関連の市民運動、それを支える人々）がいる。その頑張りには頭が下がる思いである。

問題は、(狭義)政治の限界を意識すること、政治以外も重視されること、政治運動自体の質が変わることだろう。その意味で、日本で新しいセンスでまともなことを主張している潮流は、市民派・無党派と呼ばれる部分に集まっている。(その典型が「虹と緑の500人リスト運動」¹⁰⁾などグリーンズ関係や、市民運動の人権関係系である

9) 例えば、もっとも個人的なことに思われるカウンセリングにおいても、そこで行われていることは、ある種の「政治」である。家族や友人や職場の同僚との人間関係を考え、身の施し方を考えるのは政治である。フェミニズムは、それまで軽視されてきた「女性の問題」=「私的領域、日常生活における些細な問題」を、社会構造に関連した権力関係に関わる問題、すなわち政治問題であると捉えてきた。

10) 「虹と緑の500人リスト運動」とは、世界の「新しい政治」の出現と展開を受けて、日本でもその視点で政治変革を考えていこうとする市民派議員と市民・支持者のネットワーク。1999年に設立された。「新しい政治」とは、経済成長と物質中心の発想を否定する新しい政治勢力としての政治的エコロジー、草の根の自己決定と自治を重視した組織作り、自由な時間を大切に、マイノリティの権利を尊重した社会、などのことである。自然環境と共存した経済社会への転換という環境の視点を「緑」に、社会の多様性と個性を尊重した連帯と協働を大切にする気持ちを「虹」にたくした集団である。虹と緑の500人リスト運動編『オープンテキスト (2002年版)』を参照のこと。

う。) 既成政党の中にも、一部、若手を中心に、そうした流れに近い、市民運動出身の議員がいる。そうした新しいセンスの政治運動には希望がある。

旧来型狭義政治には希望の中心はなく、一人一人の〈スピ・シン主義〉度を高め、身近な場で未来社会の雛型を実践することこそ必要だ。国家(行政、政治家)・専門家・教師・親などによる上からのパターナリズムの時代はすでに終わりを告げており、選択能力がある自立した個人が主体となる社会が求められている。成熟社会に対応しなくてはならない¹¹⁾。今までは力と制度と経済(利益)による支配管理であった。これからは、人権と多様性をめぐる「政治」でなくてはならない。

社会を構成している各領域各水準で、異議をはさむ権利が保障され、対立・相違があることこそが本質的に大事である。それが多様性の視点である。参加、直接民主主義、決定権の下部への委譲という方向は、「小ささ」の大切さということであり、参加型民主主義を徹底すれば、もっとも小さな単位である個人に行き着く。多様性社会は、市民個々人の意識が高まらなくては成立し得ない。一人一人が、世界市民であり、エンパワメントされた個人にならねばならない。希望はあらゆる〈国境〉を越えること。できるところからやっていくという発想。

だからこれからの政治運動は、従来の政治不信を変えるようなインパクトを重視しなくてはならない。例えば、これまで、汚職が繰り返され、政治なんて裏ではみんな汚いのだというのが常識になっている。政治を批判するのは簡単だが、批判する側は、ではどのような政治ならいいのかということと言わなくてはならない。とすれば、政治家と官僚が、情報と権限をもつことで口利き・贈収賄・利権と結びつくような日本型=自民党型政治ではない「新しい政治」でなくてはならない。

11) だが、日本はやはり少し景気がよくなったり政治問題が忘れ去られたりすると、元の木阿弥で、国民の意識水準そのものが変わっていないという根本を問題とできない体質のままだ。政治不信だ、議員汚職だと、もう僕は30年間聞きつづけてきたので、「今度こそ」「これができないと終わりだ」という言葉にはもう踊らない。だが、政治家もメディアも学問も、同じところで同じことを繰り返して、それで飯を食っている。当面それが続くだろうが、だから「まだそこ(古い土俵)で闘わなくてはならない」というのは、現実主義という名の敗北主義である。それは事実上、体制維持に加担している古い政治である。

責任追求のあり方

それは例えば、情報を公開し権限の集中を分散し、官僚や政治家の収入を透明化・制限し、何か問題があったときの個人責任を徹底して追及するようなものであることが必要であろう。これまではしばしば「構造の問題であって、トカゲの尻尾切りであってはいけない」という論理と「組織の責任はその長（幹部）がとる」という組織の論理で、個人責任が放置されてきた。誰がどのような発言や行動や決断をしたのか、誰が黙り、協力したのか、誰が告発せずにそれを放置してきたのかなどを具体的に明らかにせず、「全体の責任」ということで、幹部処分だけでごまかしてきた。これが日本的な前例主義、組織内向き姿勢、事なかれ主義、隠蔽体質などをもたらしてきた。「長」の責任ということで、社長や大臣が変わればいいなどというのは、もっともダメな対応である。

逆に、各レベル（現場、中間管理職、担当者など実質上の責任者）で、その個人が判断したという責任、認めたという責任を過去にさかのぼって問うことこそが有効である。ある「誤った決定」を行った会議に参加していた者（実行した者）全員の責任を問い、その後、その方針を覆すことなく続けていた者たちの責任も問うのである（例えば、知っていたのにそれを変更しようとしなかったもの全員とか、退職者も含めて、歴代課長全員の責任を問うというようなこと）。そのために「内部告発」を促進する制度整備が重要である。そうすることで、「組織全体の問題だ」とか「上司の命令だから」とか「私ひとりの責任ではない」といった逃げ方ができなくなる¹²⁾。各人は、命令されても自分の価値観に照らし合わせて、決定しなくてはならない。ダメなものはダメといわなければならない。新しい政治とは、その原理を常に徹底することである。だが、銀行の不良債権問題、薬害エイズ問題、狂牛病対策、外務省機密費問題、NGO参加拒否問題、鈴木宗男問題などで、とられた「けじめのつけ方」はまったくの逆の古い対応だけであった¹³⁾。

12) 青森県公社着服事件をめぐる、事件当時の役職員22人に公社から計約9億円の賠償が請求された。拒否すれば公社は裁判に訴える方針という（2002年2月段階）。元理事長や元監事には、約1億円から数千万円が請求された。高額請求された人たちが「請求額は常識はずれだ」と憤慨したり嘆いたりしているというが、僕はこれはいい対応だと思う。無責任体質を見直すためには、こうしたことをあらゆる場所で積み重ねていくことがある。

選挙よりも政策作り

また、政治とは何より、社会の基本構造を作る政策・制度・法律作りでなくてはならず、異なる意見の者が対案を提出し、議論を論理的にすすめ、成果をあげていくべきものである。その意味で、実質的な法・制度変更という「成果」をあげるためには、従来型のデモや署名集めよりも、専門的見地から法律や制度設計における具体的対案・修正案をもって細部のつめで徹底的に争う、民間のNPOや政策シンクタンク等による対案提起¹⁴⁾およびロビー活動的なものが重要である¹⁵⁾。

ただし、狭い意味の「成果」だけでなく、国民一人一人が変わること、意識水準が上がること、参加する者が元気が出ることも実は大事な社会の変革の「成果」といえる。政治は議会の中だけにあるのではなく、日常生活のあらゆる場面にある。とすれば、その意味ではやはり、(動員とか交渉道具としての参加数ではなく)皆が身体性をもって主体的に参加するという側面は重要である。

また選挙についてだが、これまでは、選挙こそ政治の中心とされてきたが、新しい

13) 例えば、多額の資本(税金)注入にもかかわらず銀行の経営責任、株主責任はほとんど問われていない。銀行員の賃金は高水準のままだ。また2002年の鈴木宗男議員の汚職問題において、自民党のある議員は、「外務省の内部文書を出したものを告発すべきだ」と述べた。正しく責任を取るための「内部告発」をさせないための脅しの発想である。

14) 日本ではこの面が非常に弱いが、例えば民間シンクタンク「構想日本」(<http://www.kosonippon.org>)の活動がある。また、各政党や労働団体なども政策提起がある程度行っているが、官(行政・官僚)は、民間と官との徹底した内容を巡る議論の場を作ろうとしない点で非常に遅れている。

15) 宮台真司さんは、「表現と表出」という概念で、デモや集会は情念の「表出」でしかないとその効果を批判し、制度変革という効果をもたらすためには、「伝える」(相手が理解したかどうか)という意味の「表現」活動でなくてはならず、それはロビー活動だという。ただし、自己満足、自分が気持ちいい、運動側の団結をもたらす、情にほだされる、粹に感じて表出が連鎖を生むというようなことがあることは認めているので、結局、両方必要と認めている。

彼の社会運動論を僕なりにまとめると、どう評価されるか、人が認めてくれるか、(＝ポジショニングという横の次元)だけを基準とする人が多いが、大事なものは、やらなきゃいけないからやるというやむにやまれぬ自分の内側から生じるエネルギー(＝縦の次元)で、その意味で、効果とか人目、社会のポジションなど関係なく、自分がしたいからするというのでいいのだということだ。

政治では、選挙の比重をもっと下げなくてはならない。選挙はお祭りであり、関係者は参加意識をもちやすいが、それは部分的熱狂に過ぎず、現行制度のように候補者が政策を十分語れず、表面的な票獲得競争になっているもとでは、選挙を中心に考えた政治は間違いであると思う¹⁶⁾。

新しい政治勢力

組織論としては、従来の既成政党のような中央からのトップダウン組織を否定し、分権・ボトムアップ型、個人の責任重視、内部批判・相互討論尊重¹⁷⁾、アメーバー的でアナキーなあり方などが求められるだろう。具体的には、後述する「緑の党」にみられるように、住民投票や国民投票制度を盛り込んだ直接民主主義の徹底、下部組織・底辺の決定優先、権力集中の排除、組織代表の複数化と定期的交代、議員任期の設定、会議の公開制などであろう。

政治地図全体の配置からいえば、自民党などの保守勢力、あるいは新自由主義的政党に対抗する、政権交代可能な現実的な社会民主主義政党が必要なことはまちがいないが、それは現実主義に近寄る分、妥協を繰り返し保守性を取り込まざるを得ない。そこで、社会が良くなっていくためには、もう少しラジカルな（原理主義的な／理想主義的な）主張をする政党（政治勢力、例えば緑の党など）が、社会民主主義政党の周りに衛星のように存在し、常に社会民主主義政党の政策に新しい血（新しい政策）を流し込み、右にぶれ過ぎないようにチェックすることが要るだろう。そうした批判

16) どの政党・どの議員であろうと、支援者は選挙に勝ったらうれしそう。そういうのって、怖い面がある。「自分はいい政治家を応援しているからこころから喜んでいることに疑問はない」と思っている人は、他の選挙事務所にいて同じように思っている人に出会って、相対化視点を持ったほうがいいと思う。つまり選挙というもののゲーム性、戦争性、熱狂性といった性質自体にヤバサがある。市民・政治実態はほとんど何も変わっていないのに。

17) 大橋巨泉さんが2002年に議員を半年で辞めたことへの批判が強いが、まったくおかし。彼が自由にものを言えない、裏取引とかがあって公明正大な政治でない、したがって辞めざるをえないというのはわかりやすい話だ。やめざるをえないような政治・政党状況がおかしいのであり、それへの批判として辞めるのも当然の選択肢の一つである。何もしていない数合わせ政治家、地位にしがみつく政治家が多い中で、辞めるということをもっと皆が行うことこそ、まともである。

勢力は、政党に限られず、社会運動勢力、労働運動勢力や、革新的なシンクタンク、個人なども含むだろう。

特に僕が「新しい政治」を考える上で注目したいのは、中心部分で法とか制度で正当に正面から闘うのではなく（それも時には必要だが）、その周辺で何らかの非正当的手段（文化や笑いや俗）を通じて秩序をかき乱すように動き回ることだ。中心を揺るがしていく勢力が必要なのではないかということだ。政治とアートや文化の関係にも関わる問題であろう。これは、上述した「社会の多層性」や「社会変化の段階」を意識した視点で、周辺のなところから過激な形で秩序をかき乱すことが有効な領域や段階があるだろうという考えからくる戦略である。

僕自身の個性からいっても、マジメに着実・実務的な仕事をしたいというよりも、全体の変化に先駆けて直感的に先を見越した問題提起をしたいという思いがある。最終的なツメに至る段階で必要となってくる、実証とか実務・制度の具体化などに向いている人が必要であるのと同様に、まだはっきり形が見えない中で大きな方向を探し出すことに向いている人も社会変革には必要である。新しい政治を考えるとき、まだまだ新しい社会の像が見えずに保守勢力がのさばっている中では、周辺からラジカルに長期的なビジョンを打ち出すとか、現行秩序を笑い飛ばして無化する中で、新しいエネルギーを胎動させるような勢力が絶対に必要であると思う。

政治の限界性をみておこう

そうした政治の大事さを押さえたうえでの意見だが、政治の限界性についてもみていないとだめだと思う。まず政治は大きくみれば結局、大きな社会構造の変化の後追いに過ぎない。理念が先を照らし出すことはあるが、一部の者が時代を先取りしたことを唱えても多数派とはならず、経済社会構造の変化を受けて徐々に改革派が数を増し、ぐちゃぐちゃ時間をかけて、妥協がもたらされて、少しずつしか進まない。それは意義であると同時に限界でもある。

次に（狭義）政治は社会を構成しているうちの「部分」でしかない。もちろん何事もそうであるが、つい政治は、昔の学問における哲学のように、一番中心、一番上部、一番大切と思いがちだ。そこに関わっている者たちは「俺たちが社会を動かしている」と思いがちだ。だが、後に示すように、狭義政治は立法やその執行にかかわることを少しするだけで、例えば文化や経済や慣習やといった多重構造と同等な単なる部分に

しか過ぎない。

また、政治は、法律やタテマエを守って行わないといけない。僕はそのこと自体に限界があると思う。情けない、どうでもいいような言葉が飛び交い、形式論議でことが進む。テレビ討論や国会論戦、裁判では、おとなしく相手の非論理的な話を聞いていなくてはならない。ほとんどの場合、論理的な質問に論理で答えずにごまかして話しており、それが通ってしまうような質の議論がなされている。形式的に疑問・質問をしたり警告を発しておきましたといったりするばかりでことが進み、大胆な、目を見張るような根底から覆すような真の「対抗」がないのがほとんどの「政治」だ。相手を追い詰めず、一体野党はいつまで何年野党をしていたら気がすむのか。主観はともかく客観的には、与党はもちろんのこと、野党でさえ、「野党」という位置で統治機構の一部に組み込まれおこぼれで^{まんま}お飯を食っているに過ぎないのがほとんどだ¹⁸⁾。

また国会での議論をみていると論理というものの限界がよく出ている。裁判でも愚かしい判決がたくさん出ており、論理なるもののいい加減さは明らかだ。結局、理屈には理屈（それも無茶苦茶な聞くに堪えない理屈）が対抗しており、論理そのものを徹底して論理自体において決着をみるということはめったにない。簡単に言えば、決着は論理ではないところで決まる。力であり数であり、ごまかしのテクニックである。それら全部がいやらしい。それは現実だし、それしかないという意味で必要だが、いやらしい。社民党の元国会議員辻元清美さんの辞職事件にからめてそれをみておこう。

ナチスの時代でも、秘密警察などがいろいろかぎまわってあることないことを資料集めておいて、いざというときに法律違反者だとかいうのは、常套手段だったのでないか。僕なんか、スピード違反したことあるし、酒飲んで運転したことあるし、青信号は守らないし、落し物をとったこともあるし、小さな法律違反なんかいっぱいしている。それも法律・正論にのっとして攻め立てれば、辞職もんになるだろう。いわゆる「不倫」や「買春」だって結婚はお互い貞操をまもらねばならないと民法に書いてあるのだから、「不倫」や「買春」しているオヤジはみんな捕まったり議員を辞

18) ここで「客観的にみてだめ」といったのは、野党が有効な「歯止め」になっている場合はもちろんあるが、「結局、政権をとれておらず、根源的なシステム変更を行えていない」ということをどこまで深く受け止めるかというレベルでの意味である。「小さな抵抗しかできない」という状況自体の中でもがいているだけでいいのかということである。政治は本来、もっとダイナミックな可能性をもっているのに。

めなければならないはずだ。

僕は政治家でなく、無責任でアナーキーな人間であり、自由でありたいと思う人間だから本音を言うが、辻元さんのやったことは、たいして悪いことではないではないか。自分の利益のために1円もとってないではないか。飲み食いや家や車や株に使ったのか。蓄財や選挙で勝つために権力を利用したのとは違う。一番貧乏な議員ではないのか。政治でいう「利権」というのとは違う。そこが一番大事と違うのか。

給料の多い秘書から少ない秘書に金をまわすのはまともなことやし、そのために制度を利用し、政策秘書の賃金を使ったという秘書給与の流用は、たいしたことじゃない。ただ、法律に違反しているだけのことでしかない。形式論理でなく、〈たましい〉で語れば、ことの軽重からみて微罪にすぎない。「税金を騙し取った」とか「詐欺」とか、「欺いて政治と金の構図にまみれた」等とマスコミがよってたかって攻撃するのを聞いて、政治の堅苦しさを感じた。

イスラエルで徴兵拒否してつかまってる奴は法律違反してるが、いいことをやってる。法律をいつも守らなければならないなんていえない。髪の毛が耳にかかるのは校則違反、黒い靴下は違反という校則を守らなあかんという優等生が僕は嫌いだ。いやらしい。校則なんかクソ食らえというのが好きだ。これからのあるべき「政治」もそういうのが求められていると思う。形式の土俵でなく、実質的な〈たましい〉の水準でものをみなければいけない。ことの軽重をその水準でちゃんと見ないで、法律は守らなければいけないなんて、かっこ悪い。センスないこと言うなよと思う。でもそれが政治だ。だから政治はダメなんだ、つまんねー、限界があると思う。

こんな例もある。明治学園教師の青柳行信さんは、目の前で助けを求めている外国人について、一人の人間としての義務から、その外国人がいま生きていくことができるようにするために、労働者を求めていた企業に紹介したが、それをもって「出入国管理及び難民認定法」違反で不当逮捕され、さらにそれをもとにして明治学園も解雇された。解雇無効を求める裁判では、解雇を無効とした一審判決を取り消し、福岡高等裁判所は、解雇を有効とする明治学園側逆転勝訴という不当判決を2002年冬に言い渡した。

形式的・表面的には、彼の行為は法律違反に見えるが、法は、外国人の不法就労の斡旋を自らの金儲けのために継続的に行っている者（いわゆるブローカー）を規制しようとして立法されたものであり、熱心なキリスト教徒である青柳さんが人道上の立

場から行った行為は、受け取ったお金は外国人労働者の病気や事故等や諸経費に充てられていることから私利私欲とは無縁であり、法律違反ではない。形式的に法律違反の行為を行うことになるとしても、法律を遵守するよりは人間としての義務が優先するというのは、ナチスの迫害や残虐行為を体験した世界における国際規範であり、それが日独に対する戦争裁判の基本的論理でもあったといわれている。そもそも外国人問題は、入国管理態勢が、制度的にも、運用面においても、外国人の生存権をはじめとする人権を侵害しているということから生じているのであって、それを放置したまま、人道上の行為を行ったものを処罰するのは本末転倒もはなはだしい。だがこれが司法や行政、政治の「現実」である。

以上の検討からもわかるようにまじめな人が「政治家はやはり身ざれいでないといけない」というときに、僕は、クソマジメな学級委員長、ええ子ぶりっ子的鈍感さと恐ろしさを感じる。もっとうろたえて、迷って、何で一番ええ政治家を守られへんねんというところで嘆くほうが、しっくりくる。政治ってものへのアナーキーな思索を深めるべきなのに、そこを考えない浅い議論が多すぎる。自分だけが高みに立って、まだ政治をナイーブに信じられているのは、鈍感であり、繰り返されてきた野党の敗北の再現でしかない。「政治」を信じすぎてちゃダメだと思う。政治は大事だし、諦めちゃいけないが、辻元追い落としの汚いやり方に政治の本質が出ているのも事実だ。そのときまだ政治を単純に素直に信じすぎるのは愚かだ。

しかしこんな僕の意見はもちろん、多数派にならない。むちゃくちゃ言ってるといわれる。政治は形式であり、政治は闘いであり、勝たなくてはならないと。野党は追及するなら自分の身はきれいにしなくっちゃならないと。

でもね、そういう人が描く戦略が僕には希望に見えない。「あーあ、底の浅い正論だねえ」と思う。国民市民の一人一人が深くものをみるように変わっていかなくっちゃ、政治も社会も変わらないんじゃないのと思う。とすれば、安易にあーだこーだと外に向かって言い切るより、自分の内側に向かって問いを持たなくてはならないんじゃないか。なんで、社民党の支持率が1～2%なんだよー。何でむちゃをやってる自民党が政権を維持しつづけるんだよー。無党派層とか無関心層もこの自民中心の保守政権を何で許してるんだよー。何で、石原都知事や小泉首相が人気あるんだよー。全部、国民の問題だろ？ 政治を表面で語ることに希望はもてない。

2-3 〈スピ・シン主義〉意識のネットワーク拡大運動

ビジョン・理論・思想

次に理論闘争について。個別理論研究や実証、調査、統計作り、資料作りなどが必要であるが、とくに今の日本に欠けているのは、大きなグランドデザイン＝ビジョンをつくることである。社会構造、政治を変えていく大きな戦略を含む「対抗的構想」をうち立てるスケールの大きな視点がなさ過ぎた。

また、日本の思想状況を考えたとき、何らかのすごく強い精神的バックボーンがないと、日本的な会議のもち方、日本的慣習、日本的なし崩し政治、日本的妥協などに取り込まれてしまう。それなりに、歴史の中で日本的な無責任体質、変革を避ける体質ができてしまっているのが、個人の思いはつぶされたりごまかされてしまう。少しの改善などでエネルギーが吸収されてしまう。したがって、個人の持続的かつ本質的な闘いを裏打ちする哲学・思想がいる。

シングル単位論は、共同体主義と戦う（ポストモダン水準での）一種の近代化論という側面をもったものであるが、それをなしとげるには、さらに「混沌の闇世界」の領域にまで議論の奥行きを広げて個人の世界観を鍛えなければ、不可能だろうとおもう。だから、ニューアカ的に「相対化のみ、趣味をもつ、逃げる」とか従来の反対だけ言ってる運動ではダメで、今の社会の流れに具体的実践的身体的に逆行する、個人が逆流に抗して立ちつづけられるような〈思想〉がいる。ここでいう思想とは、血肉化した理論のことである。逃げるのではなく、自分が変える、自分がそれを生きるという姿勢である。

これに関連して、シングル単位論への誤解を解くために柴田義雄さんの議論を紹介しておこう。日本的経営論の研究者である柴田さんは、若者の労働運動離れなどを問題意識に、次のように展望を整理する。

それは、今までの対立軸は「共同体主義 VS 個人主義」という単純なものであったが、それではだめだとし、組替えられた対立軸として、「上から被せられてくる共同体主義＋個人がバラバラの競争状態」VS「下から出てくる連体主義＋社会的規範としての個人主義」と捉えるべきだということである。

僕も、現状の共同体主義を支えているのが「連帯主義を忘却したアノミー状態」という意味でのバラバラ・エゴの個人主義と考えており、それへの対抗は、単純な——その意味で新自由主義的個人と区分がつかないような——「個人（主義）」ではない

と考えている。「共同体主義は前近代的（封建的）」というのは、まったくもって俗論で近代主義的な誤った認識である。そこで僕は、「上から被せられてくる共同体主義＋個人がバラバラの競争状態」と対抗するためには、日本的文脈では、何よりジェンダーに焦点をあて、反差別的な運動・思想によって社会的に鍛え上げられた「個」というものを「シングル」と呼び、それを「下からの連帯主義」を担う主体にすることが大事だと考えたのである。そして新自由主義的個人と区分するために、そのシングルたちの繋がり方を、〈スピリチュアリティ〉という概念で確立しようとしたのである。柴田さんの考えと、表現は違うがとても近いとおもう。

そうしたものとして、〈スピ・シン主義〉という、社会構想かつ、個人の生き方の基準となるような思想を提起している。

また、アドラー心理学では、その心理学的な位置を、「科学」（すなわち絶対的な真理を追究するもの）ではなくて、「理論」（生きていくために便利な物の見方、あるいは相対的なひとつの立場）であるにすぎないと捉えているが、これも面白いと思う。アドラー心理学のものの方で見方で生きてみて、それが快適ならそれでよいという、ある種、「論より証拠」、「実効性重視」的な視点である。僕は以前は、やはりどっちが真実に近いか、真理かを、科学、合理主義、実証を基準に争うべきと思っていたが、今は、アドラー心理学が言うような、実践的に役立つかどうかを大切にしたいと思う。すべては相対的だし、狭義「科学」であらねばならぬということはないからだ。

だから、この本でいう〈スピ・シン主義〉は、「科学」ではない。思想化された僕なりの伝えたい思いの総体、つまり「主義」である。社会運動に必要なのは、そうしたものでないだろうか。

新しい社会運動の主体は誰か

新しい社会運動は総合的なものでなくてはならないということとの関連で、新しい運動の主体を考えたいと思う。まず「市民」「国民」一般や、「労働者階級」一般や「人民」「大衆」「庶民」一般を語ってはダメだと思う。敵は資本家だけとか支配階層だけというような見方は、新しい運動をもたらさない。もちろん一般的には、「未組織労働者・女性を組織しよう」といわれているが、口先だけでなく、実際に少数派の立場を大切にし差別を縮小するには、逆説的ではあるが階級・階層分化を認め

ることが大切だ。

つまり、国民各階層各グループの間に、利害対立を認めることが必要である。利害の対立は、男女間、家族単位／個人単位論者の間、異性愛者／同性愛者（性的マイノリティ）の間、所得階層間、資本家階級／新中間階級／旧中間階級／労働者階級の間、労組組織労働者／未組織労働者の間、世代間、国家間、各思想の間、労働者／市民の間、保守・右翼／革新・左翼の間、戦争・暴力肯定論者／戦争・暴力否定論者の間、「エゴイスト・短期的個人的利益重視者・カネ・権力重視者」／「他者重視・人権重視者」の間、環境無視者／環境重視者の間、スピリチュアリティ無自覚者／スピリチュアリティ重視者の間、既存秩序での上位者と下位者の間などにある。もっと突き詰めれば、利害対立は組織内、家族内、個々人の間にもあり、簡単に理解できるとか利害が共通しているとかといった「共同体的意識」を持つべきではないといえる。

こうした利害の対立を正面から見つめ、新しい発想でこの対立を乗り越える展望が出てきてこそ真の連帯、理解が進むだろう。例えば、正規・非正規労働者の対立を、ただ対立しているというのではなく、どういう構造で対立していたのかを考え、正規労働者が非正規労働者を差別していたことを見つめ、非正規の権利を考え、それが自分たち正規の利害に結びついていることを理解し、そしてワークシェアリングというシングル単位的な将来の労働システムを両者が展望できてこそ両者の連帯が成り立つのであって、非正規への差別を正規労働者が理解反省せずにただ一般的に「連帯しよう」「労働者間に利害の対立はなく、敵は資本家だ」「賃下げはダメだ」などというのは欺瞞でしかない。男女間、夫婦間でも同じだ。安易に分かったようになるな、利害が一致していると思うな、加害者性と被害者性の双方をみつめよというのが、シングル単位論の大事な発想だ。

言い換えれば、グループ間に利害対立があるときに、各人は中立でなく、立場が問われているのだということ。「皆でがんばっているのだから、ことさら対立を煽るべきでない、責任を問うべきでない」という穏健な発想で、問題の本質をみることから目をそらしてはならない。利害対立を認め、自分はどのような立場にいるのかを考え、どのようにする責任があるのかを考え、そうして自分を見つめ、自分個人の関わりを考えることによってこそ、組織も運動も社会も変わる。

労働・職場に即してもう少し具体的に考えるなら、男女平等的な、シングル単位的な新しい運動は、「低所得階層」及び「シングル単位的思想を持つ労働者」によって

担われるとはっきり自覚した方がいいと思う。年功賃金システムにのっている高所得の男性は、その多くは専業主婦（あるいはパート主婦）を抱えており、そうした男女は層としては当面、「片働き家族」を単位として優遇するシステム（年功制）を見なおそうとはしないだろう。「上層労働者（大企業労組労働者・年功制支持者・家族単位論者）」VS.「下層労働者（年功賃金と企業福祉への依存度が低い労働者、大多数女性、マイノリティ、年功制や企業や出世から排除される者、能力主義競争に負ける者、シングル単位論者、フェミニスト等…）」というように対立を捉えるべきだ。フェミニズムは、皆に受け入れられるというのではなく、シングル单位的感覚の者に支持されるのである。したがって男性世帯主型労働運動でなく、フェミニズム型労働運動へ、スピリチュアルな者たちの運動へというのが、僕が展望をもてる構図なのである。

集団・組織重視からNPO的な個人主体の運動へ

社会運動のあり方について。右肩上がりの成長経済と家族単位発想（ジェンダー）を前提にし、年功賃金・終身雇用、および中小零細企業や自営業、農業、地方経済などに対するばらまき型補助金・保護行政によって、積極的雇用と全体的福祉（政府による社会保障充実）の代わりとしてきたのが日本であった。それに対応して、個人は、会社や組合やお上（政府）、一言で言って「組織・集団」に依存する体質になった。

そうした日本のシステムが今、揺らぎつつあるが、それは個人が権利を言い過ぎるからであるとか、社会保障が肥大化して経済が危機になっているからではない。成長依存、家族依存、企業の年功制依存が行き詰まりつつあるがゆえに、日本型の家族单位的福祉システムも危機になっているだけのことである。こんなときに、政府や組合は頼りにならないとか、何とかしてほしいと、あいかわらずお願いしたり批判したり嘆いたりしているだけでは何も解決しない。

個人が、組織依存でない、主体的自立人間に変わり、政治や企業を変革していかねばならない。官と民の間に、公共、共助、協同など、「シングル单位的市民」がリーダーシップをもって参加決定していくNGO/NPO的領域を作り、官民を変えていくこと、3者（公私共・官民共）の良好なパートナーシップを作ることが必要である¹⁹⁾。自分にできることを各人がしていき、未来社会のモデルを一部でもはじめてい

19) このNPO的な個人重視と、共同体重視とを混同してはならない。ときどき、市場

くことである。自分がしたいからする、群れない、いいなりにならない、自分で考え決める、自分で責任もとる、といったシングル単位的感覚で、運動も「組織重視からNGO的なものへ」変えていくことである。

例えば、労働運動で、「非正規労働者の組織化をどうするか」ということが多いが、鈍感な物言いである。おせっかいなことである。「助けてあげる、組織してあげる」という無意識の傲慢さがにじみ出ている。誰が組織してくれといってるのか。パートなど非正規労働者を職場で下位（低賃金、使い捨て）に放置してきたのはまさに組合員である「正社員」じゃないか。そのことを省みる痛みを伴う発言になっているのか。根源的に考えて、何で組織せなあかんねんということを考えきっていない。ストライキなんかしていないじゃないか。組織人員が増えても闘わなければ、交渉力は高まらない。あるいは、労組は制度政策闘争とかしゃれたことを言うが、なぜ政治・政党ではないのか。

労働組合というが、組合費を払っても意味がない感じが一般組合員に拡がって久しい。組合とはなんなのか。従来は「組織化された労働市場」であり、自分と同僚仲間のために協力する「義務の場」であった。地域を皆で支えるために、町内会に入ったり掃除当番に人を出したりするようなものだった。だがそうした方向からの「締め付け」は、ある程度は必要であろうが、労働運動がもっている広い可能性のほんの一部でしかない。今、形骸化した状況を踏まえるなら、新しい性質として考えるべきことはなんなのか。解雇のときの保険とか賃金交渉の代理というのは“遠い”話で、一般組合員にとって、平時の組合活動の意味があるとすれば、それは楽しいから、やりがいがあるからではないのか。そういう捉え方が、閉塞状況を変える一つの視点だと思う。だが、狭い組織運動としては組織維持・従来のままのやり方維持が前に出る。動

（あるいは個人）と政府だけではなく、共同体も必要という考え方がある（例えば元連合会長・鷺尾悦也氏の主張）。だが、これは似て非なるものである。市場と個人を同列にみて、個人と共同体を対立させたいので、なんと共同体を支持するのであるから、これは、めっちゃめっちゃ古い発想である。つまり労働組合とは「弱い個人」を助けるものという、19世紀以来の考え方をベースにしているだけである。家族や会社という組織・集団の共同体の性質への危機感欠如と、成熟市民社会における個人の意義の軽視、個人の能力への信頼感の欠如である。古い活動家にはこの種の視点のままの人が多い。

員？ サイターだ。

組合って、考えてみれば、NPO的な活動じゃないか。非営利で、自分が楽しみつつ社会のためにやっている。自己満足の楽しい活動であっていい。したくなくればしなくていい。皆がしなくてはならないというのは無理がある。自分の負担（お金や時間、体）が役に立つ実感、「生きた負担」にならないとだめだ。身体性ある成果、目にみえる自分の貢献がないとしんどくなる。社会とのつながりは実は楽しい。そのことを感じられなくっちゃ、ダメだろう。労働に対して、積極的な対案などを出していく、新しいルールを作る、しんどい人を助ける、といった、非暴力、直接行動としての、組合活動になることだろう。

単なる賃金より、今は資格をとるため勉強したいから、子育てに忙しいから、歌を習いにいきたいから時間がほしいというような場合がある。だからその人はフルタイム労働者にならずに、バイトする。組合活動もその歌と同じようなことだと思う。そして私生活もある。したいこととして、その中の一つとして、自分の1ヶ月のスケジュールの中に、組合活動の時間が入るといようなスタイル。それがめざすのは、短く働き、同一価値労働同一賃金だからそれでもそこそこやっていけるという公平な職場だ。それは、これからの日本社会をワークシェアリング社会という新しい質にしていくというNPO的な社会変革運動だ。何か不当な扱いをされたとき、今までのように諦めたり、仲間から浮いたりするということを恐れて口をつぐむのではなく、個人が勇気をもって、自分で自分が正しいとおもうことを主張する。それを支える組合・ネットワークになるということだ。会社で集団で闘えないなら一人で闘ってもいいし、会社の外で運動をしてもよい。

個人が、入りたいときに入れる、正規か非正規か、社員か否かに関係なく入れる、地域に開かれたユニオンであるべきだろう。そうした労組・ユニオンは、NPO・NGOなのだから、好きだからやっている、ということを確認する。人のためにやってあげるのではない。自己犠牲的スタイルではダメ。そのとき、一人でもできることをする、というスタイルの側面をもつことがいいのではないかと思う。少人数が主体的に集まり、声を出し、変えていく運動だ。「組織してあげる」とか「団結ガンバロー」というお決まりの声掛けの強制や古臭い言葉遣いや従来からの組織維持的活動のまま（形式的会議や集会）²⁰など、鈍感な古いものはやめるべきだ。自分の生き方としてのユニオン活動であり、ユニオンは関係性をつくるものだ。従来 of 会社関係でない

関係をどう作るかを課題とする実践活動だろう。今後希望をもてるとしたら、こういう視点しかないように思う。そうでない、従来の「町内会」的義務活動の側面も残るであろうが、その面で飛躍的な革新が生まれるとは思えない。

「弱者」の秩序内面化を考慮に入れる運動

差別されているものが、その価値観を内面化し、仕方がないと諦めたり、それ以外がないと思い込んだ上で、むしろ積極的にその価値観の中で生きがいを見出そうとするような「受容的姿勢」あるいは「差別秩序の再生産」ということがある。例えば、「女性はどうせ頑張っても評価されないんだから、男と競って勉強したり仕事をしたりするんじゃないで、可愛くして、バカな振りして、責任の低い楽な仕事して、男におごってもらって、守ってもらって、結婚して、子ども生んで、楽しく『女、主婦、母、嫁』の領域で役割をこなしていればいい」「差別とか私には関係ないし、男じゃないんだから、仕事は一生もんじゃないんだから、適当にバイトして、今だけ楽しくおしゃべりして、おしゃべりして、デートしてればいい」というように考える人もいる。

これを、そうした女性個人の意識を批判することだけにしてはダメだし、また構造批判一般にしてもだめだ。つまり一面的に外側から「構造が悪い、だから制度改革がある」ということに限定してもダメだし、逆に、「意識が低いから、教育・啓蒙しなくてはならない」というところに流し込んでダメだ。

力を奪われてきたからこそ「強く」なれないのだ。そうしてようやく自分を守っているという状況の人はたくさんいる。だから被差別者自身の意識改革と差別構造変革を対立させて、どちらかだけを言うのではなく、「社会的弱者」の秩序内面化・差別受容の面も組み込んで、意識改革と差別構造変革の全体を同時的に扱わなくてはならない。これは、運動に参加する各人が、敵を批判するだけでなく、自分の弱さや加害者性、「囚われ」への覚醒などもいれて、総合的に考えるような質の運動にしていかな

-
- 20) 学習会や集会に、組合役員が、権威ある講師を呼んで、お決まりの話や自分の代わりに言いたいことを言わせるのは意味ない。そうした啓蒙主義の一方通行はダメだ。それは権威主義的で、リーダー待望的で、依存主義を再生産している。何か知りたいことがあるから、話を聞きにくるのであり、学習するのだろう。本音を出し合い、話し合い、質問して本当にききたいことを解決する場になる必要がある。そういう主体的参加がいる。

いとダメということだろう。だれもが自分自身のなかに、秩序内面化、差別受容の面があることに気づいたとき、そうした自分を深く見つめること、その〈ぎりぎり〉をみせたとき、外側からでない「内在的批判」を行うことができる。生きる勇気というか、高い質の生き方という心意気を伝えられる。

ジェンダー問題、性別秩序で言うなら、「意識の低い女性を批判」してすむのでもなければ、玉虫色に「結婚退職・専業主婦もいけどバリバリ働くのもいい」などと何も言っていない無思考の啓蒙主義を垂れ流すことですむのでもない。「意識が低い」と批判する己はどこに立っているのか。「意識が低い」とは何か。一面的にいえるのか。逆に、「主婦もいい」などと安穩にいうことににじみ出ているように、誰からも嫌われたくないから、理解あるフリをしている己の姿勢に鈍感であっていいのか。

つまり、フェミニズム側が（リブがそうであったように、）自らのジェンダー意識、男女二分法自体、恋愛制度・結婚制度への加担の問題を自らに突きつける作業があるということだ。そして突き詰めつつも単純な「自己批判」（観念的反省、禁欲主義）等にするのでなく、俗も弱さも包み込んでの自分の踏ん張りとか勇気という〈ぎりぎり〉の〈スピ・シン主義〉的なものを示せるかということだ。それはもちろん、男性にとっても、自分の男性・夫・父アイデンティティ自体、恋愛や家族への価値観自体を根底から見直すということでもある。

ワークショップ型の教育・学習・思想運動が鍵

「混沌の闇世界」があり、かつその中には〈たましい〉という素晴らしい、隠れた深い領域があるということに気づかねばならない。そういう水準で社会と個人の変革が必要な段階に至っている。これは、旧来型の枠内の繰り返しではなく、既存秩序の表層的世界＝日常の感覚とは異なった別の感性・チャンネルを開いていく必要があるということだ。では、いかにその能力を開発するか。一言でいうなら、スピリチュアルなことを伝えるような、ワークショップ的教育機会を増やすしかないとおもう。

「教育」というと上からの押し付けをイメージするが、ここで言うのは、ワークショップ的、あるいはセルフヘルプ的な、新しい主体的な学びの場のことである。まずは人権意識などを高めるための研修・教育であろうが、根本的には、より深い学びが求められる。「教育」という言葉がエラソーすぎて、よくないかもしれないが、ここで僕が求めているのは、反省・自省をこめて受容的に語り合うことであったりもする

が、それだけじゃなく、なんか一緒にいながら、じわーと伝わるような活動社会のイメージに希望がある。お互いが仲間として存在しあいながら影響しあったり、対等・適切なカウンセリング的交流をしたりするようなイメージ。そういう、お互いがくたましいで触れ合うという感じをからだ全体で学ぶという意味での「新しい教育」である。

社会運動は、ある種、既存のものと闘い変革することだが、教育はまさに、そうした性質をもっている。「新しい教育」に時間はかかるが、しかし社会と人間の変革自体が時間のかかるものなのだ。多様性、エンパワメント、複数の価値観、複数のアイデンティティ、シングル単位、〈スピリチュアリティ〉、宗教などを「教え伝え作り上げる」ことは、連続的永続的な社会変革の闘争なのである。

とくに今の日本では、〈スピ・シン主義〉的なものをどのように伝えるか、どのように広めるかという戦略がある。つまり、スピリチュアルな素晴らしい“もの・人”を経験し、語り合い、エンパワメントするという、従来の教育とはまったく異なる新しい教育プログラムを開発する必要がある。そしてそれを広めること自体が社会変革運動の重要な一部なのである。(僕自身はそういうことに関わりたいと思っている。)

民主主義・人権擁護・平等の体感

ワークショップ型の学習は、「言うは易く、行うは難し」であるが、その目指す方向はとても魅力的である。教えるのでなく本人が自分で気付く学び、個人の内面（内面のスピリチュアルな能力）を高める学び、民主主義・人権擁護・平等・スピリチュアルな関わりを体感することで、抑圧の連鎖を切断しようとする学び。ファシリテーターが学習者（参加者）との間に「異なってはいるが、お互い尊重しあうという深いつながり」を実践することで、学習者は自分が尊重されているということを身をもって知り、参加者どおしの間にも深いつながりの感覚を育てることができれば、それはすばらしいだろうと思う。

だが、ファシリテーターが誘導しすぎたり、洗脳的に雰囲気を作りすぎ、そこだけではいい感じだが、一步現実社会に戻ると何も変わらないというような危険性もある。ファシリテーターに依存しすぎる人を作っては、狙いとは逆効果である。だから、その場を練習台にして、そこから旅立ち、ワークショップの場以外の日常生活でも自分を変え実践していけるようになることを忘れないようにする必要がある。

平和や平等や人権を大雑把に語ることはそれほどむつかしくない。日常生活の自分（の実践：人間関係や行動）から切り離してれば簡単だ。だからこそ、ワークショップ型・参加型の学びは、本当の変革のためにもっとも困難な課題に挑戦する。すなわち、繊細に自分の言動の客観的な意味を捉え、自分を深く知り、自分自身への抑圧や他者への抑圧（自分の中の弱さや闇）に気付き、自分の心根を変え、あるいは自分のなかの本当にすばらしい力に目覚め、自分の言動を変えていくスキルを身につけるようにしようとする。自分（の利害）から出発して、社会的なことに、スピリチュアルに覚醒していこうとする。自分の求めていることが、拡張された私＝〈スピリチュアリティ〉に気付き、自分にはそれを実行する力があると知り、自分を肯定できるようになることだとわかることをめざす。相手を批判するときに自分の問題と結びつけ、共感的にアプローチできるようになることをめざす。ワークショップ的＝〈スピ・シン主義〉的な学びとは、「私（の関わり）」を棚上げして外側において「社会」を対象とするのでなく、自分を見つめ、そこから自分と社会の変革を統一的に捉えるあり方へいたろうとする試みなのである。

知識や理論だけではなかなか大きな現実社会（制度、慣習）の変革に繋がらないし、自分として関わりつづけるのがしんどくなる中で、他人事でなく自分の事（自分のホンネ、個人的事情、利害、関心との関わり）として問題を「体、心、感情」で捉え、それをベースに身近なところからでいいから具体的に動き出すというワークショップの視点が、新しい動機付けとしても運動へのアプローチとしても重視されている。

個人の内面を変える運動

繰り返し述べてきたように、社会制度の改革だけでなく、各人の深い内面のスピリチュアルな“能力”を伸ばしていくことが、社会全体の「真の変化」には必要である。私たちの一人一人が、カウンセリング・マインドをもって非暴力的に人に接したり問題を解決したりしていくことができるようになると、社会はよくなる。多くの人がシングル单位的な関係や、平和で民主的で豊かな社会のイメージをもち、それにむけて身近なところでそれを具体化した行動をとっていくことで、社会はよくなっていく。逆に、小さなことでも権威的・暴力的・家族单位的・共同体主義的なことをしていると、それは抑圧の連鎖となって広がっていく。社会は悪くなる。

多様な抵抗や意思表示や創造的活動こそが、一人一人に問われている。一人一人が

非暴力直接行動、自己責任行動をとるしかない。大人が、運動側が、それを周りの人に、若者に見せることで、〈たましい〉の感覚が伝わるからこそが、運動であり「自由」の教育である。大人や教師が、「既存主流の流れ」に自己責任をかけて抵抗できなくては、未来はない。

例えば教師や親が、日の丸・君が代強制に対して卒業式で少くく抵抗を見せても解雇にならない。注意とか何らかの懲戒があるだけだ。それを怖がっていたら、どうして右傾化の時代に抵抗できるだろうか。解雇になったらなつたで裁判すればいいだけのことだ。過去の非暴力闘争の勇気に見習えば、なんてことはない²¹⁾。

また、02年5月に防衛庁の情報公開法利用者のリスト作成・身元調査事件があった。これは、情報公開の精神の理解も、人を思想・信条で差別してはならないという初歩的な人権意識も官僚にないことを示すものであったが、この事件から見えてくることは、僕たちが目指す社会改革とは何であるかということだと思う。この事件はもちろん第1に防衛庁上層部の責任や個人情報保護法案の議論に関わり、批判すべき事からといえる。だが、僕らが目指すこと——市民が行政をチェックする情報公開が進み、行政の民主化が進むこと——の達成のためには、国民と行政権力に携わる人一人一人の人権意識が高まること自体が必要なのである。

つまり批判は必要だが、ゴールは「批判」「廃案」自体でなく、それによってまともな感覚をもつ職員によって構成される政府機関にかわることだ。また情報公開を求め、政府をチェックするような国民が増えることだ。

とすれば、政府のもつ情報は国民のものであり、国民のために情報が管理し使われなければならないという情報公開の精神を本当に心の底から理解する、人権意識の高い人になるための教育・研修が、役所はもちろん、日本中で必要ということになる。あるいはそういう人を当該職に就けるということが必要となる。意識改革を本当にすすめるには、口先だけでお茶を濁すのでなく、具体的な研修制度の実施や人の入れ替え、法・制度改革が必要である。つまり政治改革は、人間改革と同時並行的な性質の

21) 別にそうしなくてはだめということではなく材料は日常のどこにでもあるということ。何もかもしなくてはだめということはないし、無駄な戦いをして消耗する必要もないので、大事な闘いを自分の人生のどこかにもつという視点が大事だ。

ものにならなくては意味がない。

次世代の人の育て方（育つ環境）を変えることが、世界を変える有力な方法だ。確かに教育だけを独立してとりあげて変革することなどできない。社会の基本的価値、大人の生き方が反映する。だが、社会の一部として、大人の一人一人の生き方というものがある。そこのスピリチュアルなものに触れて、次世代の人（子ども）は価値観を作る。

底の浅い説教や道徳の押し付けでなく、深く自分の内の闇や矛盾を見つめるようなことを伝えてこそ、はじめて真の「内面」というものが問題になる。自分だけよかったらいいのかという根源的な問いをもって、ゆらぎや「とり乱し」といったくぎりぎりにおいて語り合うこと。それこそが、自分の外の大きなものとの一体という感覚に繋がる。いかに生きるかは、自分の内部を深く掘り下げることと、自分が生命系の一部であるということの両面に関わらしめて考えるしかない。抽象的に宇宙のエネルギーなどといったきれいごとをいってただけじゃ、人も社会も変わらない。

そしてひとりひとりが内面からのパワーを高めたとき、社会レベルとして、「新たな価値」というものがつくり出されていき、急速に全体が変化していくことになるだろう。

〈スピ・シン主義〉意識のネットワーク拡大運動

以上のまとめになるが、結局、僕が言いたいのは、〈スピ・シン主義〉意識のネットワークを拡大するような運動にならなくてはだめだ（少なくともそこを重視すること）ということだ。政治や制度改革や従来運動も大事だが、そうした運動が古臭くなって影響力を低下させているなかで、僕は、根本的に個人の生き方と社会運動の原理を考え直したいと思って〈スピ・シン主義〉といている。それに対応した運動スタイルの新しい側面は、権力や制度という社会表層よりも、社会全体の深層意識部分から変えていこうとして〈スピ・シン主義〉意識を社会の隅々に広げることを重視する点にある。

人権とか民主主義という言葉だけでは表面的なので、それを「多様性、エンパワメント、シングル単位、非暴力、〈スピリチュアリティ〉」という概念まで含めて深く理解するようになっていくこと（＝〈スピ・シン主義〉）が求められる時代である。そして

社会（組織）を構成する一人一人が、そうした〈スピ・シン主義〉度を高めること——個人の内面からの変革とそれに基づいて社会的実践をするひとが増えること——こそが、「社会が変わる」ということなのだと思う²²⁾。

そのとき、日本ではあまりに論理的思考をしない人が多く、ポストモダン水準の学問的素養も少ないので、(1) 合理的な視点も含めて社会科学全般を学ぶこと、および単なる主観変化をいうだけの古臭い宗教的説教ではダメなので (2) 社会状況・変化をおさえ変化の方向の中でこれからの新しいスタイルを作っていくという学びがある。しかし社会変化に追随するだけという受身ではダメなので、より積極的にどのように変えていくかというビジョンをもつこと、すなわち、(3) 〈スピ・シン主義〉意識のネットワーク拡大をすすめる意識的な運動がある。

そのとき「方法」は「思想」を反映したものでなくてはならないので、運動の「方法」つまりプロセス、スタイル、質そのものに、未来社会の雛型が滑り込むように意識されなくてはならない。行政や学校や経営者に一方的に責任を求める、変わることを強制する（糾弾）、批判するようなスタイル（だけ）ではなく、むしろ、自分の身近で、自分をさらけ出すようなことから、回りも自分も本当に変わっていくこと、身近な場で「脱学習」をすすめ、選択肢を増やし、闘う手段に関する情報を提供し、選択と自己責任を相手に投げだし、「変わるか変わらないか決めるのはあなただよ」というような、距離感と余裕のあるかかわり方がいる。皆が自己決定と繊細さを大事にするようなワークショップ型の丁寧な、人格を高めあうような、心をこめた運動がある。権力とか物的獲得とかだけが運動の目標でなく、運動のプロセスそのものに、各人のスピリチュアル度を高めることを組みこむことである。僕たちの運動は、ひとりひとりが、誇り高く、意志の強い、聡明な人間になること、深い内面性をもつことをめざしているのだ。

例えば、リストラ解雇されてから解雇撤回を申し出たり、過労死をもたらした会社の責任を問うたり、過労死基準を変えるとといった運動ももちろん大事だが、しかし個々

22) 森田ゆりさんも、同じような視点で、多様性トレーニングのゴールは、多様性受容力を個人、組織のうちにもたらすこととし、多様性受容力を高めること、多様性意識のネットワークを張り巡らすことをめざして活動している。

人が、簡単に解雇されない主体、過労死しないような主体になることこそが必要だ。

「会社が言うから」「仕事だから」と労基法や組合や権利主張のノウハウの事も知らずにマジメに会社に尽くすのが今までは「常識」だったが、本当にそれだけなのか、会社を辞めるとか個人加盟のユニオンに入って文句をいうのはありえないことなのか。もういいかげんに、古い日本人を辞めるときだ。一人一人の自己決定力を高めるときだ。人のせいにして後で泣くだけじゃ遅すぎる。

「集団でしか反対できない」、「上（法律）から変えてくれないと末端じゃ何もできない」というのでは、日本はなかなか変わらない。「弱者」扱いして「偉い人がそうした“弱者”のために頑張って制度をつくってあげる」のでなく、ひとりでも抵抗するという主体になることが必要だ。それを応援するネットワークを張り巡らすことだ。そんなことは「普通の人」にはできないと決めつけるのは、隠れたエリート意識だと思う。人は変われる。適切な情報、学ぶ機会があれば、人は変われる。

運動の質自体を〈スピ・シン主義〉に

「多様性、エンパワメント、シングル単位、非暴力、〈スピリチュアリティ〉」という概念まで含めて深く理解することが必要と述べたが、それは、社会運動における日々の各局面の瞬間瞬間に、それらを生かしていくことである。「多様性に関する4つの側面」（拙稿[2002]）で述べていたことを、運動において実践することである。

つまり「違いの尊重」に加えて、あらゆるところに潜む差別を繊細に見出して解体していく努力や、自分と異なる他者を興味と尊敬をもって理解する努力が伴わなくては、多様性とはならない。そしてさらに、僕らは抑圧していないつもりでも知らぬ間に支配関係、パワーゲームに入っていることが多いので、個人の自律ということを過剰なまでに重視し、目の前での微細な権力関係と即興的感覚で闘うことと、沈黙（静かさ、弱さ、喪失、失敗）を大切にすることが必要となる。言葉になったものだけを見るのではなく、言葉にならない態度や行動や表情や気配を読み取ることがいる。ある人が口を開いたときに、すかさず反論したりアドバイスをしたりしないような、安心して話せる場を作ることがいる。リーダーが演説をして大衆をあおって誘導する、教え導くというようなことであってはならない。つまり、スピリチュアルな場の空気を作り出す中で、各人がもっていた力を開花させるような、エンパワメント的運動が必要である。

また、「外から人を変えるのではない」とは、各人が自ら深い部分で「気づくこと」を重視するということである。多面的である自分に気づき、自分が主流価値観に囚われてスピリチュアルなものが見えなくなっていることに気づき、それゆえ、ある面で「奪われて」おり、同時に他の面で「奪っている」ことに気づくことである（拙稿[2002]）。

自分の内部の“痛み”を深く見つめることなしに、他者の“痛み”をわかることなどできるはずがない。口先、頭先のだけの「理解、共感」は、実は同情であったり、「理念に囚われた利用主義」（啓蒙）であったりする。そのことに敏感な人が、社会運動の偽善に反発するのは当然だと思う。誰も指導や同情をされたくないのだ。あるいは依存的な人間を作り出す運動であってもならない。依存は深い内省をもたらしさない。「私が〈ぎりぎり〉を見つめるという〈たましい〉の水準で語っている」ことを通じてのみ、他者も、〈たましい〉の水準で成長し、奪われていた力を取り戻す（エンパワメント）。双方が“痛み”への認識を深めることで、深い水脈で共苦となつてつながり、共感をもたす。自らの“痛み”の井戸を深く掘らないものは、他人と真の意味で“つながる”地下水脈にたどり着くことはない。

2-4 未来社会の雛型を今、ここから

非セクト的に 幅ひろい連帯を

当然、僕が目指す社会運動は、自分の「狭さ」を常に解体していくものだ。運動や政治や学問や宗教のセクト（派閥、党派、潮流、系列）を超えて、学びあい、尊敬しあい、尊重しあい、楽しく、協力できるところは協力し、無理に一体化せず、適度な距離と自主性を尊重して大きく社会全体の改革に連帯すればいい。過去、排他・独善的な一部（の人、組織）に対し、他方がそれに対抗して歴史的に対立の構図が保持されてきたというようなことがあちこちにあるので、どうしてもセクト間の憎しみを乗り越えるという一般論の実践は難しかった。潮流の間の論争が運動に活力を与えてきた積極性もあったろう。

だが、私が〈スピ・シン主義〉といているのは、とてつもない高い水準を今ここから生み出していくという理想である。どう考えても、新しい社会運動において、過去の「対立」をひきずるのはつまらない。また、古いセンスで好戦的な人、威圧的な人は、もうご遠慮願いたい。新しい運動は、相互の尊重のために、「自説が正しいと

思い込む独善性」をはっきりと排除しなくてはならない。大きな声で言いたがる人には、別のところでやってくださいというしかない。

そのために、宗教・理屈・派閥争いなしにやりましょうというルールが必要だ。相手への不信感を影で煽るようなカタチで、人を「取り合い」するようなことはやめるべきだ。一般論や過去の系列でなく、具体的な一つの問題、ひとりの人の権利をどうするかという点で、協調する姿勢を皆がもつこと。どうしても「タイプがあわない」場合は、適度な距離をもつことが大事だろう。自分がしゃしゃり出るよりは相手を立て、自分が無名性に徹するというような謙虚な人が増えてこそ、運動は質の高いものになる²³⁾。恋愛・家族関係と同じく、社会運動における組織の間の距離もシングル単位的であるしかない。

たとえば、まともなキリスト教徒である関田寛雄さんは、党派性（わが宗派が正しい）は、通じないものを通じさせようとすることであり、宗教が党派性にこだわったら普遍性を確立することはできない、他宗派の人や「宗教を信じていない人」にはキリスト教は全然関係ないのだから、自分の宗教（キリスト教）は無名性に徹しなければならない、党派性を固持して真理を守るのではなく、真理が我々を守っているという確信があれば無名性は怖くないというようなことを言う（津田[1994]p220）。まったくそのとおりだ。

主体の確立・立てなおし

新しい社会運動の性質について、労働運動を例に少し考えてみると、既存の企業別労組に対して、企業別組合の外の、地域の個人加盟型のユニオン（合同労組）といった組織形態の方に展望があると思う。その方が、「賃上げ中心の従来型運動から、反差別・人権中心の運動へ」という流れに適合している。個人の権利を集団で皆で守る、自分ができることを自分なりにする、個人は自分の信念と勇気にしたがって自己の責任をかけて動く、そうした主体になる個人を仲間がバックアップするというような、

23) まともな人（組織）ほど自分（わが組織）の名前を売り込もうとしない。無名であることはすばらしい。だが、現実の運動は、運動がうまくいきそうになると「勝ち組」にのろうとするようなスピリチュアル度の低い人が目立ちがちである。下積みの人たちが時間をかけて築いてきた成果を、最後のところで自分の手柄のようにする人（組織）が多い。

ネットワーク型の運動こそ希望である。そのためには、幹部が代行するような請負型のスタイルでなく、組合員・労働者一人一人が力をつけ、自己判断し、主体的に参加するという方向での学習活動・思想運動が、とても重要になってくる。これはもちろん理想主義的だし、簡単ではないが、遠回りのようで結局、低迷した運動を立てなおす（魅力的な運動になる）にはこれこそが王道なのではないか、そうしてこそ、未組織・女性・無党派層・若者にも支持基盤を広げられる運動へ転換していけるのではないかと思う。

主体の側の立てなおしという課題を考えると、労働運動を労働運動勢力だけで立てなおせるとは思えない。シングル単位論が言うように、労働問題は、性別役割意識や家族単位的な社会保障・税制度などと密接に結びついているから、そこも意識して労働運動の質を根本的に変えなくてはならない。こうした限界性の問題は、労働運動だけの問題ではなく、どの運動も分立し、狭い範囲内で閉じているがゆえに、有効な対抗勢力として成功できていないという共通の課題だ。したがって、僕の希望のイメージは、女性運動、労働運動、市民運動、政治運動、思想運動などが、相互に学びあい、ネットワークしていく中で、各運動の質を高め、社会政策的視点を共有し、大きな政治的勢力として共同で運動していくというものである。そこでは理論的思想的統一と組織的結合（ネットワーク）が重視され、そのときに「シングル単位と〈スピリチュアリティ〉という視点」は、各運動をつなぐ力になると思う。

日本の民主運動の弱さは、典型的には「シングル単位型の社会民主主義福祉国家」という構想のもとでの具体的政策提起がなかったことに表れている。労働問題でいえば、いまだに年功制度を根本的に批判していない人が多いところに、「人権」といつてきた言葉の抽象性（限界）が出ているのではないか。繰り返すが、原理的には「大きな理念・ビジョン」こそが具体的改革の前に必要であり、その基本構想にそって具体論が議論され、財政など手段も調整されるのだ。またさらなる職場ごとの各具体的取り組みは、その現場のことを知っているものたちが自ら生み出す以外にないものである。誰かが上から何もかもを教えるようなことではダメなのはあたりまえ。具体的対象の具体的把握からこそ具体的方針は出るのであって、一般論のとめどなき下降では真に実態に即したリアルな方針は生み出されない。

主体の形成ということで、僕が有効な事例とおもえるのは、スウェーデンの女性たちの教訓である。スウェーデンでも、1960年ごろまでは、家族単位の発想が強くあっ

たが、フェミニストたちが党派を超えて秘密裏に集まり、議論を積み重ね、男女平等・個人単位的な基本戦略を作り上げて各組織に戻って説得していき、それが実って各組織が徐々に個人単位的な政策を採用していった。つまり、まず意識あるものたちが外部ネットワークという形で結合・成長していき、そこでの理論的・思想的確立が、運動全体の質と方向を決めていった。日本でも従来の組織や領域や党派を超えて、新しいセンスある者たちが繋がって、新しい運動を作り上げていくことが必要なのではないだろうか。

こうしたことをいうと、「今の組織では無理だから、まず日常的な運動の中で足腰・組織力を高めるしかない」というような相変わらずの答えが返ってくる。しかしそう言ってもう何年経ったのだろうか。この約30年の社会運動側の敗北は、新しい動きを求めている。「従来の発想の日常的運動」では大きな変化はこないと覚悟を決めなくっちゃ。パート労働者の有期雇用廃止、大幅賃上げとか、男性の残業拒否、男性の育休支持、イジメ・解雇など少数派の権利の徹底擁護というようなことをメインにすることが正規労働者の運命を変えていくのだというように、(男性)正規労働者の世界観を変えていくような運動こそが、職場の競争主義的な雰囲気を変え、女性が働きやすい職場になっていくということ。ゼロ成長、グローバル化、自由主義化といった厳しい情勢であり、従来型の運動が敗北しつづけているのだから、どのみち長期的な運動をするしかない。こちら側の質を高めるような運動というように、長期的に目標を設定しなおすことが必要だ。多数が一挙に変わることは、今の日本ではありえない。少数派の者たちが自ら展望をもちながらサバイバルする姿をみせていくことこそ必要だろう。

相手の〈たましい〉に語りかける運動を

〈たましい〉は目に見えない。鈍感な人には見えない。弱い力だ。微細なさざなみだ。人に何かしら押し付けたり、マニュアル的に教えたりできるものではない。その意味で「まず自分」であり、その「わたし」の生き方によって、そのさざなみが伝わるという性質もっている。〈スピ・シン主義〉の社会運動は、そうした性質に対応しなくてはならない。

たんなる反対や否定は、権威主義の裏側でしかない。まず自分から〈スピ・シン主義〉を実践する。それは現存秩序から逸脱するスタイルで生きるということだ。それ

を周りにさりげなく表明する。周りが変わるかどうかは、周りの人が決めればいい。

もちろんこれからも旧来型の対決姿勢の運動が必要なことはいくらでもあるだろう（むしろほとんどがそうだ）。でも、足りなかったものを僕は徐々に自覚してきて、〈スピ・シン主義〉といている。いい運動だな、いい人だなと思うものに共通にあるのは、〈たましい〉であり、シングル单位的感覚だ。とすれば、強調点は、交渉相手の心理に自分の中の矛盾、ためらいに気づいてもらい、自らこれでいいのか、相手のいうことにも理があるのではないかと考える契機を与えるような関わりが大事ということだろう。「組織人、公人、常識人」と「〈たましい〉の声を聴く私個人」の分裂を誘い出すような運動がいるのだろう。

韓国のある運動で、警察や国会議事堂の前にひとりで体の前後にメッセージを書き込んだプレートをくりつけずっと立ち続けるとか、異議を唱える個人が「ひとりデモ」を行うというのがあったそう²⁴⁾。中坊公平氏が関わる運動でも、役所の前にずっと立ちつづけるというのがあった。また組織人の相手に公人と私人の分裂をもたらすような語りかけを粘り強く行い、相手がそれに応えて、既存の法律の読み方を一歩踏み込んで変更したということがあった。WWN（ワーキング・ウイメンズ・ネットワーク）の運動でも、新聞記者個人の差別される悔しさという心の奥深いところに訴えるからこそ、記者個人が〈たましい〉のこもった記事を書いた。

どの運動でも、ひとりの人間がいて、〈たましい〉で語りかけ、それを受信した個人がまた、少しの勇気をもって応じていくという、波のような広がり方があるのである。そこには他のだれかれでなく、「かけがえのない、わたしという独自の思想をもった個人」つまり“シングル単位人間”がいる。

どうせいつもの反対勢力だろう、これはどこどここの圧力団体だ、連合だ、共産党だ、〇〇だ、××だというように見られては、多くの人が集まった集會も、デモも、シュプレヒコールも署名も、座り込みも、相手の心に届かない。力をもたない。だが、一

24) デモもその他の運動でもお決まりのやり方をかえることに希望がある。うたって踊るパフォーマンスとか、各自が作った独創的なブラカードやコピー、サイレントでろうそくをともしなどの工夫がなされている。各人が一人になって、あるいはとても少数人数でバラバラにデモをして、最後にどこかで集合するというようなやり方のほうがいいときもあるだろう。友人の市議員は、駅前にコタツをおいて「コタツでトーク」をしてウケていた。

人一人が〈たましい〉を込めて書いたということがわかるなら、署人数が少なくても「力」がさざ波のように伝わるだろう。この人をむげに扱うことができない、なんとかしてやろうとおもわせることがおこったとき、その人が動き、それを契機に社会は変化する。

パートと正社員が同じラインで働いているのに賃金が半分であるという裁判において、裁判官自体が工場現場に行き体で感じることで、判決が動いたことがあった。セクハラ裁判で、いかにセクハラされた後の対応が一義的でないかを切々と訴える手紙がたくさん寄せられたとき、「セクハラされた後、冷静にしていたからセクハラがあったことは疑わしい」という判決がひっくり返ったことがあった。粘り強いということが、相手を根負けさせ、変化をもたらしたということがあった。「根負け」とは何なのか。

「力の対決」だとはよくいわれてきた。力とはなんなのだろう。何が伝わり相手を変えるのだろう。その「力」とはなんなのか。

自分たちの運動内部を変革する運動

前掲図表-2の「2 社会システム・制度を改革していく実践運動」を高い水準ですすめるためにも、同時的課題ではあるが、自分たちの社会運動内部の質を意識的に高めなくてはならない。運動の「方法」「組織運営のあり方」「ひとりひとりのたちふるまい方」つまりプロセス、スタイル、質そのものに、未来社会の雛型が反映されなくてはならない。内部構成員の生きる質が高まるようであらねばならない。

運動の内部的質を向上させること自体が、運動の目標となる。一般理論というより、具体的に、本当に、日常のいたるところにおいて、権力関係を破壊して対等にかかわるという能力＝スキルこそ、訓練されなくてはならない。学習・研修が、スピリチュアルで、スキル向上的なものである必要がある。ワークショップ的学び、小グループでの活動、常にエンパワメントを意識する風土、民主的な新しい組織運営方法の実践がある。非官僚的、非指導的、非好戦的な、新しい運動スタイルの実践がある。心をこめて語りかけるような運動、社会全体の高い水準を求める運動となる必要がある。

例えば、労働運動では、単に正社員の自分の賃金や雇用だけを考え保守的になるようなことでは、雇用の多様化、規制緩和の中では対抗できない。団結という言葉の質

を考えなくてはいけない。身近な職場でいじめがあるとか、社会的不正があるとき、それを一人でも「おかしい」といえるようなことが大事にされる運動でありたい。各人が、狭い利益視点から、大きなつながりの視点、人間の良心に照らし合わせた視点をもつようになる運動でありたい。女性や非正規労働者を差別していて、大きな待遇格差を容認していて恥ずかしくないか、肉のラベルで社外に嘘をついていいのか、労基法違反がまかり通っている職場で黙っていていいのか、子どもにそうした自分の仕事のことを話せるかというようなことが語られる運動でありたい。

賃下げは本当にいつでもダメなのか。増税はいつでも反対なのか。年功制自体がもつ差別性を見つめるような運動でなくてはならないのではないのか。会社人間にならざるをえないというのは本当かと問う運動をしたいじゃないか。リコール隠し、雪印事件、肉のラベル詐称事件、官僚の事実隠蔽体質などが労働組合に関係ないといえるか。ほんの例外的な事例であるが、ある会社のパートタイマーにボーナスを支給するために、フルタイマーの人たちが賃金カットに応じたということがある。そういうのを連帯といい、ワークシェアリングというのではないのか。僕もそうした運動をした。

仕事をやめる覚悟をもつ生き方を組み込むような運動がいると思う。仕事をやめたって生きられる、という「かっこいいー！映画みたいな生き方」を、もう日本は運動の課題にできるときに（潜在的には）なってきたのではないのか。環境、短時間労働、男女平等などを総合的に組み込むスタイル全般の変革運動になる段階だろう。未来社会のスタイルを実践するということは、低収入で質素に生きるとか、高い税金負担をするとか、NPO活動やボランティアで直接的に交流する（＝直接的な税のようなもの）ようなことを、いまの世の中で自分からやり始めるということだと思う。だから、ブルーハーツの『ロクデナシ』は、単なる歌であって、現実の大人には関係ないなんていえないと、僕は思う。

「誰かのサイズに合わせて／自分を変えることはない／自分を殺すことはない／ありのままでもいいじゃないか／すべてのボクのようなロクデナシのために／この星はグルグルと回る／劣等生で十分だ／はみ出しものでかまわない」（ブルーハーツ『ロクデナシ』）

希望の方向性——新しい関係性の実験・アート化

多重側面総合の運動がいるし、ほんとに素晴らしい政治家や学者²⁵⁾もいる。確かに必要だ。しかし僕は、政治家にはならない。狭義政治をあまりしたくない。他のことをしたい。それもあってええやん、と思う。個性に基づく分業だ。ひとりで何もかもはできない。多様でいい。そこを考えると〈スピ・シン主義〉とっている。

しかももっと突っ込んで言うと、「社会は当面変わらん」というニュアンスをベースに、それでもできることがあるというのが〈スピ・シン主義〉のバランス感覚だ。先にも述べたが、日本の現状はダメだが（絶望）、どのように変わればよいか、どういうシステム社会体制やどういう政治家のあり方がいいのかをわかっており、そして自分が楽しく生きるという「希望」のあるニヒリズムが、〈スピ・シン主義〉なのである。ひどい社会で鈍感な人も多いが、まともな人もたくさんいる。今の主流価値観に賛成でない人はたくさんいる。僕は一人じゃない。ジョン・レノンが「僕はドリーマーといわれるが、僕は一人じゃない」と「イマジン」で歌うように。つまり希望のもち方の質が大事な時代なのだ。

その上で考えるのは、僕は何がしたいのか、日本の社会運動として何が足りないのか、もっとあればいい運動とはどういうものかということだ。わかっている希望の方向性をまとめておくと、暮らし変革、生き方変革提唱に繋がるような文化そのものを変える“深い”運動がいるとはいえると思う。ワークショップ的教育などはすでに述べたので、いままで述べてきたこと以外の幾つかの点をここでは書いておこう。

その文脈でみると、まず「新しい関係性の実験」ということが考えられる。コミュニケーションとか共同体的なものを実践してきた運動が過去にあったが、その多くは失敗してきたし、また社会の下部構造自体を変えずに一部にだけユートピアを作り出すのは夢

25) 素晴らしい政治家や学者をたくさん知っているが、ここではぜひ桂睦子さん（茨木市議会議員、虹と緑メンバー）という僕の身近な政治家の名前をあげておきたい。なぜとくに彼女の名をあげるかというと、彼女は政治家でなくなっても平気で普通の人として生きていく人で、身近な人に決して偉そうでなく、その視点を一貫して自分の政治活動スタイルに埋め込んでいる人で、だから政治家でなくなっても友人として話したい人だからである。つまり僕の〈たましい〉において信じられる。そういう〈スピ・シン主義〉的な人が、政治をしているというところに希望がある。

想であるとして批判的に扱われてきた。しかし、今日、再度、21世紀的にネットワークの一形態として、「仲間たち（時には自分ひとりだけ）で新しい関係を実践的に試みて未来社会の雛型を作っちゃおう！」というのはアリと思う。社会主流の価値観から解放されて、新しい生活様式を作り出すということは、実はこれまでの社会運動にもあった性質だが、そこを十分に意識することが少なすぎた。だが、今日、ワークショップやセルフヘルプ・グループ、一部NPOの運動が見直されている理由のひとつは、この「未来社会のスタイルの実践」「新しい生き方の創造」という面からだ。いきなり完璧な社会はできないから、そこに至る段階として、未来社会の先取り、パイロットプラン的实践をしてしまうというわけだ。そういうことをいろんな人がはじめて、その蓄積が社会をいつか急速かつ劇的に変化させていく可能性を高めるだろうから、意義のあることだと思う。

資本主義が爛熟した成熟社会において、多様性を実践するためにも、短期でも何かしら新しい関係を実験・実践してみるって面白いと思う。「一人じゃない、でも少数派」というとき、マイノリティたちが1回の人生を楽しくサバイバルする方法として、コミュニン的实践は重要な選択肢の一つだ。永続しなくても、できてはつぶれ、つぶれてはできて、いいんじゃないか。失敗していいじゃん。完璧な全体のデザインがないとだめというより、いいかげんかもしれないが、即興的にやっちゃうということの面白さに希望がある。素晴らしい社会運動は、進行や結論・ゴールがすべてあらかじめわかっているのではなく、瞬間の決断や偶然性を生かす感性（偶然的出来事に普遍性や突破口を見出す鋭い感性）によって参加者の創造性が積み重ねられて進んでいくようなもの（進行先不明の即興性ある運動）なのだ。

次に、生活にアートを入れる、生活のアート化、アートの生活化、芸術的な面での運動の展開、アートの運動のあり方の模索も鍵の一つだろう。性や身近な人との関係、自分との対話、掘り下げの中に——制度だけではない——多次元分野、規範、無意識分野での変革の可能性があると述べた。そこに至らないような「表面」には、希望は、僕にはない。「アート水準」っていうのは、特別の専門的芸術のことっていうんじゃないくて、そういう総合性ってことだ。〈たましい〉に関わる大事な領域を扱うようなことを、アートというのだ。生きていること自体が表現なのだから、その表現を総合的に深くしていくことがアート。後述するアクティビスト的ということにも繋が

るが、一人一人がそのような表現の楽しみを見出し、もっと高い水準の「自由」をもとめるようなことが、社会運動の積極的なイメージだし、それは、「あらゆる人がアーティストに」というスローガンになるだろう。映像や音楽の影響力はいかほどなのだろう。例えばミュージック TV に社会性ある作品があればどれほどいいかと思う。「新しい関係性の実験」と結びつけて、アート村づくり、街づくりをしたり、メディアと結合したりするのも面白いだろう。

メディアの領域の闘いも重要だ。メディアは、単にその伝達量が大きいという意義だけでなく、メディアそのものが現実を作り現実を変える主要なフィールドであるということ、メディアの中で僕は生きているという面があり、生活の基盤自体になっているということ、承認を求める多くの人のエネルギーがまさにメディアに集中しているということなどによって、メディアの中で社会運動のメッセージがどのように存在するかが主要な闘争課題となっている。わかりやすく、生活や多くの人の関心に則して、〈スピ・シン主義〉的なメッセージを提出することができたらいいと思う。

自分だけでもできることをする

この点は、別稿で論じた「個人の生き方」(拙稿[2003b])にも大いに関連するのだが、こんなひどい時代を生き延びる、サバイバルするという視点を組み込んだ運動が大事と思う。当面日本社会はひどくなる一方だろうし、なかなか集団で運動して大きな成果が得られるとか、多くの人が参加する大運動になるというのが難しい時代だ。相手を変えるってしんどいことだし、前衛党的に相手に関わるのはダメだし、むしろ、「人を変えられない」というぐらいの感覚で運動する方がいい。そのとき、自分ひとりだけでもできることをするとか、身近な範囲でボランティア的な形で身体直接的な交流をするというスタイルは、すぐにできそうで希望が持ちやすい。そうする中で、希望や理想や自分らしい生き方を失わず、何とか元気にサバイバルするって感じがいい。

具体例としては例えば、家族や友人や近所の人・地域の人と深い会話をしていくとか、人を助けるとか、少人数グループでの活動をする、NPO活動をする、ボランティア活動をする、といったことで、税金の代わりに直接的な社会貢献をすることである²⁶⁾。金中心の社会でまともな人が生きていけるという選択肢を見せるためにも、低

収入で生きるということを実践的に示すことも運動だ。身の回りの古いスタイル（制度、個人（的人間関係）、運動）を少しでも変えていく、身の周りの権力関係・代行主義的言動・古い運動の見直しを提起することなどは、自分ひとりでもできることである。権威的にならない、謙虚、非威厳、非傲慢に振舞うということはすぐにできることである。こうした活動も、先ほどと同様、個人で、時代を先取りして、未来社会の雛型をつくっているという面がある。

自ら動くという事が、大きな事につながっている例として、後述する「非暴力平和隊」のことを少し紹介しておこう。2002年春の段階で、イスラエル軍が侵攻したパレスチナ自治区にとどまって、軍の弾圧を体をはってとめようとする欧米からやってきた人権活動家・NGOメンバーたちがいた。素晴らしい人たちだ。そのひとり、イタリア歯科医のディカッカモさんという。「国連安保理決議は無視され、国際社会が派兵する気配もない。ならば我々がイスラエル軍とパレスチナ人の間に身を置こう。それが人権侵害をとめる唯一の方法だ。目の前で人が倒れたら、自らの命を危険にさらしても助けるほかないじゃないか。」（『朝日新聞』02年4月10日）

繰り返しているように、「他者を変える」啓蒙、教える、価値判断を押し付ける、洗脳、集团的熱狂、リーダー待望、心酔、「内面化する権力」「努力・勉強という暴力など」はダメなのだから、それらに代わって、個人・自分自身が深く変わるということを行い、それを相手にみてもらっただけというような感覚（の運動スタイル）が、かえって微細なものを伝えるときにはいいんじゃないか。その自分の変化で、自分とあなたの関係を変えていき、そこで言葉にならない〈たましい〉のようなものの伝達が可能となる。そんな感じ。

それに加えて、「ひとり」を大事にする視点は、個人の責任追及と、ひとりの勇氣ある告発ということの尊重の意味もある。日本従来の組織優先・内向き指向・横並び・利権擁護・隠蔽体質を解体するのは、それを内部から批判する勇氣のあるひとりの告発からである²⁶⁾。自分の利益を守るための団結も大事だが、皆と一緒にというより、

26) 税金を払うことは、本質的に社会的連帯の行動である（その意味でも、北欧の高い税負担は素晴らしい。日本の野党は減税を言うべきでない。）ボランティアで直接的に交流するということは、直接的に助けの必要な人のところにわたしのエネルギーを提供するという意味で、まさに納税的な、したがって社会連帯的な行動である。

自分の良心、〈たましい〉に照らし合わせて、自分の不利益を覚悟しながらの勇気ある告発行動は、とても大切なことだと思う。その裏返しで、自分が間違ったことに関わったことを勇気をもって反省する個人が生まれ出ることにも希望である。その文脈で、個人の責任を徹底して追及することが、全体の倫理を保障する。僕が求める社会運動は、そうした「ひとりの思い」「ひとりの責任」を尊重するものでありたい。

そうした僕の感覚は、団結よりも個人の〈スピ・シン主義〉的自立を重視する運動、一人一人の意識水準を変える運動、参加者の覚醒を求める運動ということの重視ということになると思う。人生の意味を考えるようなこととつなげて行う運動。そんなことを言ってもらえない切羽詰まった社会運動状況ももちろんあると思うが、どんな運動の中にも参加者一人一人が自分の〈たましい〉に向かうようであれば、なんか自信も

27) 内部告発者の擁護システムは、民主主義社会には絶対に必要な制度であるが、日本にはそれが欠けており、逆にそれを組織への裏切り（密告）ととって、いじめ排除する体質が続いている。欧米などでは、健康、環境破壊、安全などについて内部告発が奨励され、告発が不利にならないように法で保護されている。（英国の1998年公益公開法、韓国の官民対象の2001年腐敗防止法、米国の78年、89年の内部告発者保護法などがある）。

だが日本では、内部告発どころか、夫が会社で過労死寸前まで違法的にサービス残業していることを妻が匿名で労働基準監督署に電話しただけで、会社で犯人探しが行われて夫が退職せざるを得ないような状況である。参考図書として、串岡弘明『ホイスルブローア－：内部告発者』（桂書房、2002年）や宮本一子『内部告発の時代』（花伝社、2002年）、『週刊金曜日』2002年3月22日号の内部告発社員の戦いのルポ等がある。

なお日本でも近年、ようやく内部告発者保護の動きが少し始まっている。例えば、川田悦子氏の公益開示法案、民主党の行政機関対象の内部告発者擁護法案などがある。2002年4月に、国民生活審議会の消費者政策部会では、商品情報の開示をすすめるため、法令違反企業の内部告発者を法的に保護する制度を検討課題としてあげ、それをうけて内閣府は同年6月消費者保護基本法を改正し、内部告発者を解雇・配転などから守る「公益通報者保護制度」の導入方針を決めた。04年の通常国会に法案提出の予定。これについては対象を限定しすぎているとの批判がある。企業監視に取り組む市民団体「株主オンブズマン」は02年10月に「内部告発支援センター」を設立した。弁護士、会計士などが相談員になり、不正情報を調べ、捜査当局に通報したり、告発者の法的立場を守ったりする。

だが他方で、個人情報保護法、人権擁護法、青少年有害社会環境対策基本法などのメディア規制法を通じて、内部告発を含めて自由にものを言う権利の規制が進められている。

って「この運動はステキだ」と言えるんじゃないかと思っている。

社会運動の変革として、もっと「ああいうのがいいな」というイメージを伝えるものになる必要がある。魅力的とか、オシャレな、アートな運動にならなくっちゃと思う。思うのは簡単だが、実践が難しい。でもきっとそうだ。未来社会のイメージ提示ができていない運動は、成熟社会段階ではだめだ。若い人にどういう希望があるか。40歳以上がどのような生き方をするかが勝負なんじゃないか。だから自分ひとりでも少数の仲間だけでも、楽しくオシャレにやっちゃう、生きちまうのが、運動に希望をもたらすという直感がある。そういう新しい「運動」をしたいなと思う。環境に配慮した生き方、短時間労働で子育てを楽しく男女平等でやっちゃうなど、僕が「シングル単位」と名づけたオールタナティブなライフスタイルを、個人的実践でみせることが運動だ。

アクティビストになろう

以上のような「少し社会的なことを、自分から進んで、楽しく、やっちゃう」というようなスタイルを「アクティビスト」と呼ぶことがある²⁸⁾。これは、新しい運動スタイルを象徴している。アクティビストとは、イデオロギッシュに大きな声で主張（破壊、反対、闘争）する政治的な運動家でも、アーティストでもないが、社会を変えしかも少しアートの要素をもって表現するという意味で、運動家やアーティストに近い人のことである。

政治闘争とか芸術家として関わるといような、上のほうから伝統的手段で関わったり、ええカッコしたり、抽象的に戦ったりするのではなく、身近なところでやるべきこと（すぐにできること）を素直にする、そのようにまず“行動”することで“変化した現実”を積み重ねていくような人々のことである。アイデアを開放し共有し新たな動きを楽しそうに作り出す人たちである。静かな、従来とは違ったエネルギーの伝え方で、現代の状況にじわっと圧力をかけ変化を生み出していく存在である。俗っぽく言えば、マジメな硬い運動家ではなく、かっこよくとかオシャレに、楽しそうに、

28) アクティビストの具体例については、A activity [2002] 『アクティビスト』を参照のこと。

自分たちの身近なところで少し社会的に動いちゃう、そうして自分たちで社会を担っちゃうような人を、アクティビストという。

ベトナム反戦運動もはじめ一人のデモから始まったといわれる。自分が変わることが、世界が変わる一歩であり、周りの人にその存在全体で語りかけるような「運動」とも呼ばないような柔らかいアクティビスト的なスタイルが、これからの時代、押し付けがましくなくて、広がりやすいと思う。でも何らかの新しい要素をこれまでのお決まりではない形で表現するのだから、実はアートのセンスが必要で、誰にでもできるってわけじゃない。だが社会の変革がある種のエネルギーによって、新しいものに変わっていくこととしたら、アクティビスト的なかわりこそ、これから魅力的なものとして多くの人の共感を得ていくだろう。

例えば、A activity [2002]『アクティビスト』に載っている人たちは、皆すてきな生き方をしている。その力が伝わるからこそ、アクティビストなのだ。ハスラーアキラさんの『売男日記』は〈たましい〉が伝わるすばらしい作品だ。彼は、アーティストとして、キャッチーに作品を作り、画廊で発表して、美術雑誌に載って、アーティストですと評価されることでは、H I Vに感染した友人になにもやってあげられないという。それで、多くの人の心に届くポスターやポストカードを作ってあちこちに置いたり、クラブパーティーを開いてエイズやセックスを題材にしたショーもやった。テレビも新聞も役に立たないことは、9・11で明白になったといい、世の中には無関心が溢れて自分たちもそれに巻き込まれそうになるから、「世の中には他にもこんな視点があります」ということをシェアしていこうと思って、彼は活動する。苦しいことを乗り越えるためにも、武器を楽しさとして。自分の伝えたいことをどこまで本当に伝えられるか。そのことに敏感な彼のつむぎだす言葉・表現スタイルには力がある。

羽仁カンタさん（A SEED JAPAN 理事、CHANCH! 発起人）も、環境問題などで社会を変えていくことを創造性溢れるやり方で行っている人だ。彼は、「A SEED JAPAN」「エコリーグ」「POWER～市民へ力を～」「CHANCE!（平和を創る人々のネットワーク）」など自由でおもしろい参加型の仕掛けで多くの人々をつないできた。古臭い運動にあった説教くささでなく、各人が自分から進んで行うようにもっていく。「ゴミを捨てるな、拾ってください」といわれるとかちんとくるが、「ゴミは減らせますよ」「自分のことは自分でできる」といわれて入場ゲートで袋を配られたりデポジット制にされたりするとゴミが減る。それを主催者やタワーレコードと

協力し合って行こうというように、周りを巻き込む中でじわっと広げていくところはとてもアクティビスト的だ。

その他、無人島を手に入れて自分たちの楽園を作りたいと、いかにも若者たちが目を輝かせそうなことをやっちゃおうとする高橋歩さんの「島プロジェクト」も、とても魅力的だ。多くの人がボランティアでかかわりたいとおもえるような仕掛けを作るセンスと行動力には、見習うところがとても多い。「知識でなく実感を。バーチャルでなくリアルを。明日でなく今を。主張でなく愛を。世間ではなくアナタを。すべては、ひとつ。ココロの根を伝う。」「夢があろうとなかろうと、楽しく生きてる奴が最強」「自由を求めることなく、自由をさけることなく、さりげなく、自由に生きればいい」²⁹⁾というような彼の言葉には、シンプルだが真っ直ぐに中心に行く力があるので、僕の本を読まない（読む気にならない）僕のゼミ生も彼の本をととても気に入っていた。

組織と個人——自尊心あるシングルを単位とした運動へ

僕の「シングル単位論」に対しては、「それはエリートや強い人の論だ」という批判がかなりある。「弱い私たちは支えあい連帯して闘っていくべきだし、家族や仲間が大事」というような感覚がかなり多い。しかし新しい運動を考える上でも、この「ひとりひとりの自己決定・自立」の理解は重要だ。

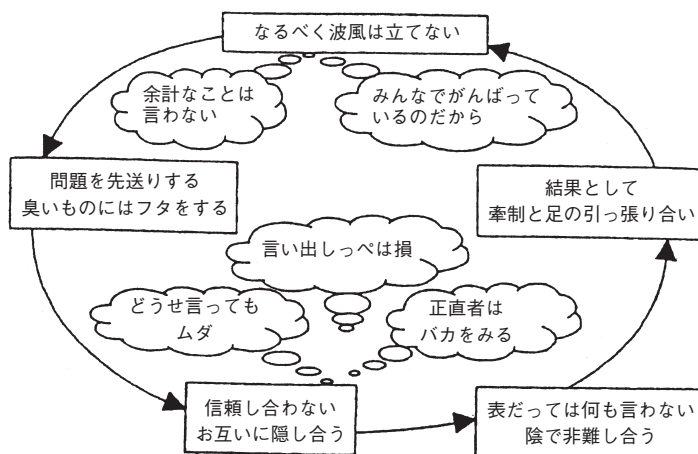
たしかに人は弱い面も矛盾ももっている。しかし、僕のシングル単位論は、障害者の自立生活運動や性的少数者の運動、フェミニズム、労働場面におけるパートや女性といった「弱者」、独身やシングルマザーや離婚者たちの声と運動から学び、考えたものだ。彼女／彼らは決してお金や暇に恵まれたエリートでもないし、特別能力が高いとか、特別に強い人格をもった人というわけでもない。マイノリティだからこそ見えてきたこと、感じてきたことを、自分が誇りをもって生きていくためには言わざるを得ないからこそ言う人たちだ。

それに対し、「私は強くない」というその人自身は何をしているのだろうか。結婚している人は結婚制度に対してどこまで考え、離婚やシングルマザーの生き難さをどう考えているのだろうか。異性愛者は同性愛者のことをどこまで知っているのだろうか

29) 高橋[2001]『LOVE & FREE』より

図表—3

問題のある組織の体質を整理してみると



出所：柴田昌治 [1999] P. 21

か。正規労働者は、非正規や女性労働者のことをどれくらい考えてきたのか。自分が何をしているのかが問われると思う。そしてその問いはもちろん、常に僕自身にも「マイノリティ」の人たち自身にも向かう。

その上で言うのだが、僕が言いたいのは、「人間は弱い」などという言い方で自分の無為を正当化する人が多い限り世の中は変わらないし、民主主義社会になどなりはしないということだ。図表—3のように「みんなでがんばってるんだから問題点を指摘しない方がいい」、「なるべく波風は立てない方がいい」、「言い出しっぺは損」、「どうせ言ってもムダ」「正直者はバカをみる」などといってるかぎり、お互いの信頼感が育たず、けん制と足の引っ張り合いが生じ、問題は先送りされ、組織も社会も変わらないままだ。

こうした悪循環を断ち切るのは、勇気ある個人の行動だ。僕は、誰にでもある種、“能力”があるとおもっている。自分で考えること、イヤならNOということがとても大事な原点だと思っている。そういう能力を伸ばすことが教育であり運動なのではないか。自尊心ということが僕にはとても重要だ。それを奪われ、それが無いと思

こまされてきた者たちが、自分に誇りを持てるようになること（エンパワメント）こそが希望であり運動の重要な目標（のひとつ）なのではないか。〈たましい〉に気づくとはそういうことでもある。

皆が自律性をもち、自己決定し、自分はどう生きたいのかを常に考えるということこそを「自立」というのであり、民主主義はそうした個人の集まりによって本物となる。運動はもちろん運動としての成果を獲得する事も目標としているが、図表—1でのべた活動領域の（カ）キ）ク）、すなわち運動に関わる一人一人の人生が豊かになるかどうか、一人一人が自分の欲求として運動に関わりそこで〈スピリチュアリティ〉に目覚め、生きる力をつけるかどうか、また、運動の重要な目標なのではないか。

この点を大事にしたいと思う僕は、「個人」に問いかけつづけることを捨てられない。僕の親友が「私がしたいことと私たち（組織）との区別が重要だよ」と言っていた。組織に従属しないとはどういうことなのか。常になぜと考え、疑問を口にし、組織にでもいつでも反逆する気概を持ち、自分の責任で自己決定を積み重ねていく人に、皆がなるしかないのではないか。運動をするというとき、語りかける相手にどうなって欲しくてその人に向かうのか。その人個人の目標、自分の目標を明確にすることが重要なのではないか。住民投票でもそれをおこなうと決めるからこそ人は考え始める。考えられないのではない。「自己決定できるほど賢くはない、強くはない」ということがリアルだとは思えない。「社会とどう関わるか、何をするかは自分で決めるしかないんだよ、あなたが選びや」ということ。「問題を解決したいと思う人しか助けられない」（安積遊歩さんの言葉）という一見突き放したスタイルこそ、僕はこれからの運動の核だとおもう。

西欧の「新しい社会運動」

以上の発想と近いところをうまくまとめているものとして、フランス緑の党の『緑の政策事典』にある「新しい社会運動」の叙述を紹介しておこう。

エコロジストが目指す持続的発展様式への移行は、制度の先導で上から実現できるというものではない。新しい考え方、新しいシステムに至るためには、市民が自立し、まず変化が必要と大多数の人が気づき、その人たちによる集団的な行動を通じて今ある世界観と別の世界観が広まる必要がある。

新しい社会運動は、既存の制度を覆そうとするものである。参加者は、プロの活動

図表—4 新しい社会運動の要素

- | | |
|---|--------------------------------------|
| A | 文化そのものを変える運動，多重側面総合（全領域）の運動 |
| B | 戦略体系：ビジョンとポリシーと実践 |
| C | 政治への新しいスタンス：政策，個人責任，民主的組織論，限界認識 |
| D | ビジョン・理論・思想のある運動へ |
| E | 組織重視からNGO的なものへ |
| F | 個人の変容重視，ワークショップ運動の視点，民主主義・人権擁護・平等の体感 |
| G | 〈スピ・シン主義〉を社会の隅々に広げる運動 |
| H | 非セクト的な幅ひろい連帯，無名性 |
| I | 希望のもち方 ①コミュニケーション型＝新しい関係性の実験 |
| J | 希望のもち方 ②生活のアート化 |
| K | ひとりでもできる運動＋アクティビスト型 |

家を生んできた「分業や位階制の尊重，ルーチンワークといった官僚制」を拒否しなくてはならない。組織や政党や出来合いのイデオロギーに白紙委任せず，自分たちで決める。単なる権利要求を超えて，内部での実践を通じて，今とは別の社会モデルを描く。男女比意識などマイノリティの意見表明を重視し，意見の多様性，討議，コンセンサスを重視する。多数決が基本ではない。ラジカルな長期目標をもつとともに，中短期的な達成可能な目標ももつ。政党とも連携し，既得権益の擁護という直接の利害を追求するだけでなく，各社会層が互いにならぬように，社会のメカニズムが連動していることに気づいて市民の自立・自律度が高まっていく運動。そういうものが「新しい社会運動」であると。そしてそうした「新しい社会運動」は，緑の党が目指す「今とは別の政治」に呼応しているとして，緑の党は，それを支持し連帯している³⁰⁾。

新しい社会運動の特徴のまとめ

まとめておこう。「新しい社会運動」がどういうものであるか，大体の方向性はわ

30) フランス緑の党[2001] p216-223をベースに伊田が加工修正してまとめたもの。

かりかけていて、一部の人は直感的に実践しているが、社会運動に関わっている多数の人にはまだはっきりしていないという状況だと思う。そこで僕は、その新しい流れをまとめてきた。それを一言で表すと、「あらゆる人がアーティストに！」となると考えている。

大きな方向・発想は、古いやり方をやめ、参加型民主主義、非暴力主義、社会的公正、エコロジー、多様性、〈スピリチュアリティ〉、スロー、エンパワメント、シングル単位、アソシエーションなどの新しい価値観にそったものにしていくことだろう。

そこへ至るための鍵概念としては、1) 一人でもできることからするスタイル、2) 〈たましい〉水準を意識するアートのもの、3) ワークショップ型の学びあうスタイル、4) 楽しくやっちゃう、アクティビスト的なスタイル、の4つがある。これを一言で表すと、〈スピリチュアル・シングル主義〉となる。しんどさの元凶は「自分がエンパワメントできていないことだ」と捉え、人権を、自分の解放と捉える視点が鍵である。

3 新しい社会運動の具体像の一例

非暴力平和隊 (Nonviolent Peace force=NP)

紛争地域に丸腰（非武装）の市民が100人規模で赴き、命を狙われている人との同行・同居による保護・救出、人権侵害の記録・公表、敵対する両者間の仲裁・調停、紛争後の平和構築の支援などの「非暴力的介入」を行うことで「人間の盾」となって、暴力や人権侵害を阻止・防止・監視する「非暴力平和隊 (Nonviolent Peace force=NP)」という考えがある³¹⁾。簡単に言えば、市民が紛争地に行って座り込むというような形での「市民のPKO」って感じ。2002年のイスラエルによるアラファト監禁に際して、民間人がそこに行ってアラファト議長と居残りつづけることで、イスラエルによる虐殺を防いだような活動。

NPのアイデアは、非暴力直接行動主義の伝統の上に、1999年ハーグ平和市民会議での議論を踏まえて、米国の平和活動家デビッド・ハートソーさんたちが世界に呼びかけてはじまった。2002年11月には47カ国の人々が集まり設立総会が開かれ、正式に発足した。2003年には正式プロジェクト第1号（スリランカ派遣）を実施する予定と

31) 『朝日新聞』02年4月25日および6月30日、12月3日記事など。

なっている。紛争地域に赴く隊員には、冷静さやスキルが必要なので、2-3ヶ月程度の非暴力トレーニングや語学・文化教育が施される。ドライ・ラマなど7人のノーベル平和賞受賞者が支持を表明している。将来は紛争に即応できるように、世界中で数百人から4千人規模の待機隊員を養成する予定。

その日本グループの代表で、02年には理事となった君島東彦さん（北海学園大学教員）は、これまでは派兵しない、荷担しないという「くしない」平和主義」が中心だったが、それだけでは不十分なので、非暴力直接行動を「くする」平和主義」がこれからは必要という。市民の非暴力行動だけで紛争地の平和を持続的に回復させることは難しいが、指導者による政治と連携することで一定の効果をもつといわれている。

イスラエル徴兵拒否

2000年9月にエルサレムにあるイスラム教の聖地「神殿の丘」をシャロン首相が挑発的に訪問したことを契機として、パレスチナとイスラエル双方のテロ報復合戦が激化し、1年半で1400人が犠牲になった。そして2001年9月の米国への同時多発テロを口実に、2001年から2002年にかけてイスラエルのパレスチナ攻撃が激化した³²⁾。

そうした中、イスラエル軍の予備役兵士、高校生らの間で、兵役拒否、中東戦争でイスラエルが占領した領土（パレスチナ人居住区のヨルダン川西岸とガザ、東エルサレム）での軍務を拒否する運動の広がりを報じる報道があった³³⁾。2001年9月に高校生62人がシャロン首相等に兵役拒否の手紙を送り、また2002年1月に新聞に軍予備役仕官たち50人による「軍務拒否の手紙」が発表された。それ以来、両方に対して賛同者が増え続けている。（前者については105人、後者については280人に増加。）

32) 2001年12月、イスラエル・シャロン首相は、国民向けテレビ演説で、「テロによる戦争がわれわれに向けられている。（パレスチナへの報復攻撃は）テロとの闘いであり、イスラエルと米国はともにある」と。責任はアラファトにあると。その後、報復として、ミサイル攻撃、空爆などが激しくなる。そして2002年にイスラエルの空爆・侵攻・占領、アラファト議長監禁、ファタハ幹部がイスラエルに暗殺されるようなことが続いた。こういうことを忘れることはできない。そうした者たちが、自分のことを棚に上げて、相手をテロだと罵り、アラファトのせいだといひ、自分たちの行動を「報復だ」といって正当化する。プッシュもそれを追認する。なんと、愚かなのだろうか。

33) 『朝日新聞』2002年2月6日、3月23日記事、NHKスペシャル『兵役拒否』02年3月17日など。

これらは、占領地で行っていること（土地の強制収用、家屋の破壊、自治区の封鎖、拷問、病院に行くことの妨害など）は、パレスチナ人の人権を侵害していることで国際人権法違反であり、本来の国防とは関係ないという理由で行われている。軍務拒否の根拠は、「命令が違法だと判断したら、従うべきでない」という軍法規定。1956年のイスラエルによるアラブ人虐殺事件で、兵士が命令に従っただけと主張したことに對し、「命令があっても兵士は良心の声に従わなければならない」と有罪となったことから作られた。しかし、現在の軍幹部は、「平時にある民主国家で、兵士が勝手に軍務を拒否する権利はない」と。だが拒否運動をしている彼らは、「紛争の解決はイスラエルとパレスチナの共存、公正な和平にある」とみており、「入植地は最終的にすべて撤去されるべきだ」という。

兵役拒否の高校生の中には、招集通知がきてそれを拒否して軍刑務所に収監された者や、裁判闘争をはじめた者がいる。彼らの考えは、どんな軍隊であれ反対という絶対平和主義もあれば、イスラエル国家を認めた上でパレスチナとの共存を考えるもの、イスラエルという国のあり方（ユダヤ人の国を作るというシオニズム）自体に疑問をもつものなど多様だ。

軍務拒否したハイム・ワイスさん（32歳）はいう。

「私は国を守る任務なら喜んで軍務につく。しかし占領は、それ自体が非人道的な行為だ。社会経験を積み、世界のことも分かってくると、占領地で軍務を果たすのは人間として耐えられなくなった。パレスチナ人への抑圧がさらなる暴力を生む。占領の任務は国防にあたらぬ。……占領に疑問を抱いていたところへ、友人を通じて拒否運動を知り、賛同した。軍でのキャリアを放棄しようというのは簡単な決断ではないが、「拒否の手紙」に署名したのは、軍の刑務所に入れられようとも、占領地には行かないという意思表示だ。」

また裁判闘争をしている平和主義者18歳のアミル・マレンキさんは、「街で誰かに襲われたらどうする」「追いかけてきたら」「殺そうとしたらどうするか」と聞かれても、「話し合う。通じなければ逃げる。襲われたら、自分の身を守るために必要最小限の力を使う」と答えるような青年だ。

イスラエル国内では、彼らに対し「右派、ナショナリスト、愛国者」や「普通の市民」から「裏切り者」「臆病者」という非難と脅しといじめ（無視、子どものつきあいを絶つ、学校中退など）が続いているが、その中で彼らがとった行動は、ホンモノ

の匂いがする。ここには、「自由も責任も選び取る自立した個人＝シングル単位人間」がある。人の痛みを民族を超えて想像し、勇気をもって社会的行動をするスピリチュアルな姿勢がある。

しぶやさん、しぶい！

若いフェミニスト、渋谷知美さんの言葉は、とてもまっすぐで分かりやすい。彼女は、知的闘争（活字闘争）の重要性を認めつつも、それだけではまったく不足であることに気づいて、次のように言う³⁴⁾。

「法改正の議論をしている間にも、そしてセックスワーク反対論者を論破している間にも、ワーカーたちはより現実的な問題——性感染症をどのようにして防ぐか、コンドームをつけたがらない客をどう説き伏せるか、売るサービスと売らないサービスをどのように客に提示するか、セックスワークをしていることで生じる孤独感にどう対峙するか等——に直面している。こうした問題を解決するのに、知的闘争は、あまりに迂遠だ。アウトリーチ活動で性感染症防止のための情報を広めたり、孤独なワーカーに自助グループの存在を教えたり、イベントを企画して人々の理解を求めたり、といった、書斎から一步踏み出した活動が有効である。」

また、日本で若いフェミニストの活動が見えにくいことについても次のように言う。

「いまや日日春（セックスワークを労働と認め、元公娼の権利を守る戦いをしている台湾のグループ）の若いスタッフにエンパワーされた私は、嘆かない。見えにくければ、目立つように発言すればいい。自分たちでイベントを企画したり新しいメディアをつくったり、マスコミを利用したりすればいい。それは、いったんモチベートされてしまえば、とても簡単なことだ。」

セクシャル・ハラスメント問題などで「実践するフェミニスト」である、牟田和恵さんも「フェミニズムは実践〈プラクティス〉のためにある。それは何も『女性運動』

34) 渋谷知美「動くこと、発言すること」『日本女性学研究会ニュース VOICE OF WOMEN』221号, 2001年5月号 掲載

に実践的に関わるという意味ではなく（もちろんそれも大事なことだが）、私たち一人ひとりの日常の現場で、周囲の人との関係の中で、よりラクにのびのびと自分らしく生きていく、その力にするためにある」という（牟田和恵 [2001]）。

「緑の人々」（緑の党）

新しい社会運動の典型例として、世界の「緑の人々」（緑の党）³⁵⁾の運動の経験から学ぶ点は多い。ここでは、あるメルマガで整理して紹介されたことをそのまま引用しておきたい³⁶⁾。

1. オールタナティブ運動としての「緑の党」（Greens）

「緑の党」は1980年にドイツで、原発反対運動や平和運動をはじめとする、さまざまな環境運動団体、右翼から左翼に至るまでのさまざまな市民運動団体が結集・連合して生まれた、地域に根ざす一大全国政治組織です。

日本では「緑の党」と訳されていますが、本来は「緑の人々」という「（既成）政党ではない政治集団」を指します。また同様に、「緑の党」の「緑」とは、日本ではエコロジー、環境保護を表す意味としてだけとらえられがちですが、本来ははるかに広い意味を持っています。

一言で言えば、それは「オールタナティブ」（alternative＝「代案」「別の道」の意）、すなわち既成の生活秩序、生活観からの脱却と転換という、新しい価値観の創造のシンボルが「緑」です。

いわば「旧来のあり方とは異質の生き方を求める」総合的な社会運動とまとめてもよいでしょう。具体的には、大量生産、大量消費・使い捨ての産業社会、経済的・物質的成長を最優先させる産業資本主義社会を否定し、リサイクル・代替エネルギーを軸にした循環型社会とエコロジカルな技術開発の推進を提唱する「脱物質主義」的なエコロジー運動、さらにそれらに準じる「ポスト産業社会の倫理」を呼びかける運動のことです。

35) 「緑の人々」（The Greens）とは、「緑の党」（Green Party）のことである。必ずしも既成政党の形式と重ならない、多様な側面をもっている（時には党的な面に批判的）ので、正確には、「緑の人々」の概念の方が広義であろう。

36) 「メールマガジン・緑の党をつくろう！」創刊号（2001年9月14日発行）より、引用。発行者は、緑の党ジャパン・設立プロジェクト、発行人は今本秀爾氏、URL：<http://lp.jiyu.net/green.htm>、Copyright. 2001-Shuji Imamoto. All Rights Reserved である。

ここには脱原発運動も含めた平和運動、労働運動、女性解放運動、地域主義運動、同性愛運動、少数者の公民権運動なども含まれます。

2. 党是について

「緑の党」の政策における原則は、(1) エコロジー的、(2) 社会的、(3) 底辺民主主義的、(4) 非暴力的に、政治的展望を持つこととされています。

このうち、(2) の社会的とは、「社会的公正」「社会正義」を追求していくという原則です。すなわち、あらゆる人種や人権差別・虐待や偏見から個人を擁護するとともに、政治的・経済的弱者の人間の・社会的立場を保護し、できるかぎりの公正な富や権力の平等な配分を政策に適用させる原則です。

(3) については、従来の既成政党のような中央からのトップダウン主義組織を否定し、ボトムアップの民主主義を完遂させる組織論に則ることです。

3. 新しい組織論の確立

脱物質主義、脱成長主義がオールタナティブな社会や生活のあり方、としての「グリーン（緑）」なのですから、「緑の人々」は、逆にこれまでの物質的繁栄や成長を最優先させ、生活環境を破壊してきた巨大資本・技術・組織のあり方を否定します。したがって「緑の党」の「底辺民主主義」とは、極力組織的権力を集中させず、分散・分権型の社会をめざすものであり、あらゆる官僚制組織、テクノクラートの廃止を提唱する立場です。それに代わり、「緑」は、地域、国家、あらゆる政治的レベルでの全住民投票や国民投票制度を盛り込んだ、直接民主主義の徹底化をめざします。

これは「緑の党」そのものの、既成政党とは異なる組織論、組織体制にもそのまま反映されています。

たとえば、ドイツ緑の党の場合、

- 底辺（地域の党員）の決定が原則的に優先される。
- 党首を置かない、複数の代表者＝スポークスパーソン制（6名で構成する幹事会、中心は女性、2年ごとに選挙で改選）。
- あらゆるポストにおいて、女性の立場を尊重し優先する。
- 代表者＝スポークパーソンと大臣・国会議員とは兼任できない。
- 地域組織中心、各地域組織<群組織（474）<州組織（16）<連邦連合組織（1）で構成される。それぞれの代表者、議長、候補者は選挙で、それぞれの下位機関から選出される。
- 議員は4年の任期を2年ごとに交替のローテーション制度。

○すべての会議は公開制にする。非公開を認めない。

といった原則が実際に適用されています。

4. 緑の党の成立背景

こうした既成の使い捨て社会、既成政党、既成の社会への「ノン」を突きつけ、政界へとその運動を広げていった「緑の人々」の担い手は、主に「インテリ層の若者」たち、つまり「学生、教師、大学教授、公務員、ドロップ・アウトの代表であり、暇と金が十分にあり、環境破壊や予想される地球の破滅を憂慮するだけの十分な教養を身につけた人々」(『New York Times』'83.2.13.)でした。実際、ドイツにおいて「緑の党」が設立された80年代当初は、大学生、ティーンエイジャーの支持が圧倒的に多かったのであり、現在も世界の主要国の「緑の党」支持者は、それぞれの国の20代~40代の有権者層が圧倒的多数を占めています。

この「緑の党」が成立した背景には、70年代後半のドイツにおいて、今日の日本にみられるような、若者の凶悪犯罪の激化、窃盗や麻薬、幼児虐待、新興宗教への入信、大勢順応と政治的無関心の蔓延、青年の失業の深刻化が起きたことがあげられます。若者の中には、家を出ての共同生活を始める者も少なくなく、さらに80年代に入ってから、「精神的に裕福な」若者たちの暴動や反抗が頻発しました。彼らの中には、単に反社会的行為に溺れていく人間とともに、そのやる場のないストレス、エネルギーのはけ口を、社会運動や政治運動に求めていく人間も少なくなかったのです。

さらにドイツを始めとして、ヨーロッパ全土には、酸性雨による森林枯渇被害、86年のチェルノブイリ原発事故を典型とする、原発事故に対する恐怖と抗議が、大きな市民運動のうねりとなっていました。にもかかわらず、ドイツのような連邦制をとる政党中心主義の諸国では、こうした市民の声を聞こうとしない、いずれの既成政党に対する不信感、いわば代議制民主主義に対する有権者の不信やいらだちがつのっていました。

こうした世論、社会の流れとともに、「緑の党」は、当初は社会運動として、後に運動する一般市民の中から議員を議会に派遣する政治運動へと発展し、結実したわけです。

WOMEN IN BLACK

「WOMEN IN BLACK」という非暴力反戦運動がある。それはとてもスピリチュアルな運動スタイルをもっていると思うので、紹介しておきたい³⁷⁾。

戦争と暴力に対するために、黒衣を着て非暴力主義で意思を表す WOMEN IN

37) これを僕は、これに参加する友人から紹介された。フェミ系のメールでもまわってきたので、ここではその紹介をベースにまとめている。 HP: <http://www1.jca.apc.org/fem/wib/>

BLACK の抗議は、パレスチナの抵抗運動に応えるイスラエルの女性たちによって1987年に始められた。旧ユーゴスラヴィアを民族間の殺戮とレイプが覆っていたとき、街頭で反戦を訴え続けた黒衣の女性たちがいた。憎悪のナショナリズムを超えて暴力に立ち向かい、犠牲者を支えた彼女たちの行動は、戦争と軍国主義、女性への暴力とたたかう世界各地の女性たちに大きな勇気を与え、その後、この運動はイスラエル、インド、インドネシア、カナダ、デンマーク、イギリス、フランス、イタリア、スコットランド、スペイン、スイス、トルコ、アメリカなど世界各地に広がっていった。

それを受けて、日本でも、恐怖と暴力による秩序を拒否し、アフガニスタンや世界各地の暴力の犠牲者への追悼とイスラム女性たちとの連帯のために、そして有事法制を廃案にするために、米国のイラク攻撃開始とこれに追随する自衛隊の支援拡大に反対するために、黒衣をまとって立つ運動が続けられている。死人のように黙っていることは戦争に荷担することだと考え、キャンドルを灯して沈黙のスタンディングを行なっている。

NPOについて

レスター・サラモン教授（ジョンズ・ホプキンス大学市民社会研究センター所長）は、福祉国家の行き詰まりへの対処策としてNPO活動が有望であるし、実際世界的に成長しているという。自分一人の利益追求というのが企業活動とするなら、NPOは各人が公益のために何かをする組織であるが、社会が成熟するにつれ、人々は何か公益に繋がることをしたいという気持ちを強く持つようになっており、これが世界的な市民組織の拡大の背景にあるという。日本でNPO関連で働く者は総雇用者中の3.5%とまだ少ないが、他の先進国ではかなりの率になっており、日本も含め各国で雇用者の増加はこの分野で著しいとみられている（『朝日新聞』99年1月1日）。今後、政府・国家や市場・企業ではない論理が社会には必要であり、それを担うのがNPOだからである。

入国管理センターへの即時処遇改善要求運動

2002年10月に行われた「STOP収容、認めよ仮放免」実行委員会による運動は、ハンストを通じてさざなみをおこしたすてきな運動だった。

西日本入国管理センター（茨木市）には、アフガニスタンやビルマ（ミャンマー）

など、国際的にも深刻な人権侵害が報告されている国から逃れてきた難民が無期限に収容され、絶望した難民たちが自殺を図るなど痛ましい事件が頻発していた。帰国費用を持っていないことを分かっているながら入管が収容したため、帰国のメドがたたず、無期限に収容されている者もいる。収容や仮放免について明確な基準のないことは人権侵害であり、退去強制手続において「全件収容主義」と無期限収容を行っていることは国際法違反である。鉄格子の中、14畳ほどの広さに11名が収容されていること、入浴の回数は週3回（1回につき20分程度）しかないこと、毎日の戸外での運動が確保されていないこと、剃刀^{かみそり}の複数人による使い回しが行われていること、入管職員による暴力、セクシュアルハラスメント、独居房への収容、戒具の使用、公衆の面前での手錠使用、体調の不良を訴えても満足な医療行為を受けることさえできないことなど待遇にも人権侵害がある。そこで、法務省及び入管センターに対し国際的な人権基準にしたがって入国管理を行うこと（即時処遇改善等³⁸⁾）を求めて、ピースウォーク・集会・ハンガーストライキが、日頃外国人支援や難民支援を行っている者やその友人たち・賛同者たちによって行われた。

ハンストとは行動である。それは口先だけでいいカッコを言うだけのものとは対極にある、つらい、身体的な行動である。ホンモノだと思う。思いは通じる。HPを通じての主張伝達も含めて、ハンストを実践した人たちの存在そのものが、何か大

38) 改善要求は、以下のとおり。

- 1, 難民申請者および難民不認定処分を取り消しを求めている人々を即時仮放免すること
- 2, 長期収容者を即時仮放免すること
- 3, 必要性のない収容をおこなわないこと
- 4, 入管職員による虐待等に対して第三者機関による申し立て制度及び調査・救済制度の確立
 - ・ 長期収容により精神的に追い詰められ自殺を企図した者に対する懲罰の禁止
 - ・ 各房を施錠せず、終日開放すること
 - ・ 仮放免要綱を改訂し、長期収容を全廃すること
 - ・ 独居房の懲罰的使用を即時中止すること
- 5, 医療体制の確立、開示原則の確立
 - ・ 本人の申し出による外部医療機関での診察を認めること
 - ・ 外部医療機関へは通訳を同行させること
 - ・ 診療記録の本人に対する文書による
- 6, 剃刀等の衛生用品の個人使用

事なもの——スピリチュアルなもの——を伝える運動スタイルであった。ハンストに関わった多くの若者自身が、他者からのスピリチュアルなエネルギーを受けたから賛同しようという行動を選んだのだ。

だが、そのことをわからない人たちがいる。この運動に対して、HP上で批判がなされた。その批判とは、例えば、「自分たちのできること」という美名で、歌や踊りやデモに終始した実利のない運動をすることは無意味である、論理的でない、単なる自己満足である、といったようなものであった。

だがそれらに対する返答は、この運動の「新しさ」「誠実さ」をよく示している。

「私もなんでハンストすることになったんやろうか？ と常日頃感じますが、意味はいっぱいあると思います。あなたがホームページを見てくれて、意見を書いて、そして返事を書けるコミュニケーションがとれるだけでもやってよかったと感じます。ハンストしてなかったら、入管の職員と直接ひざを突き合わせて話すこともできなかったし、多くの人も出会えませんでした。もちろんあなたが書きこんでくれる掲示板などなかったと思います。イベントというのは出会いの場やと思っています。今、週末ハンストした人や、このイベントに参加してくれた人とそこから知り合った人と次にどんな行動するかを相談しています。テレビを見て何か感じた人がいるかもしれません。方法はいろいろ多種多様でいいと思います。もちろんハンストじゃなくても！でも、めぐり合わせがあって今ハンストしてます。この気持ちが中に居る人を励ましたり、職員の気持ちが変わったり、人と人だから、何か感じることもあると思います。とにかく私は目の前の彼らが死ぬのに耐えられないんです。あなたとのやり方が違っていても、実際に変えられる力が少しだけでも増えています。考え出した人がいます。なぜハンストなの？ と聞いてきた人に伝えることができました。何が変わるかわかりませんが、すでに支援の輪がひろがってます♪」

その後、名古屋刑務所での刑務管による暴力問題や西日本入管センターでの職員の暴行を違法とした大阪地裁判決なども契機となって、入管政策への批判的報道が相次ぎ、徐々に入管のあり方の改善への圧力が強まっている。ハンスト運動に共感した記者たちが意識的に取材している側面があることは間違いない。「こんな運動は効果ない」と批判した者は、自分の言葉を恥じるべきだろう。

セヴァン・スズキの運動

1979年にカナダ・バンクーバー市で生まれたセヴァン・スズキは、9歳のときにECO (Environmental Children Organization) という小さなグループを立ち上げ、仲間の子どもたちと一緒に地球環境問題について学びあう活動をはじめた。12歳のとき地元バンクーバーの同級生3人とともに資金を集め、リオ・デジャネイロで開かれた「地球サミット」に出席した。その時、各国代表団を前に彼女が行ったスピーチは、人々の心に深い感銘を与えた。リオ会議以来、セヴァンは世界中の学校や企業、また国際会議やミーティングに招かれ講演をし、TVに出演し、執筆活動も行い、様々な環境保護運動を行ってきた。彼女の活動に対し、UNEP (国連環境計画) は1993年に「グローバル500賞」を贈った。

近年の彼女は、依然として経済成長重視で、タテマエを「語るだけ」の状況に危機感を覚え、スカイフィッシュ・プロジェクトと称して、政府が果たすべき責任はもとより、個人の果たすべき責任について自覚を高める運動——ROR:「アメリカの大学生が果たすべき環境への責任 (The Recognition of Responsibility)」に署名を求める活動——を行っている。

そこでは、「家庭ごみを減らす。大量消費をやめる。車の使用を控える。地元で栽培されたものを食べる。再利用できるコップを持ち歩く。自然と触れ合う」などの具体的に自分ができる行動への呼びかけがなされている。リーダーシップは自分から始まる、各個人がたくさんの影響を与える、自分たちが自然と触れ合う最後の世代となっていくのか、と次の世代への自分の責任を考えるよう訴える。

僕は、2002年秋に来日した彼女に触れ、彼女の書いた文章などをみて、とても説得力があると感じた。自分の心からの言葉で真っ直ぐに語りかけるスタイルは、多くの人に大切なものを伝える力をもっており、それは誠実でかつスピリチュアルな匂いを漂わせている。自分たちの生活のあり方を変えずに、抽象論を言ってもダメという環境運動での良質の発想を彼女ももっていた。自分にできることを考え、仲間とともに実行していこうという明るさや楽しさをもっていた。外部・他者への批判だけではなく、自分がどう生きるかという決意を明確にする、自分ができることを提唱するという点で、新しさをもった運動をしている。「もしその言葉が本当なら、どうか、本当だということを行動で示してください」と胸に迫るように訴える彼女のスタイルは、アクティビスト的で、〈スピ・シン主義〉的だと思う。以下、それがわかるよう

な、彼女の文章を紹介しておく³⁹⁾。

セヴァンの1992年のリオ・デ・ジャネイロ、環境サミットでの発言

(環境と開発に関する国連会議に集まった世界の指導者たちを前に、12歳のセヴァン・スズキが行ったスピーチ)

こんにちは、セヴァン・スズキです。エコを代表してお話しします。エコというのは、子供環境運動(エンヴァイロンメンタル・チルドレンズ・オーガニゼーション)の略です。カナダの12歳から13歳の子どもたちの集まりで、今の世界を変えるためにがんばっています。あなたがた大人たちにも、ぜひ生き方をかえていただくようお願いするために、自分たちで費用をためて、カナダからブラジルまで1万キロの旅をして来ました。

今日の私の話には、ウラもオモテもありません。なぜって、私が環境運動をしているのは、私自身の未来のため。自分の未来を失うことは、選挙で負けたり、株で損したりするのはわけがちがうんですから。

私がここに立って話をしているのは、未来に生きる子どもたちのためです。世界中の飢えに苦しむ子どもたちのためです。そして、もう行くところもなく、死に絶えようとしている無数の動物たちのためです。

太陽のもとにでるのが、私はこわい。オゾン層に穴があいたから。呼吸をすることさえこわい。空気にどんな毒が入っているかもしれないから。父とよくバンクーバーで釣りをしたものです。数年前に、体中ガンでおかされた魚に出会うまで。そして今、動物や植物たちが毎日のように絶滅していくのを、私たちは耳にします。それらは、もう永遠にもどってはこないんです。

私の世代には、夢があります。いつか野生の動物たちの群れや、たくさんの鳥や蝶が舞うジャングルを見ることです。でも、私の子どもたちの世代は、もうそんな夢をもつこともできなくなるのではないか? あなたがたは、私ぐらいのとしの時に、そ

39) セヴァン・スズキの発言やプロフィールについては、ナマケモノ倶楽部内のセヴァンのHPから引用した。 <http://www.sloth.gr.jp/Severn-top.htm>

んなことを心配したことがありますか。

こんな大変なことが、ものすごいいきおいで起こっているのに、私たち人間ときたら、まるでまだまだ余裕があるようなのきな顔をしています。まだ子どもの私には、この危機を救うのに何をしたらいいのかははっきりわかりません。でも、あなたがた大人にも知ってほしいんです。あなたがたもよい解決法なんてもっていないってことを。オゾン層にあいた穴をどうやってふさぐのか、あなたは知らないでしょう。死んだ川にどうやってサケを呼びもどすのか、あなたは知らないでしょう。絶滅した動物をどうやって生きかえらせるのか、あなたは知らないでしょう。そして、今や砂漠となってしまった場所にどうやって森をよみがえらせるのかあなたは知らないでしょう。

どうやって直すのかわからないものを、こわしつづけるのはもうやめてください。

ここでは、あなたがたは政府とか企業とか団体とかの代表でしょう。あるいは、報道関係者か政治家かもしれない。でもほんとうは、あなたがたもだれかの母親であり、父親であり、姉妹であり、兄弟であり、おばであり、おじなんです。そしてあなたがたのだけれど、だれかの子どもなんです。

私はまだ子どもですが、ここにいる私たちみんなが同じ大きな家族の一員であることを知っています。そうです50億以上の人間からなる大家族。いいえ、実は3千万種類の生物からなる大家族です。国境や各国の政府がどんなに私たちを分けへだてようとしても、このことは変えようがありません。私は子どもですが、みんながこの大家族の一員であり、ひとつの目標に向けて心をひとつにして行動しなければならないことを知っています。私は怒っています。でも、自分を見失ってはいません。私は怖い。でも、自分の気持ちを世界中に伝えることを、私は恐れません。

私の国でのむだ使いはたいへんなものです。買っては捨て、また買っては捨てています。それでも物を浪費しつづける北の国々は、南の国々と富を分かちあおうとはしません。物がありあまっているのに、私たちは自分の富を、そのほんの少しでも手ばなすのがこわいんです。

カナダの私たちは十分な食物と水と住まいを持つ、めぐまれた生活をしています。時計、自転車、コンピューター、テレビ、私たちの持っているものを数えあげたら何日もかかることでしょう。

2日前ここブラジルで、家のないストリートチルドレンと出会い、私たちはショックを受けました。ひとりの子どもが私たちにこう言いました。

「ぼくが金持ちだったらなあ。もしそうなら、家のない子すべてに、食べ物と、着る物と、薬と、住む場所と、やさしさと愛情をあげるのに。」

家もなにもないひとりの子どもが、分かちあうことを考えているというのに、すべてを持っている私たちがこんなに欲が深いのは、いったいどうしてなのでしょう。

これらのめぐまれない子どもたちが、私と同じぐらいの年だということが、私の頭をはなれません。どこに生れついたかによって、こんなにも人生がちがってしまう。私がりオの貧民窟に住む子どものひとりだったかもしれないんです。ソマリアの飢えた子どもだったかも、中東の戦争で犠牲になるか、インドでこじきをしたかもしれないんです。

もし戦争のために使われているお金をぜんぶ、貧しさと環境問題を解決するために使えばこの地球はすばらしい星になるでしょう。私はまだ子どもだけこのことを知っています。

学校で、いや、幼稚園でさえ、あなたがた大人は私たちに、世のなかでどうふるまうかを教えてくれます。たとえば、

- ・ 争いをしないこと
- ・ 話しあいで解決すること
- ・ 他人を尊重すること
- ・ ちらかしたら自分でかたずけること
- ・ ほかの生き物をむやみに傷つけないこと
- ・ 分かちあうこと
- ・ そして欲ばらないこと

ならばなぜ、あなたがたは、私たちにするなということをしているんですか。

なぜあなたがたがこうした会議に出席しているのか、どうか忘れないでください。そしていったい誰のためにやっているのか。それはあなたがたの子ども、つまり私たちのためです。あなたがたはこうした会議で、私たちがどんな世界に育ち生きていく

のかを決めているんです。

親たちはよく「だいじょうぶ。すべてうまくいくよ」といって子供たちをなぐさめるものです。あるいは、「できるだけことはしてるから」とか、「この世の終わりじゃあるまいし」とか。しかし大人たちはもうこんななぐさめの言葉さえ使うことができなくなっているようです。お聞きしますが、私たち子どもの未来を真剣に考えたことがありますか。

父はいつも私に不言実行、つまり、なにをいうかではなく、なにをするかでその人の値うちが決まる、といいます。しかしあなたがた大人がやっていることのせいで、私たちは泣いています。あなたがたはいつも私たちを愛しているといいます。しかし、私はいわせてもらいたい。もしそのことばが本当なら、どうか、本当だということを行動でしめしてください。

最後まで私の話をきいてくださってありがとうございました。(翻訳・佐藤万理, 辻信一)

セヴァンの「2002年段階のいくつかの文章」

「私達は自分達の手で汚してきたものをそのまま放置し、自身のライフスタイルが引き起こした諸問題に目をそむけている。カナダでは、西海岸で鮭が全滅の危機にさらされ、東海岸の鱈と同じ運命をたどっている。それでも我々は乱獲をやめようとしません。化石燃料を大量に燃やしたことが直接の原因で、気候変動が起こっていることに気づき始めても、都市では相変わらずSUVを走らせているのだ。……

真の環境革命は、私たち若い世代の手にかかっている。各国のリーダーたちが立ち上がるのを待ってなんていられない。私たち個々人の果たすべき責任が何であるかを見極め、どうしたら変化を起こせるのか考えてみようじゃない。……

リオから10年経ったが、私は今でも世界の首脳達に対する呼びかけがまだまだ足りないと感じている。ガンジーがその昔、「変化を望むなら、自ら行動を起こしなさい」と語ったが、私は変化が必ず訪れることを確信している。なぜって、私自身が日々変化し、私が直面している様々な問題についてまだ答えを捜し求めている段階だから。どんなふうに自分の人生を送るかについても私はまだ答えを出せていない。確かに私たちの前に立ちはだかる課題は大きい。だけど、私たちが自分自身の責任を自覚し、

持続可能な選択をしていけば、諸問題を必ず克服できるって信じている。だって私たち若者こそが、変化をおこす潮流の担い手なのだから。」

「今、私たちが責任をもった行動をとれば、未来の学生たちは私たちの時代を、思いやりのある生き方と思いきった変革の時代として思い起こしてくれることになるでしょう。」

名古屋NGOセンターの運動

名古屋NGOセンターは、設立5周年を迎えた2000年に、それまで無我夢中に続けてきた活動を見直し、よりよい活動を行うための活動計画を作成した。そして、より多くの人と共に活動していくため、センターの理念・目的を明文化することとなり、センターにかかわるより多くの人々の意見を反映させて、2002年5月に「名古屋NGOセンター憲章（愛称：ステファニ憲章）」を完成させた。それは新しい社会運動の精神がよくわかるものなので、ここに紹介する。なお、ステファニ憲章とは、設立以前から中部地域の市民活動を支えてきた、前理事長ステファニ・レナト氏の名前にちなんだものである。

名古屋NGOセンター憲章（愛称：ステファニ憲章）

私たち名古屋NGOセンターは、開発・人権・環境などの問題、課題について、市民が主体となり、地球規模の視点で取り組む活動を支援します。その支援を通じて次に掲げる社会の実現をめざします。

●私たちがめざす社会

1. 平和な社会

多様な文化、価値観が尊重され、戦争、暴力、貧困、抑圧などから解放された平和な社会づくりをめざします。

2. 人権が守られる社会

人間の尊厳を尊重し、これに由来する自由と平等の権利が守られる社会をめざします。

3. 人々の参加によって創られる社会

あらゆる人々が自発的、民主的に社会づくりに参加、決定することのできる社会をめざします。

4. 調和のとれた社会

環境への負荷が少なく、人と自然が共存できる持続可能な社会をめざします。

5. 地球規模の視点で行動する社会

特定の地域・国のみにとどまらず地球規模の広い視点を持って、地域づくりに取り組む社会をめざします。

●私たちの果たす役割

私たちがめざす社会の実現に向けて、次の役割を実践します。

【基本的な役割】

1. ネットワーキング

地域の人々と世界を結び、地域に支えられるNGOをめざし、NGO間、あるいはNGOと人々、他セクター（企業・行政）間をつなぐネットワークづくりを行います。

2. コンサルティング

NGOへのコンサルティング活動を通じ、NGOの組織・運営・活動の向上をはかります。

3. 情報収集・発信

NGOに対する地域の理解と支援を広げるために、NGOの持つ情報、経験、ノウハウを収集し、地域やNGOへ積極的に発信します。

4. 調査研究

地域や世界の動きをモニターし、発掘した情報を整理、分析してNGO活動に役立てる活動を行います。

【発展的な役割】

1. 政策提言

政治や行政の場に、弱い立場におかれている人々を始め一般の人々、NGOの声を届け、あらゆる人々の声が政策決定に活かされるよう政策提言活動を行います。

2. 開発教育

地球上の多くの人々が直面する貧困・抑圧・差別などの問題と、私たち自身の暮らしのあり方との密接な関係について、理解を広げ、行動を起こすための活動に取り組みます。

3. 人材・活動育成

地域に眠っている潜在的な力に働きかけ、地域の人々のボランティア活動やNGO

活動を生み出し、育む役割を果たします。

● 私たちの行動規範

私たちは、活動を行う上で次の規範を守るよう努力します。

1. 人道的な立場

人道的な立場を最優先に考え、活動します。

2. 対等性, 多様性の尊重

ともに活動を行う人々と対等なパートナーシップを確立し、互いの価値観や文化を尊重し、多様性を認め合いながら協働します。

3. 地域に根ざした活動

顔の見える関係を築きながら、そこで得られた経験に基づいて活動のあり方を創造します。

4. 環境への配慮

日々の活動の取り組みにおいて、地球環境への負荷を最小限にとどめます。

5. 開かれた組織運営

広く市民の参加を求め、民主的な組織運営を行うとともに、自らの理念・目的、活動内容、活動評価などについて情報を公開します。

6. 自立した組織運営と適正な活動規模

活動内容および財政について、非営利、非政府の立場を活かせるよう自立した組織運営を行います。また、役割の実現に適した活動規模・予算規模を模索しながら活動します。

以上

新しい運動の要素

その他、新しい運動のヒントを、様々な市民運動の試みから学んでおこう。

まず、先述した「過去の乗り越えるべき運動スタイル」の反対物を、一般的に羅列して確認しておこう。すなわち、新しい運動の要素としては、「人権」論の深化を踏まえた運動、開放的組織、各個人の参加・参画、自己決定、常に造反・留保する権利の保証、運動参加者一人一人がどうなって欲しいのかを明確にする運動、あらゆる組織において組織を超えて一人一人が考えていくこと、各個人が自己決定をベースに自分でできることを具体的に考え行動していくこと、女性・若者の重視、明るい運動、自分ができることを明確にする運動、「誰でもできる優しい活動」を具体的に提起す

ること、対案を具体的に提起する運動（提案型）、お説教・啓蒙でなく自分が社会とどう繋がっているかのロールモデルとなること、運動を通じて各人のスピリチュアル度が上昇すること、運動の重要な「成果」に身近な生活の改善をいれること、政治的妥協などといって大きな組織に従属しないこと、専門家任せにしないこと、大きな従来の政治だけでなくむしろ身近な人権に敏感になること、身の回りでの生き方・暮らし方・人との接し方・話し方を大切にする事、生活の隅々にフェミニズムやエコロジーをいれること、身近な問題を政治として捉える視点、根源にまで立ち戻って考えるというラジカルさをもつこと、ダイナミックな運動、メディアを積極的に利用すること、アイデアの収集・資源化、運動の事業化（ツアー事業やプランニング事業、アイデアの企画化）、グッズ作成・販売、有料研修制度・資格制度づくり、マンパワーの派遣、指導員の職業化、などである。

いろいろな市民運動から新しい発想を学ぶ

個別の市民運動で、少し新しい要素が感じられるもので、目に付いたものをあげてみたい。

◆ ハーベイ・ミルク研究所： 性的少数者に関連する文化、政治、生活情報の講座を運営。

95年に開講し、98年には受講者は述べ7500人になった。

◆ WWN： 国際機関の権威を使って日本の女性差別を訴える。マスコミ・外国からの提言利用。

◆ 地域のユニオン（コミュニティユニオン）・個別組合：個人の処遇に対する、団体交渉、地労委利用、裁判闘争、行政交渉、学習会・集会、啓発活動、相談活動、インターネット活用、個別倒産・リストラに対抗する「自主管理」運動、「まともなもの」の生産運動、地域密着のレストラン経営など。

◆ 安積遊歩さん、障害者の運動： 価値ある運動・活動が、単なる「運動」と見られて、価値あるもの（職）と見られておらず、そのため障害者が自立できない、続かない、しんどい、自己肯定できないなどとなる。したがってカウンセリング活動（養成活動）を職業化させた。行政の行動計画の中にピアカウンセラーをいれた（その資格認定をおこなう権限を獲得）。自分が社会とどう繋がっているかのロールモデルとなる運動。自立観を身近・経済的自立から、自己決定・どう生きたいのかの自立へ変

えた。自分の身近な人との関係を通じて、社会と闘うという発想。

◆ 動物愛護団体（地球生物会議、動物実験廃止全国ネットワーク・アバネット）の運動： 有名人芸能人の利用、機関誌づくり、法改正への要望書づくり、誰でもできる3つの提案、誰でもできる優しい活動を目指す、ライフスタイル(本、料理、自然療法)の提起、講演会、パネル展、図書館での展示、交流会、学会参加、資料配布活動、情報収集活動・事例集づくり、メーリングリスト開設、メディアへの情報提供、新聞テレビ出演、水族館への手紙送付運動、国会議員へのロビー活動⇒法制定を目指す運動、パンフレット・資料集・ビデオ作り普及・配布活動、未来のペットショップ構想、『『新しい動物観』をつくろう』運動、実態調査、回りの人に意識向上を訴える運動、参考図書・グッズ販売、海外の団体との共同キャンペーン、海外への支援要請（首相への手紙など）、ペットショップ店頭で説明を求める運動、展示にたいして意見、手紙や電話で意見、行政に指導を求める、メディアへ投書し伝える、地域での広報活動、地元議員へ手紙(条例制定、改正)、国会議員へ手紙(法律制定)、ピラまき、ピケをはる、デモをする、歌を歌う等の運動、自主放送・広告、キャンペーン、市民的不服従、資金作り（製品販売、食品販売、宝くじ販売、スポンサーつきイベント、アルバイト、何かをやめて寄付してもらう、リサイクル、ガレージセール、一般寄付、品物もらう、理解の上で値引きしてもらう）

◆ 労働者協同組合、ワーカーズコープ、地域コミュニティ協同組合の試み： 市民とともに歩む非営利の事業・運動団体、労働者協同組合法案の提案、海外の協同組合の調査、交流、研究活動、リストラ社会に対抗する就労政策立案（雇用の創出）

◆ スローフード運動： 35カ国5万人 83年組織設立、89年インターナショナル・スローフード憲章を採択、90年以降、国際会議、98年に新たなインターナショナル・スローフード憲章、99年にスローフード・アワード（賞）設定、食を通じて人間性を取り戻そうという運動。イタリア人ジャーナリストがはじめた。良質な食のプロモート、食に関する文化・情報の交流。

◆ NPO「介護保険 市民オンブズマン機構・大阪」： 講座を開いて一般市民がオンブズマンとして活躍できるように養成講座を開く（米国の養成カリキュラムがモデル）。年間500人の修了者を出す計画。介護保険への苦情は国民健康保険団体連合会で受け付ける仕組みとなっているが、オンブズマンはもっと身近な要望や苦情を拾い上げてつなぐ役割。訪問などして苦情や要望があると事業者や家族とも話し合い、解決に

導く方法を提案する役割。

◆ 社会的諸問題の解決のためにビジネス的手法を用いようという発想の社会起業家（ソーシャルアントレプレナー）が増えつつある。利潤追求だけが目的でない企業、働き方の質を大事にする企業が、世界的に注目されている。日本でもこれから注目されていくだろう。

バイオ・リージョナリズム

生命地域主義（バイオ・リージョナリズム）⁴⁰⁾を主張しているピーター・バーグさんの考えも紹介しておこう。彼は、従来型の、献身的に力尽きるまで運動に貢献することは尊い貢献であったことを認めつつも、しかし、従来の環境保護型のエコロジー運動は、防衛的闘いであったため、状況のひどさを止めるためにもぐら叩きの、事後対応、対症療法的、緊急外来病院的、妥協的取引にならざるを得なかった。それは残されたものを救うだけの運動であり、プロテスト（抗議）中心で、限界をもっていたと指摘する。

それに対し、もっと積極的なアクティブな運動を彼は考える。それが、持続可能性を目指す経済と環境の両立、産業優先主銀の政治を変え、都市を含めて、地域生命圏それぞれの自然に対応して生態系を回復・再生・維持する「包括的なアプローチによる新しい生活の確立」をすすめることで、都市を、自然と共生する「生涯の場所」にしようとする運動、ただ抗議するのではなく、どうすればよいのか、よりよい方法を具体的に考え実践していく運動、すなわちバイオ・リージョナリズムである。

40) 地域は単に人がいる場所ではなく、その地域固有の土壌や地形、水系や気候、動植物をはじめ多くの自然の特徴を備えた独自性をもつ命の場、生きている場であり、人間はそうした生きている場全体の一構成である。したがってそこでの暮らし方、政治や経済、行政や制度・慣習も、そうした全体性と繋がって作られなければならないはずである。しかし産業社会、とくに都市部では、地域とは、均質なたんなる近代的生活の手段としての場所に過ぎなくなっており、どこでも同じであるが故に取替え可能で、人間と自然、人間どうしの結びつきはきわめて希薄になっている。でもそれでいいのだろうか。そう考えて、生きている固有性ある個々の人間が、地域との有機的な温かみのある関係を取り戻して「住んでいく」という営みをはじめていこうという指向が、生命地域主義（バイオ・リージョナリズム）である。ピーター・バーグ[1995]、辻信一[2001]参照。

ココマンさんの感覚に賛成

LPC（ラブピースクラブ）のHPの中にあったココマンさんのバランス感覚はとても示唆に富んでいると思う。「あなたが『セックスを語ろう』ということに、フェミニストは男にもてないヒステリーな女、と男たちがフェミニストをバカにしたようなのと同じような匂いを感じちゃった」という先輩フェミニストへの反論の文章である⁴¹⁾。かなり長いがぜひ紹介したい。

「……略……1つ分かったのは、私が彼女ほど「社会」に関心も期待も持っていない、ということ。例えば私が政治運動に身を投じて、きつと自民党はつぶれない。例えば私が一票の重みを訴えても、選挙方法は自民党の都合によって変わっていく。例えば私が命を張って、自分の身体に石油をかけてアメリカ大使館の前で死んでも、きつとブッシュは攻撃を辞めない。例えば私が「非嫡出子差別を辞めない限り、子どもは産まない」と言ったところで、法律はきつと変わらない。例えば私が「水子反対！産む・産まないはアタイが決める！」と叫んだところで、私のことを気のふれた可愛そうな女、と思う日本人はきつと確実に51%はいる。

そんな無力感に包まれ、「何をしてもどーせむださ、はん！」とタバコをふかしてる私がそれでも、投票は欠かさず、さらに何かがあれば署名したりなんだりしているのは、ただただ「知らないあいだに犠牲になりたくない！」って、思っているから。（あとは『選挙にも行かないで、エラソーな事言うな』と批判されるのを防ぐため、という小市民的な計算高さももちろんあるけどね。）宗男の顔に気持悪さを感じ、小泉の「決断」に吐き気をもよおしながら、それでも正気を保とうとしているのは、私たちが「制度」と「法律」で生かされているのだとしたら、制度と法律をよりよくしていかなくちやいかんでしょ、とも思うから。

でもね。一方で、そんなことに私の人生を費やしたくない、という思いもどこかである。というかそういう思いの方が強い。

41) LPCのリレーエッセイ「ひと呼んでヤリマン」の02年2月19日エッセイより。「ヤリマン」の感覚など、前提となる概念の理解も必要だし、ココマンさんのこのエッセイも一部を省略しているので、ぜひ他の方も含めて全文をみていただきたい。LPCのHP (<http://www.ummit.co.jp/love>) 参照。

心身ともに疲労するような社会運動には魅力を感じないの。偏差値重視の教育を受けているから、受験戦争に揉まれて生きてきてるから、結果が出るかどーか分からないことにエネルギーを費やすことに慣れてないのかも。

私1人が頑張ったところで、いや、例えば女が1万人頑張ったところで、しかもそれは中途半端に頑張るとか、仕事のあいまに頑張るとかのレベルじゃきつと無理な頑張りで、心も体もボロボロになるほど頑張ったところで、本当に変わることができるの？ 国会に出向いて行けば、本当に政治家は話を聞いてくれるの？ 署名運動をいくつすれば、誰に声が届くの？ そういう意味で、この国の政治には希望がないさ、と思っちゃうのよね。どう頑張ったって、日の丸、所詮、オヤジの国。スーツを着て、ネクタイを締めた、チンコ星人が動かしてる国。

国を選べるのなら、私はとっくにこの国を捨ててる。だけど、他の国を選んだところで、女が、ヤリマンが、気持よく自由で生きていける国なんてあるのかなあ。地球上で、ヤリマンにとってよりよい制度を持つ、よりよい社会なんて……。あるとは思えないんだけど。ちなみに私は都会で育ってるから、衛生的な場所でしか生活できない身体だし……。

そんな私は、「社会的なアプローチ」として、「セックスを語る」ことが「フェミニズム戦略として」「有効」かどうか、ということには無関心なの。オヤジを納得させるために言葉を紡いでいくことなんかには力を入れらんないんだよ。よりよい制度化なんて夢を、残念ながら持てないんだもん。

でも、そんな私だってモノを考える。例えば、このあいだ、フェミクラブでポルノについて考える機会があったんだけどね。その時、私は必死に考えたわよ。私にとってポルノってなあに？ って一生懸命、考えたのよ。ポルノで売られているのは「(イメージとしての) オンナ」。「(イメージとしての) オンナ」と私はどうつながっているのか。私は「(イメージとしての) オンナ」にどんな影響を受けているのか？ 私は「(イメージとしての) オンナ」をどう思っているのか？ 私は「(イメージとしての) オンナ」になりたいのか？ そう考えてくとき、やっぱり自分のセクシュアリティを語らなくちゃ言葉は産まれてこないじゃない？ 公に声にしなくても、自分に向き合わなくちゃ、本当には言葉が産まれてこないんだよねえ。

でもね、実際どんな事が話されたかと言えばね……、うーんあんまり覚えてない。とにかくコミュニケーションがうんちゃらかんちゃら、なんちゃらかんちゃら、こん

ちゃらんかんちゃら、という難しい言葉での理論武装。不思議だったの。フェミ的な文脈でポルノやセックスワークの話をしようにしてるのに、「部外者」のような顔をしてどーして語れるの？ 自分の身体やセクシュアリティをおいてけぼりにして、何を言おうとしているの？ どうして、きれいなオッパイをプルンプルンさせて喘ぐ女優でオナニーすることもある私の言葉を無視するの？？（くだらなすぎるから……という事はよく分かってるんだけど）

もちろんフェミ先輩の「社会的な事を論じるときに、自分のことを語る必然性はない。語らないからと言って批判するのは、フェミニズムが分からない男と同じだ」という言い分は、私に対する大きな勘違いだと思いながら（買いかぶり……とでも言うのかしら。私は社会運動をしているつもりはないのに……）、分からないわけじゃないのよ。公的な言葉と、私的な言葉って、違うものね。

「私はヤリマンです」なあって公言する政治家なんていないもんね。「私はセックスがとても好きで」なんて授業で語り出す大学教授なんていないものね。（いるかな？）でも、でも、でもね「私はゴルフが好きなんですけどね」とか「私はゴダールが好きでね」と語り出す教授や政治家はたくさんいると思うの。私の感覚で言うと、「私はゴルフが好き」なんて言うことは「私は3Pが大好きで」と語るよりも、さらにさらに恥ずかしいことなのね。さらに「ゴダール映画が好き」というのは、「私はスカトロが趣味なの」というのと同じようなじれったい恥ずかしさがあるのね。ああ、こんなことみんなの前で言っちゃっていいのかしらん、と身体をクネクネしたくなっちゃうよな……。キヤー。

あ、話がずれてきたけれど……。

つまりはね、「セックス」を語ることの「困難さ」って、いったい何なの？ ということ。特に女が「セックス」を語ることの「リスク」と「困難さ」、ない、わけじゃないでしょう？ それっていったい何なの？ そこを無視して、「語る事が全てじゃない。語らなくても社会的なアプローチは可能」と逃げることは、私にはできない、って思っちゃうの。

だから自分のことを全く語ることなく、セックスワークがなんちゃらんかんちゃら、とかいうフェミにはどこかで「うん？ あん？」という気分になっちゃうのは確か。でも、それが「男がフェミをバカにするのと同じ視線」というのは、違うんだけどな

あ。

だって、チンコはフェミを頭ごなしにバカにしてるだけだけど、私はただ身構えるだけだもん。この人、信用できるかな？ できないかな？ って。話を聞く準備あるもん。視線は対等のつもりなんだけど。

……略……

セックスは、いつでも私の身体の中にあるの。セックスは、いつでもどこでも、テレビの中でも、電車の中にでも、そこら中に「イメージ化」されてるじゃん。その「イメージ化」されたセックスは、いつでもどこでも私のマンコとつながってる。でもその「イメージ化」されたセックスを、ひとたびマンコ側から語ろうとすると、とたんに頭を叩かれる社会。そんな社会で、マンコが口をひらき、「あたいはヤリマン」と謳うように語りだすことに、私は自由を感じるの。誰ともつながっていない身体だからこそ、喜びと自由を感じるんだよ～！ とラララララと歌い、踊ることで、私は力を感じるの。

「豊かな性生活」は、私の身体の中にある。誰かともつながってなくても、私は自分でセックスを考え、語り、やることができるんだも～ん。常につながろうとしているチンコは、自分とつながりたがらないマンコに対して「お前、ホントのチンコを知らないくせに」なんてバカにする。よくある話だけど、そんなチンコと私をゴッチャにするのはやめて～！ 私は、口を閉ざしたマンコの事をバカになんかしらないもん。第一、構わないって。口を閉ざしてくせに、長いツメで私のマンコを傷つけるのは止めてよね！ と悪態はつくかもしれないけれど。私は私のマンコのことにしか興味がないの。「豊かな性」とか「ステキなパートナーシップ」なんて言葉は、私の嫌いな言葉リストのトップ10に入ってるくらいなんだから！！

何度も言うけど、私「自分の事を語らないフェミ」のことを、「あなたは自分のこと語らないじゃないか」とは批判できない。だって、私、「自分の事を語らないフェミニスト」=理論系の人々に救ってもらったこと、たくさんあるもん。私のよんだ頭にどれだけフレッシュな空気を吹き込んでくれたかしら、上野千鶴子センセ、って感じだもの。ただ、フェミ理論だけで生きられるほど、フェミ理論を手に入れただけで生きやすくなるほど、現実は甘くないのよね。

だから私、思うの。フェミ理論を身につけ「武装」できたような気分になってるフェミラーたちに出会うたびにね、「武装じゃないよ。闘いじゃないよ。私たちは、つ

ながるために、ソレを手に入れたはずだよ」って。フェミでつながれたのならば、私たちは自分たちの言葉で話をはじめましょう。自分たちの問題を、私が感じている痛みを、怒りをって。「語るべき内容」は自分の内側に、すでにたくさん、持っているんだもの。」（ココマンさんの引用おわり）

このココマンさんの文章を「政治に虚無的。非社会構造的で困ったちゃん」と読むのは誤読である。僕はとても政治的と思う。ココマンさん本人がそう思っているという意味ではなく、この文章が伝えている新しいセンス自体が、ラジカルに政治の闘い方を変えようと主張している、と思う。私を語るということ、自分の体のレベルでセックスを語るということが、新しい運動にとってとても大切なのだということを教えてくれる。闘いでなく繋がるために、外の権威でなく、自分の心と体の奥底の声を大事にしようという、とてもスピリチュアルな提唱だ。そこを読み込めないような「運動家」は、これからの豊かな〈スピ・シン主義〉的運動を担うことはできないだろうと思う。

とはいうものの、僕自身、模索中である。新しい方向性はわかるものの、その具体化はまだまだ探しつづけてはならないと感じている。諦めて何もしないことを、敗北という。まずは一人が、そして世界中のあちこちで、その一人が、そしてそのような人がたくさんあちこちで、自分の場所で声を出しつづけること。そこに希望がある。どうみてもひどい社会だ。そのことを憤っている、心優しい人々がたくさんいる。古いやり方の運動も、新しい運動も、繋がって目指す方向は同じになるだろう。世界は変わろうとしている。私達はその世界の構成要素である。

文 献

- ピーター・バーグ[1995]『ピーター・バーグとバイオリージョナリズム』グローバル環境文化研究所（GEC）
- フランス緑の党[2001]『緑の政策事典』緑風出版
- 伊田広行[1998]『シングル単位の社会論—ジェンダー・フリーな社会へ』世界思想社
- [2000a]「スウェーデンから学ぶもの——個人単位政策によって男女平等を達成した新福祉国家」『女性労働研究』37号（ドメス出版）
- [2000b]「新しい水準の人権概念を創設しよう」『職場の人権』3号
- [2001]「フェミニズム戦略としてのシングル単位論」『女性労働研究』39号

- [2002]「新しい人権へ」『大阪経大論集』53巻第2号
- [2003 a]「くぎりぎり」の実践へ——自分の振り返りと現在とこれから」『大阪経大論集』53巻第5号
- [2003 b]「くスピ・シン主義」的な個人の生き方を考える（上）」『大阪経大論集』53巻第6号
- [2003 c]「くたましい」が存在する場所——「混沌の闇世界」という領域への気づき」『大阪経大論集』53巻第6号
- [2003 d]『結婚してもシングル』洋泉社（近著）
- [2003 e]『スピリチュアル・シングル主義（仮題）』明石書店（近著）
- かわぐちかいじ [89-96]『沈黙の艦隊』（全32巻）講談社モーニングKC
- 諸富祥彦 [2001]『孤独であるためのレッスン』NHKブックス
- 諸富祥彦 [1997]『カール・ロジャース入門』コスモス・ライブラリー
- 牟田和恵 [2001]『実践するフェミニズム』岩波書店
- 森田ゆり [2000]『多様性トレーニングガイド』解放出版社
- 中野民夫 [2001]『ワークショップ』岩波新書
- 日本ホリスティック教育協会・吉田敦彦・今井重孝編 [2001]『いのちに根ざす日本のシユタイナー教育』せせらぎ出版
- 大阪経済大学人間科学部編 [2002]『人間科学への招待』（大阪経大学会）
- 柴田昌治 [1999]『なんとか会社を変えてやろう』日本経済新聞社
- 高橋歩 [2001]『LOVE & FREE』サンクチュアリ出版
- 田畑稔 [1994]『マルクスとアソシエーション』新泉社
- 辻信一 [2001]『スロー・イズ・ビューティフル』平凡社
- （本稿は、2002年度大阪経済大学特別研究費による成果の一部である。）